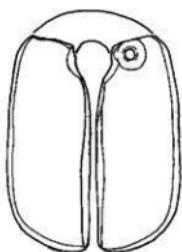


福岡市城南区

た じま
田 島 B 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1078集



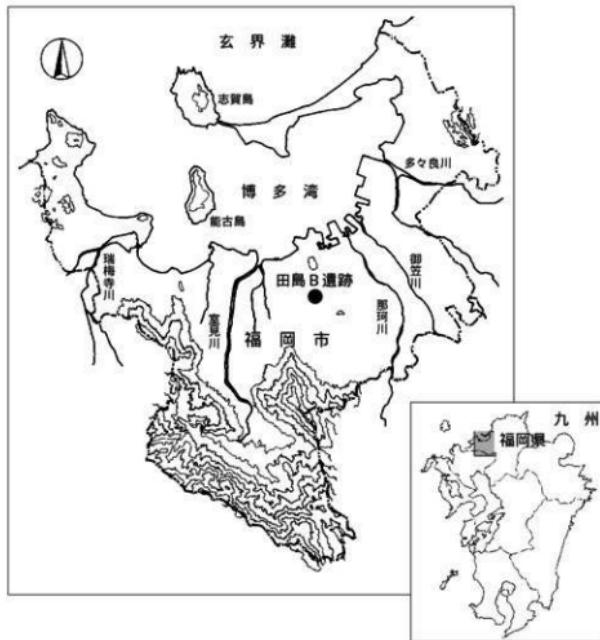
2010

福岡市教育委員会

福岡市城南区
た じま

田 島 B 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1078集



遺跡調査番号	7807		遺跡略号	TZB-1	
地番	福岡市城南区田島四丁目403		分布地図番号	62(小笠)	
開発面積	1,626m ²	調査対象面積	1,626m ²	調査面積	1,400m ²
調査期間	昭和53年(1978)11月1日～昭和54年(1979)2月17日				

平成 22 年
福岡市教育委員会

序

アジアの拠点都市として発展を続けている福岡市は、古来から海外の新しい文物や刺激を受容し、独自の文化や風土を作り上げてきました。市内には大陸との交流を示す遺跡が数多く残されています。

本書で報告する田島B遺跡は、城南区田島四丁目一帯に営まれた遺跡です。この地域は早くから住宅地として利用されていたことから発掘調査例はありませんでしたが、最近、道路拡幅や住宅地の再開発によって発掘調査例が増えて次第にこの地域の歴史を具体的に想像することができるようになりました。

今回報告する田島B遺跡第1次調査は、昭和53年度に発掘調査したもので予想もしなかった縄文時代の玦状耳飾や押型文土器など重要遺物が出土しました。

発掘から整理、報告に至るまで、地権者をはじめ関係各位に多大なご協力をいただきました。心から感謝を申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田裕嗣

凡 例

1. 本書は、福岡市城南区田島B遺跡における開発に伴い福岡市教育委員会が昭和53年度に国庫補助事業で実施した第1次調査の発掘調査報告書である。発掘時は小字名から「田島尾子森遺跡」と呼んでいたが、その後『福岡市文化財分布地図』作成に当たり「田島B遺跡」に含めしたことからこれを正式名とした。

2. 発掘調査は、飛高憲雄を調査主任として横山邦継、力武卓治が担当した。本書の執筆、遺物撮影、編集は力武が当たった。また次の方々に協力をお願いした。なお玦状耳飾は下村智別府大学教授、縄文土器は山崎純男氏（文化財部専門調査員）細石刃核は吉留秀敏氏（埋蔵文化財第2課）よりご教示いただいた。

田尻直子（整理技能員）土器、石器実測、トレイス、遺物観察表作成など 石井千絵里 鉄製品実測
板倉有大（埋蔵文化財第2課）石器実測（20点） 菅波正人（埋蔵文化財第2課） 押型文土器

3. 遺構はローマ字略号をつけ、記述する時はSC01竪穴住居跡、SK02竪穴のように遺構略号、遺構番号と遺構名を組み合わせている。各遺構は時代ごとに分け、次に遺構番号順に並べて記述した。遺物も同様に時代や器種順に並べている。

竪穴住居跡：SC 看戸穴：SU 竪穴：SK 掘立柱建物跡：SB ピット、柱穴：SP

4. 遺構図および遺物の実測図、遺物写真は、次のように縮尺を統一している。

遺構 竪穴住居：円形1/60 方形1/50 野戸穴 1/30 竪穴、掘立柱建物 1/50

遺物 土器、陶磁器 1/4（写真1/2、1/3）石器、土製品、鉄製品 1/1、1/2（写真1/3、1/4）

5. 調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、すでに福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2-1-9 092-571-2921）に仮収蔵、保管していたが、本書の発行によってすべての記録類を登録化したことから誰もが検索し、実見することが可能になった。ぜひ考古学などの学術研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

本文目次

第1章 はじめに	5
第1節 調査にいたるまで	5
第2節 調査の組織と構成	7
第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡	7
第2章 発掘調査の記録	12
第1節 調査の概要と区割り	12
第2節 表土層の遺物	15
第3節 検出遺構と遺物	15
1. 竪穴住居跡	16
2. 貯蔵穴	61
3. 穴	96
4. 掘立柱建物跡	105
第4節 福岡市内の押型文土器について 蒼波正人（福岡市教育委員会）	107
第3章 おわりに（その他の遺物）	115
出土遺物観察表	118

挿図目次

Fig.1 試掘土層模式図	5	Fig.13 SC01竪穴住居跡図	16
Fig.2 遺跡周辺と試掘トレンド位置図	5	Fig.14 SC01竪穴住居跡（南東より）	17
Fig.3 田島B遺跡と周辺遺跡分布図	8	Fig.15 SC01竪穴住居跡（南東より）	17
Fig.4 田島B遺跡の航空写真	9	Fig.16 SC01出土遺物図 土器	18
Fig.5 田島B遺跡と周辺地形（昭和初期）	10	Fig.17 SC01出土遺物	18
Fig.6 田島B遺跡と周辺調査図（現在）	11	Fig.18 SC01出土遺物図	19
Fig.7 建築計画図と調査グリッド図	12	Fig.19 SC01出土遺物	19
Fig.8 田島B遺跡調査地の航空写真（東南より）	13	Fig.20 柱穴配列の検討	19
Fig.9 田島B遺跡調査地の航空写真（北西より）	13	Fig.21 SC03竪穴住居跡（南より）	20
Fig.10 田島B遺跡第1次調査の遺構平面図	14	Fig.22 SC03竪穴住居跡（南西より）	20
Fig.11 表土出土の遺物図	15	Fig.23 SC03竪穴住居跡図	21
Fig.12 表土出土の遺物	15	Fig.24 SC03出土遺物図	22
		Fig.25 SC03出土遺物	23
		Fig.26 SC03出土遺物図	25
		Fig.27 SC03出土遺物	25
		Fig.28 SC04竪穴住居跡図	26

Fig.29	SC04出土遺物図	27	Fig.63	床面遺物出土状況(南西より)	53
Fig.30	SC04出土遺物	27			
Fig.31	SC04豎穴住居跡(南東より)	27	Fig.64	SC02出土遺物図	55
Fig.32	SC06豎穴住居跡図	28	Fig.65	SC02出土遺物	55
Fig.33	SC06豎穴住居跡(北西より)	29	Fig.66	SC08豎穴住居跡図	56
Fig.34	SC06出土遺物図	30	Fig.67	SC08豎穴住居跡(北より)	57
Fig.35	SC06出土遺物	31	Fig.68	SC02出土遺物図	57
Fig.36	SC06出土遺物図	32	Fig.69	SC02出土遺物	57
Fig.37	SC06出土遺物	32	Fig.70	SC09豎穴住居跡図	58
Fig.38	SC06出土遺物図	33	Fig.71	SC02出土遺物図	59
Fig.39	SC06出土遺物	33	Fig.72	SC02出土遺物	59
Fig.40	SC06出土遺物図	34	Fig.73	SC09豎穴住居跡(東南より)	59
Fig.41	SC06出土遺物	34	Fig.74	SC02出土遺物図	60
Fig.42	SC07豎穴住居跡第1面図	37	Fig.75	SC02出土遺物図	60
Fig.43	SC07豎穴住居跡(北東より)	37	Fig.76	豎穴住居跡と貯蔵穴、豎穴の配置図	61
Fig.44	SC07豎穴住居跡第2面図	38			
Fig.45	SC07豎穴住居跡(北より)	39	Fig.77	SU01貯蔵穴図	63
Fig.46	SC07豎穴住居跡第2面(北より)	39	Fig.78	SU01貯蔵穴(南東より)	63
Fig.47	SC06出土遺物図	40	Fig.79	SU01出土遺物図	64
Fig.48	SC06出土遺物	41	Fig.80	SU01出土遺物	64
Fig.49	SC06出土遺物図	42	Fig.81	SU02貯蔵穴図	65
Fig.50	SC06出土遺物	42	Fig.82	SU02貯蔵穴(南より)	55
Fig.51	SC02豎穴住居跡図	44	Fig.83	SU02出土遺物図	66
Fig.52	SC02豎穴住居跡(南東より)	45	Fig.84	SU02出土遺物	67
		Fig.85	SU02出土遺物図	68	
Fig.53	SC02豎穴住居跡床面下(南東より)	45	Fig.86	SU02出土遺物	68
		Fig.87	SU02出土遺物	69	
Fig.54	SC02出土遺物図	46	Fig.88	SU03,04貯蔵穴図	69
Fig.55	SC02出土遺物	47	Fig.89	SU03,04貯蔵穴(南より)	70
Fig.56	床面遺物出土状況下(南東より)	48	Fig.90	SU03,04出土遺物図	70
		Fig.91	SU03,04出土遺物	70	
Fig.57	SC02出土遺物図	49	Fig.92	SU05貯蔵穴図	71
Fig.58	SC04出土遺物、二重口縁壺(21) 出土状況	49	Fig.93	SU05石器出土状況	71
Fig.59	SC02出土遺物図	50	Fig.94	SU05貯蔵穴(南西より)	71
Fig.60	SC02出土遺物	51	Fig.95	SU05出土遺物図	72
Fig.61	SC05豎穴住居跡図	52	Fig.96	SU05出土遺物	72
Fig.62	SC05豎穴住居跡(南東より)	53	Fig.97	SU02出土遺物図	73
		Fig.98	SU02出土遺物	73	
		Fig.99	SU10貯蔵穴図	74	

Fig. 100 調査区北西隅の貯蔵穴と竪穴	74	Fig. 138 SU19出土遺物図	95
Fig. 101 SU10出土遺物図	75	Fig. 139 SU19出土遺物	95
Fig. 102 SU10出土遺物	75	Fig. 140 SU20貯蔵穴図	96
Fig. 103 SU11貯蔵穴図	76	Fig. 141 SK06竪穴（北東より）	96
Fig. 104 SU11貯蔵穴（南より）	76	Fig. 142 SK06竪穴図	96
Fig. 105 SU11出土遺物図	77	Fig. 143 SK06出土遺物図	97
Fig. 106 SU11出土遺物	77	Fig. 144 SK06出土遺物	97
Fig. 107 SU11出土遺物	78	Fig. 145 SK06出土遺物	98
Fig. 108 SU11出土遺物図	79	Fig. 146 SK07竪穴（北より）	98
Fig. 109 SU11出土遺物	79	Fig. 147 SK07竪穴図	98
Fig. 110 SU13貯蔵穴図	80	Fig. 148 SK07出土遺物図	99
Fig. 111 SU13貯蔵穴（北より）	80	Fig. 149 SK07出土遺物	99
Fig. 112 SU13出土遺物	80	Fig. 150 SK07出土遺物	100
Fig. 113 SU13出土遺物図	81	Fig. 151 SK07出土遺物	100
Fig. 114 SU13出土遺物	81	Fig. 152 SK07出土遺物図	100
Fig. 115 SU13出土遺物	82	Fig. 153 SK08、09、12、16竪穴図	101
Fig. 116 SU13出土遺物図	82	Fig. 154 調査区北西隅の貯蔵穴と竪穴	
Fig. 117 SU13出土遺物	82	Fig. 155 挖立柱建物跡配置図	102
Fig. 118 SU14貯蔵穴図	83	Fig. 156 SB01掘立柱建物跡図	102
Fig. 119 SU14貯蔵穴（西より）	83	Fig. 157 SB02掘立柱建物跡図	103
Fig. 120 SU14出土遺物図	84	Fig. 158 遺構実測風景	103
Fig. 121 SU14出土遺物	85	Fig. 159 SB03、04掘立柱建物跡図	104
Fig. 122 SU14出土遺物	86	Fig. 160 SU15貯蔵穴出土押型文土器図	
Fig. 123 SU14出土遺物図	87	Fig. 161 押型文土器（左：内面、右：外面）	106
Fig. 124 SU15貯蔵穴図	87	Fig. 162 福岡市域の主な縄文早期の遺跡	
Fig. 125 SU15出土遺物図	88	Fig. 163 その他の遺物図	108
Fig. 126 SU15出土遺物	89	Fig. 164 その他の遺物	109
Fig. 127 SU17貯蔵穴図	90	付図	
Fig. 128 SU17貯蔵穴（南東より）	90	田島B遺跡第1次調査遺構平面図（縮尺1/100）	
Fig. 129 SU17出土遺物図	91		
Fig. 130 SU17出土遺物	91		
Fig. 131 SU18貯蔵穴図	92		
Fig. 132 SU18出土遺物図	92		
Fig. 133 SU18出土遺物	92		
Fig. 134 SU19貯蔵穴図	93		
Fig. 135 SU19貯蔵穴（南より）	93		
Fig. 136 SU19出土遺物図	94		
Fig. 137 SU19出土遺物	94		

第1章 はじめに

第1節 調査にいたるまで

昭和52年10月21日付けで、船越康男氏より福岡市西区田島4丁目403地内（1,626m²）における埋蔵文化財の事前審査申請書が福岡市教育委員会文化課に提出（受付番号77-102）された。

申請地周辺は、個人住宅やスーパーなどが建ち込んですでに開発が終わっていることから、これまで緊急調査例はなく、また表探なども行えないことから遺跡分布を知る手掛かりは皆無に近かった。しかし昭和初期の地図によると、南の油山から北流する桶井川左岸には狭いながらも低平地が広がっており、ここに向かって南西の金山（標高54.8m）から低い丘陵が北東方向にのび、申請地はちょうどその先端部に位置していることが分かった。

弥生時代には、桶井川沿いの低平地は水田化していたと容易に想像ができる、遺跡立地としては好条件を備えている。このような地形や環境から遺跡存在の可能性はきわめて高いと考えられた。

このため申請者に試掘の必要があることを連絡し、翌53年になって了解が得られたことから同年2月1日に試掘を実施することになった。

申請地には、家屋はないものの畠地として使用されており、かつ植木

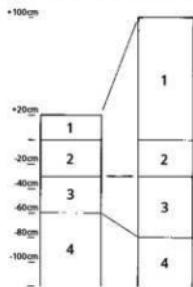


Fig.1 試掘土層模式図

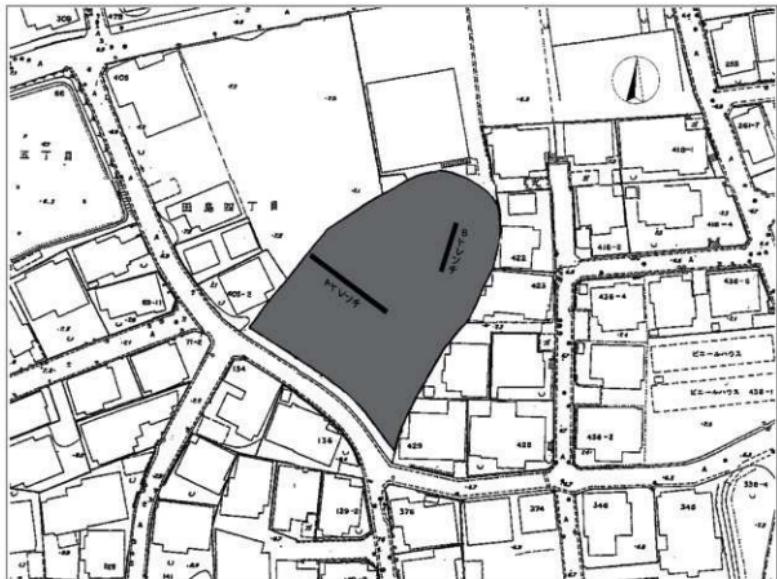


Fig.2 遺跡周辺と試掘トレンチ位置図（縮尺1/1,000）

などがあつて全域の様子を把握することは困難であったが、図のようにパワーショベルを用いてA、Bトレンチ2本を設定し、土層観察と遺構検出作業を行つた。

2本のトレンチとも基本的な土層は、1層は最近の盛り土、2層は旧表土と思われる畑土、3層は黒褐色粘質土、4層は黄褐色粘質土のローム面である。

A、Bトレンチの土層を比較すると、BトレンチはAトレンチに比べ厚い盛り土で覆われ、ローム面は約20cmほど低くなっている。つまり昭和初期の地図から推測したように地形は北東方向に傾斜しているようだった。またその地図と同様に丘陵の先端で舌状になっている可能性が予測された。トレンチからの出土遺物は、2、3層中から弥生時代中期の弥生土器を主にして、中、近世の中国製や国产の陶磁器片が見つかった。トレンチ幅が狭いことから確かな遺構検出は困難であったが、4層ローム面に掘り込まれた小ピット数個を確認した。これらの結果を総合すると申請地全面が埋蔵文化財包蔵地であると判断された。

この試掘結果を申請者の船越氏（以下地権者）に連絡し、開発工事に当たっては事前に発掘調査が必要であることを報告した。その後、地権者の開発計画に変更予定はなく、発掘調査実施について具体的な協議を重ねることになった。

この昭和53年は、前年から少雨傾向が続いていた。梅雨や台風シーズンを迎えても一向に降雨に恵まれず、「福岡大砂漠」と呼ばれる程の大渋水に見舞われた。学校も市民生活も大きな影響を受け都市機能はマヒした。市内各所で実施していた発掘現場でも、炎天下で異常に乾燥した地面との格闘を強いられた。

福岡市は昭和47年に政令指定都市となって、急激な都市化、郊外農村部での大型開発が目白押しで、それに比例して国庫補助金対象となる個人住宅や共同住宅などの緊急調査も急増した。教育委員会文化課では、昭和50年度から博多区板付、西区（現早良区）有田・小田部、西区（現早良区）四箇田など重点地区を中心にして市内をいくつかのゾーンに分け、調査担当職員を複数配置して臨んでいた。この他に高速地下鉄関係や公共、令達事業に伴う発掘調査もあり、これら都市開発が支障なく円滑に進むために15人の文化財専門職員が年間を通じてフルに発掘現場に出ても追いつかない状況であった。昭和53年は、飛高をチーフにして、横山、力武の3人が緊急調査班として主に西区（現在は早良区）有田遺跡群を中心にして市内全域をカバーすることになった。

年度当初の5月からまず有田遺跡群第9次調査から着手し、事前審査班と協議、調整を密に図りながら緊急度に応じて市内各所の緊急調査に3人が分散したり、また集合して効率よく発掘調査を行うことにした。

同年秋になって地権者の建設準備が進み文化課との協議がようやく整って、国庫補助事業として同年11月1日より3か月の期間で発掘調査をスタートすることが決定した。しかし横山と力武は西区田隈中学校建設に先立って同敷地内の高柳遺跡を発掘調査中で、その間に西区夫婦塚古墳の石室実測、さらに有田遺跡群第16次調査が控えていた。このため班チーフの飛高一人が先行して田島B遺跡第1次調査（以下本調査と記す）の条件整備や表土剥ぎに掛かることにした。

申請地は排土の持ち出しを行わない制約から何区画かに分けて発掘と遺構実測、撮影を繰り返す方法となった。その排土移動期間中を利用して、横山と力武が担当している高柳遺跡や有田遺跡など別遺跡の作業工程を調整、中断し本遺跡に合流し遺構実測を一気に済ませる工夫をした。このような方法で、同時に発掘調査した遺跡は12か所、その調査面積は7,919m²に及んだ。

このような厳しい状況から途中何度も調査速度が鈍り調査期間がややのびる結果となり、昭和54年2月17日に無事に発掘調査を終えることができた。これは地権者をはじめ設計、工事関係者の方々の多大なご理解とご協力があったからこそ果たせたことである。ここに記して感謝の意を表します。

第2節 調査の組織と構成

昭和53年度（1978） 発掘調査

調査委託 船越康男

調査主体 福岡市教育委員文化部文化課（埋蔵文化財係）

調査総括 課長 井上剛紀 係長 三宅安吉、柳田純孝

事前審査 柳沢一男、井澤洋一 調査庶務 古藤国生

調査担当 飛高憲雄、横山邦継、力武卓治（報告） 整理作業 溝口博子 花畠照子

平成21年度（2009） 資料整理、報告書作成

整理総括 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫 調査第1係長 杉山富雄

整理事務 古賀とも子 山本朋子 整理補助 田尻直子（整理技能員）

第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡

福岡市は、玄界灘に向かって両翼を東西に大きく広げた鳥の形に似ているが、海岸部に形成された平野は、南の油山から西公園のある荒津山方向にのびた平尾丘陵によって東西に分けられている。

東の福岡平野には、御笠川と那珂川が博多湾に向かって北流している。西側の早良平野には室見川が北流して、これら河川流域には数多くの遺跡が営まれている。特に水稻耕作が始まる弥生時代になると、福岡平野では環溝集落の板付遺跡、奴国を中心と推定される比恵、那珂遺跡群がある。早良平野では環溝集落の有田遺跡群や豊富な青銅器類を副葬していた吉武高木遺跡などが出発している。発掘調査の増加に伴って東西二つの平野での弥生社会の内容や動向が次第に明らかになりつつある。

一方、油山から両平野部に向かって派生した数多くの丘陵やこれら丘陵に挟まれた谷部や低平地は、昭和30年代前後から住宅地化するために遺跡の発掘調査例はきわめて少なく、しかもこれらの開発造成で削平、消滅していることが予想され、遺跡分布や遺跡内容を知る情報はきわめて限られていた。

しかし、昭和50年代前後になって郊外での宅地造成地が終わり、またマンション建設など開発の内容が変化するに従い住宅密集地での再開発が行われるようになった。これまで遺跡の存在が知られていないかった丘陵や造成で埋められていた谷部での発掘調査例が知られるようになってきた。

本遺跡のある城南区田島周辺もその好例で、平成9年以降になって本遺跡以外に8件の発掘調査が行われている。8件の遺跡はすべて調査報告書を発行している。その出土遺物と記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理され、さまざまな分野で活用されている。

従ってこの周辺の地形や分布遺跡については、これらの調査報告書に詳細に記されていることから本書では省略し、田島B遺跡についてのみの記述にとどめる。

本調査区を含む田島B遺跡は、城南区田島四丁目にあり約8万m²の面積である。現在の航空写真では、元の地形を知ることはできないが、新旧の地図を持って実際に現地を歩くとそれなりに高低差を体感できる。よく見ると丘陵と低平地との境に現在の道路が通っていたり、今は密集している住宅地も等高線に沿って区画されていることが分かる。特に本遺跡の舌状の平面形は、まさに古い地形をそのまま残しており、実際の発掘調査でも確認できた。本来の地形が現代の区画として残っていたのはまさに奇跡的と言えよう。

なお田島B遺跡では、本遺跡発掘後31年間に発掘調査は実施されていない。これは個人住宅が密集し、また地域住民に生活環境を守る意識が高く、マンションなど高層ビル建設が他地域に比べ少なかったことが一因であろう。

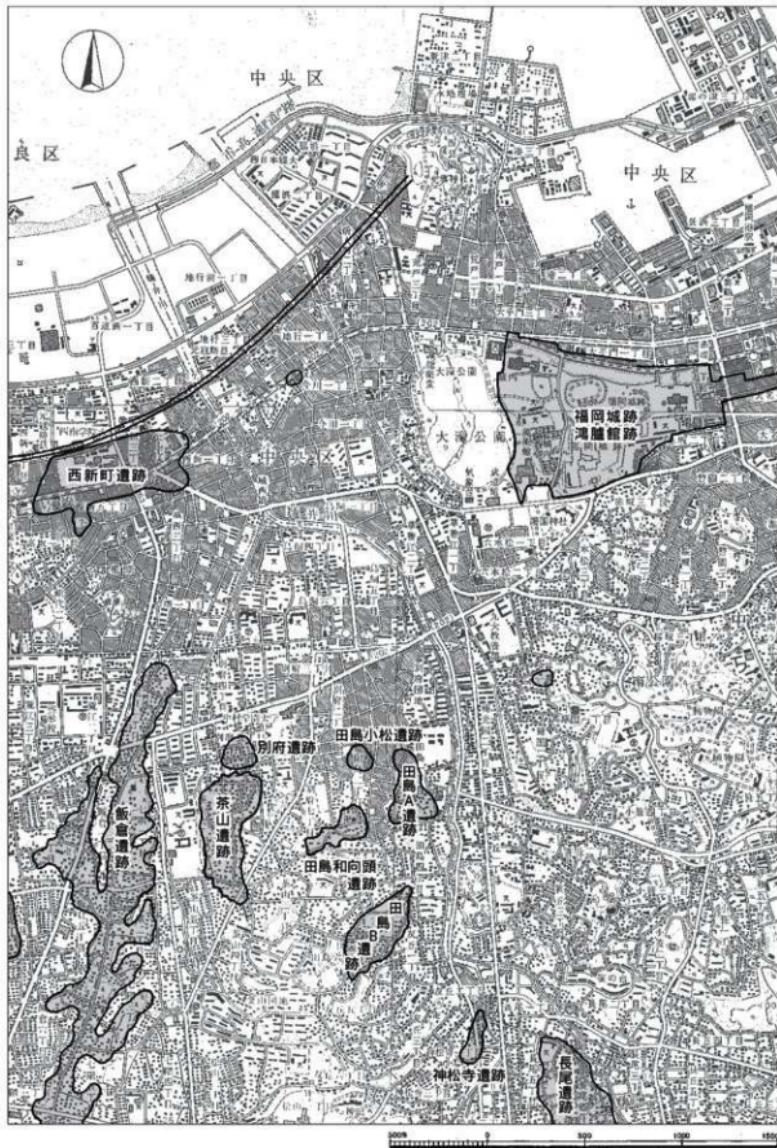


Fig.3 田島 B 遺跡と周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

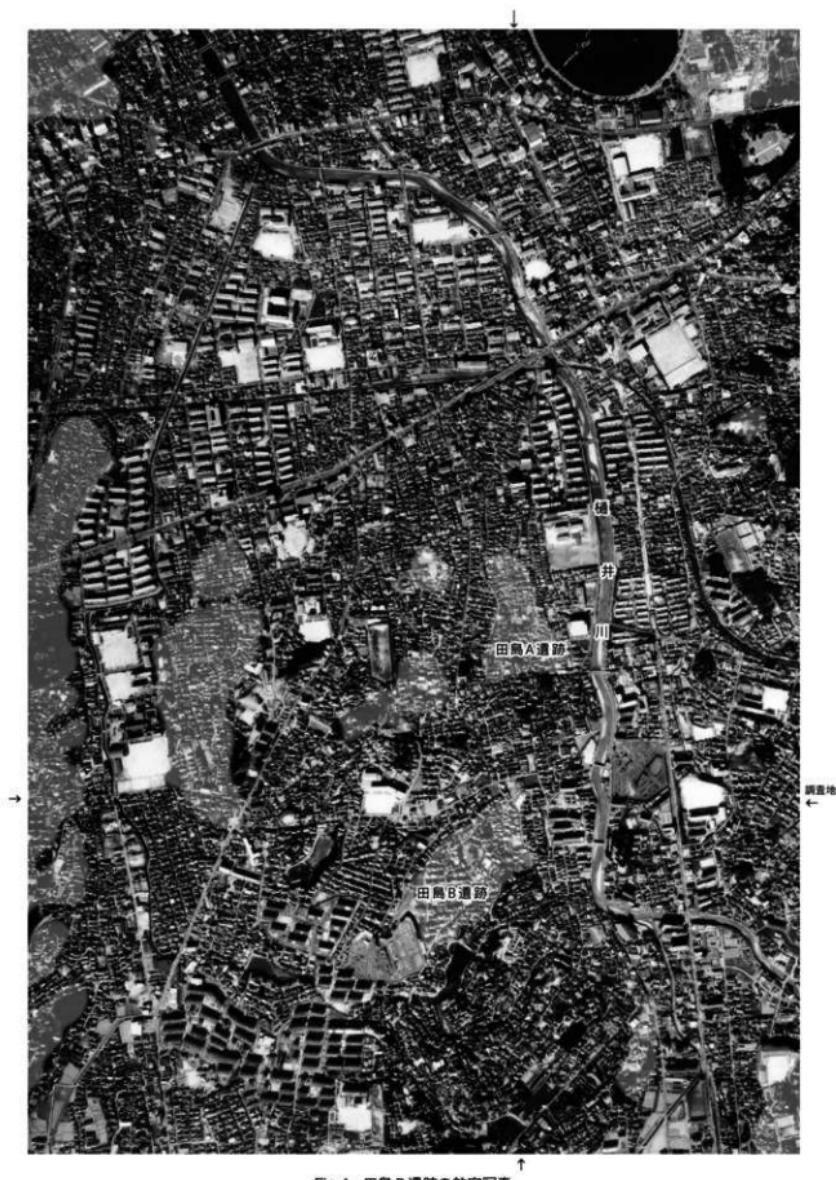


Fig.4 田島 B 遺跡の航空写真

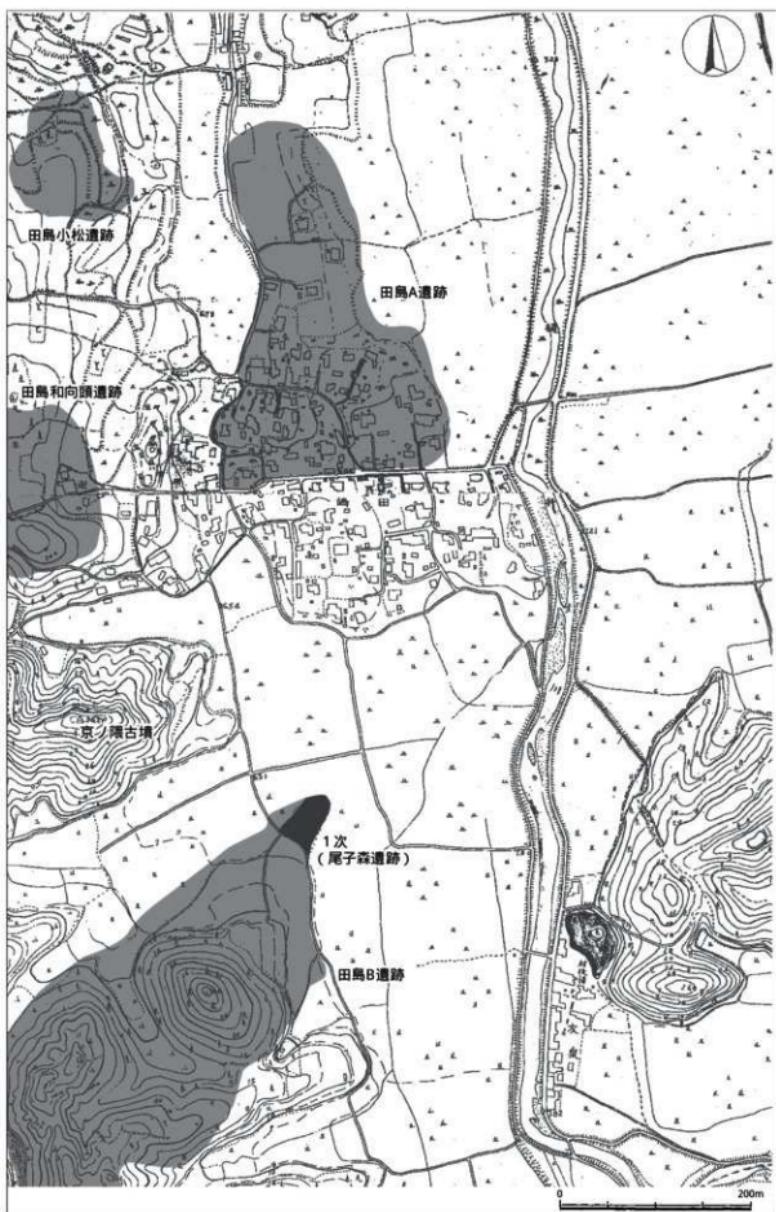


Fig.5 田島 B 遺跡と周辺地形(昭和初期。縮尺1/5,000)

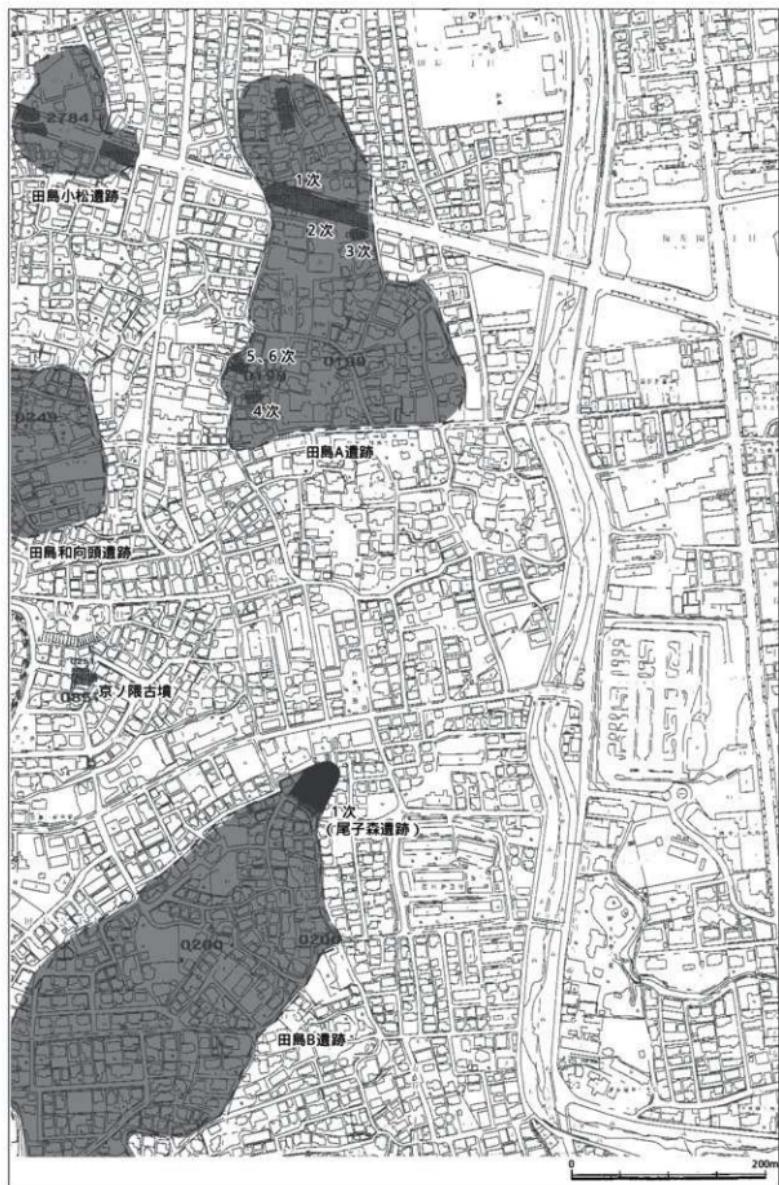


Fig. 6 田島B遺跡と周辺調査図(現在。縮尺15,000)

第2章 発掘調査の記録

第1節 調査地のグリッド

舌状となった調査区の長軸は南西から北東にのびてありその長さは約51m、南側基部幅は約40mを測る。建築設計図では、この区画長軸に合わせて南北方向の4階建てビル(39m×6m)1棟が予定されていた。建物は敷地の東側に片寄り、ビル前に当たる西側には駐車場や駐輪場が配置されている。

2本の試掘トレンチによると、弥生時代から中、近世までの遺構が広がっている可能性があることから、申請地全面の表土剥ぎをすることにした。しかし表土や発掘による排土の場内移動の制約から一度に表土を剥ぐことができず、また調査事務所のプレハブとトイレの設置場所も確保する必要があった。このため道路より最も奥に当たる北寄りに小区画を設け、次第に拡張することにした。

調査グリッドは、舌状地形やビル方向に合わせて設定すべきであったが、表土剥ぎ作業に合わせて横軸線をN-55°-E方向にとり、5m方眼のグリッドとした。北東隅から西にアルファベットのA、B、C、南に数字の1、2、3として北東隅グリッドをA-1、南西隅グリッドをL-9と呼んだ。

第2節 表土層の遺物

表土剥ぎでは、試掘の所見と同じように弥生時代以降の遺物が出土した。そのうち図化可能な陶器破片2点を図示した。これらの遺物は市内遺跡では特に珍しい遺物ではないが、この地域では初の発掘であることから、新しい時代の遺構検出にも細心の注意を払い発掘作業を進めた。

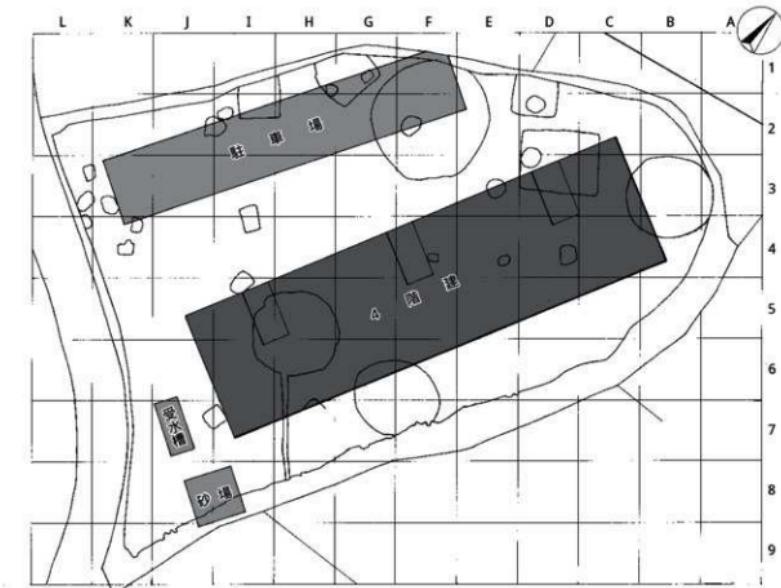


Fig.7 建築計画図と調査グリッド図(縮尺1/400)



Fig.8 田島B遺跡調査地の航空写真（東南より）



Fig.9 田島B遺跡調査地の航空写真（北西より）



1は中国龍泉窯産の青磁碗。高台の削り出しあは低く、濃灰緑色の釉は高台の外側まで流れる。高台内には露胎で一部に釉が流れている。見込みには特に文様はない。2は古伊万里の鶴首染付瓶、胴部の最大径は8.5cm。緻密な胎土でコバルトの発色も良い。

第3節 検出遺構と遺物

約3か月に渡る発掘調査によって検出、確認した遺構は、竪穴住居跡9軒、貯蔵穴20基、掘立柱建物跡4棟、その他に多数のピットである。遺物はコンテナ77箱総重量401kgが出土した。

これら各遺構は発掘順に番号を付け、出土遺物のナンバリングもその遺構番号を記した。凡例で記しているように本書では各遺構とも大きく時代ごとに分けて記述している。この際、混乱を避けるために遺構番号は発掘現場での呼び方を踏襲した。20基の貯蔵穴については、資料整理時にその形状や出土遺物によって弥生時代の貯蔵穴と古墳時代以降の竪穴に分けた。この場合も遺構番号は変更していない。また掘立柱建物跡については、調査後に作成した遺構配置図で直角配置のピットを捲すと数多くの棟数を結ぶことができるが、本書では発掘現場で柱穴の配置、柱間の測定などを行った確実性の高い4棟のみを掲載報告している。切迫した調査時間の制限があったとは言え、現地での認定作業や検討不足は否めない。横山と力武は他現場との掛け持ちで何度も出入りしたことから、遺構観察や細かな記録を怠ったことが悔やまれる。なお各遺構の記述と遺構図、出土遺物を見開き頁で一度に見るように割り付けたために出土遺物の細かな観察結果が十分に記述できず、また口径、器高等の法量を省略している。その欠を補うために最後に遺物観察表を作成している。

1. 竪穴住居跡

発掘現場では壁や壁溝の一部、柱穴の配置やまとまりなどから判断して竪穴住居跡の可能性がある場合は積極的にSCの遺構番号を付けて発掘作業を行った。認定したのは9軒を数えるが、いま細かく検討するとSC03、SC04、SC08については、形状や規模、そして発掘方法にやや問題を残した。

出土遺物は、ほとんどが破片となっているが、実測可能な遺物、特に器種や時期を示す遺物については細片でも実測するように努めた。したがって実測、掲載した図は、各竪穴住居跡の出土遺物の総量や器種の割合を示すものではないことを先に断っておく。

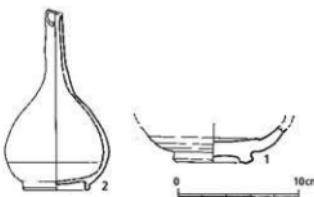


Fig.11 表土出土の遺物図 (縮尺1/4)



Fig.12 表土出土の遺物

SC01竪穴住居跡

調査区の最北端部B-3グリッドを中心にした位置で検出した。壁の高さは10cm前後しか残っていないが、カーブしながら円形にのびること、その湾曲内側の床面と思われる部分には、中央に深く大きめのビット（以下中央土壙と呼ぶ）を囲んで30数個のビットが密集していることから竪穴住居跡と判断した。しかし円形の壁の東側半分は削平されて痕跡を留めていない。またその推定部は調査区外に出ている。東側壁の湾曲からするとやや南北に長い円形に復元できる、その大きさは南北約7.1m、東西約7.0mで、面積は39.5m²となる。床面の50数個のビットは、直径30cm～50cmの大きさで、深さは70cm前後である。これらは壁より約1m内側にあり、恐らく主柱は壁に沿って円形に配置された構造と思われるが、ビット内の埋土はどれも同じ茶褐色土で同一時期の主柱穴を選ぶことは困難である。その個数からすると数度の建て替えが予想されるが、その回数を明らかにすることはできない。また中央土壙にも特に焼土は認められなかった。

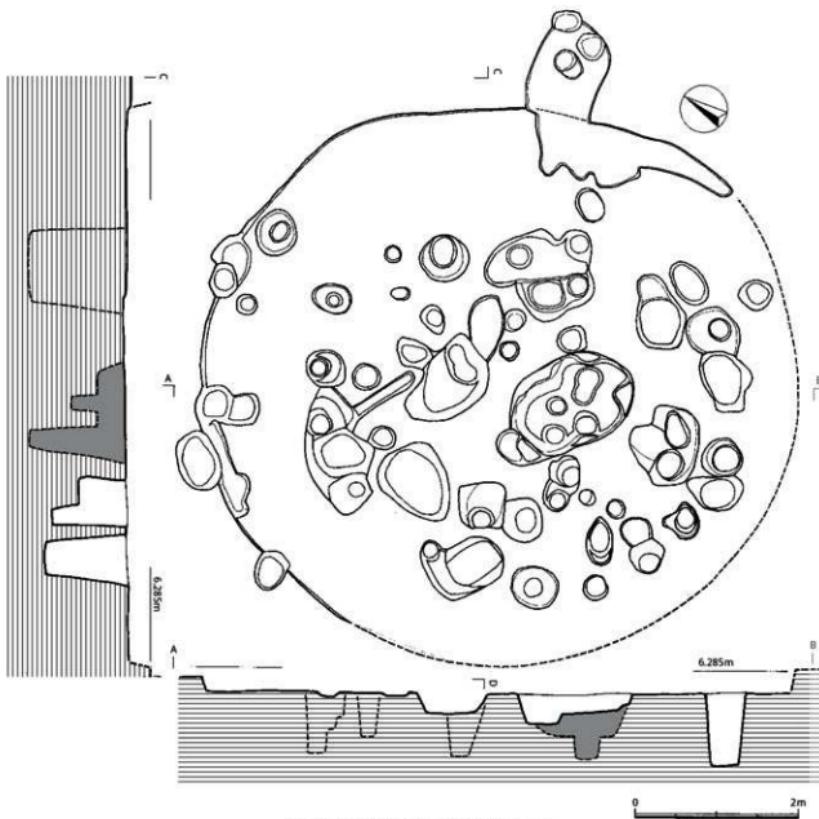


Fig.13 SC01竪穴住居跡図（縮尺1/60）



Fig.14 SC01竪穴住居跡（南東より）



Fig.15 SC01竪穴住居跡（南東より）

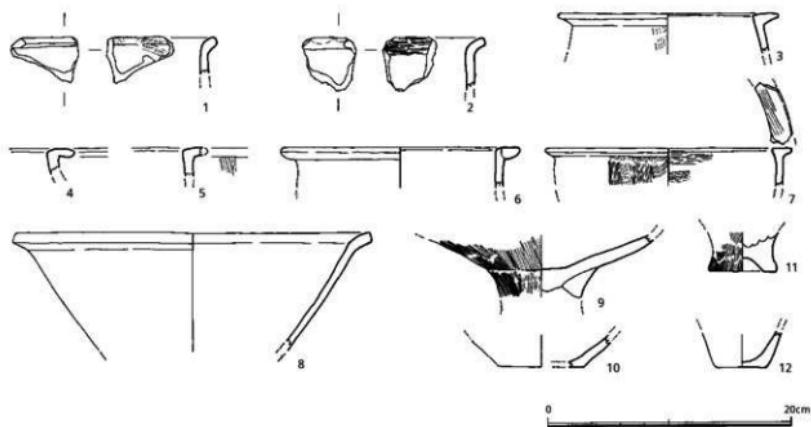


Fig. 16 SC01出土遺物図 土器（縮尺1/4）

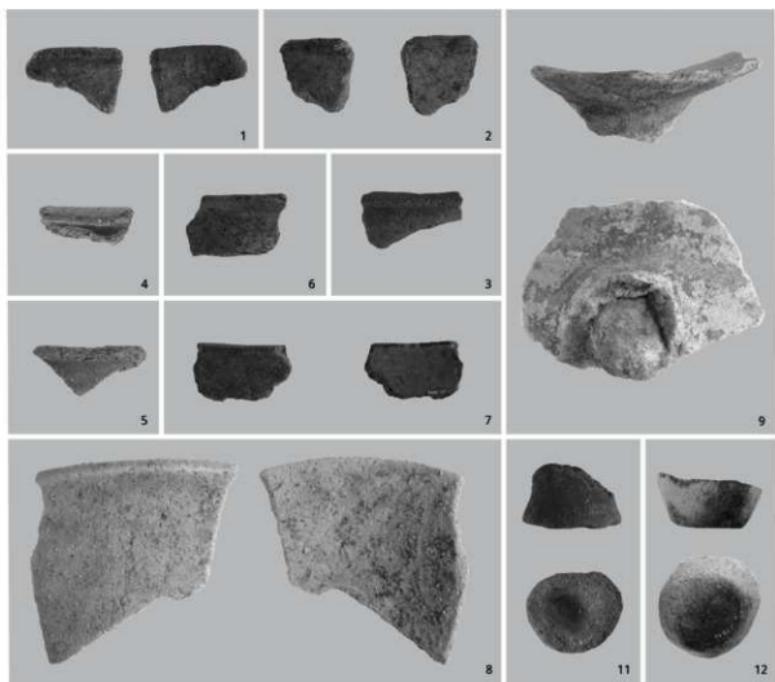


Fig. 17 SC01出土遺物



Fig.18 SC01出土遺物図 (縮尺1/1)

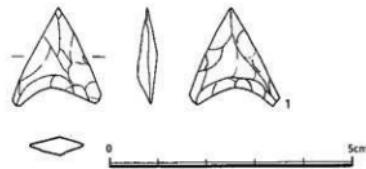


Fig.19 SC01出土遺物

出土遺物 使用、廃絶時の状態を示す床面直上で出土したものはない。また壁高が10cm前後しかなく、恐らく後世の擾乱も受けたとみられ、時期の異なる遺物が混入している。土器のほとんどは細片となり出土量は少なく、コンテナ2箱分9.0kgである。この内、土器12点と石器1点を実測した。

土 器 1、2は弥生前期の櫛、いずれも如意形口縁で口径不明。口縁は斜め上方の引き出しが短く、端部を断面方形状におさめている。3～7は逆L字形の口縁を持つ弥生中期の櫛。いずれも破片で、6と7のみが辛うじて口径を推定できる。6の口縁部は粘土貼り付けが器壁断面に現れている。帯状ではなく丸みのある粘土紐のように見える。口径は19.3cm。7の口縁部は外側への張り出しあは短いが内側にも突き出して平坦部を作っている。内外面ともにタテ、ヨコのハケ目調整。8は口径が30cm近い鉢。底部を欠くが直線的に大きく開き、如意形の口縁部が付く。器面は内外とも摩滅しているがナデ調整。胎土に3mm大の砂粒を含んでおりやや粗い。器形の特徴から弥生前期とした。9は高環で、器壁断面から坏部と脚部の接合方法がよく観察できる。外面はタテハケ目調整を加える。10～12は底部。10は壺の平底。砂粒の少ない胎土である。11は深い上げ底で弥生中期城ノ越式の櫛である。底径は5.6cm。12は底径4.2cm。ミニチュア土器であろう。

石 器 1は安山岩製の凹基式石鎌。全長2.0cm、基部1.75cmで正三角形に近い。この他に約145gの黒曜石剥片が出土している。

これらの出土遺物や遺構の形状からSC01は弥生中期の竪穴住居跡であるが、細かな時期までは確定できない。

SC03竪穴住居跡

調査区の中央より北西縁に当たるE～G-1～3にかけて茶褐色土の埋土落ち込み数本が湾曲してのび、またピットが集中していることから竪穴住居跡が数軒重なっていると予想された。このため埋土の観察を慎重に行い、またピットには白線を引いてその配置を検討した。しかし全体に削平を受けて残りが悪いことから決め手を欠いて全形を掴むことができずに、最終的にはSC03とSC04の2軒の竪穴住居跡と認定した。SC03は、壁の湾曲やピットの位置などから直径約10.5mの円形竪穴住居跡に復元した。しかし、壁の高さは15cmしかなく、また全周の約1/3が南側に残っているに過ぎない。またその途中で屈曲しており、緩やかな曲線ではない。床面はわずかに北側に向かって傾斜しておりその差は18cmである。



Fig.20 柱穴配列の検討



Fig.21 SC03豊穴住居跡（南より）



Fig.22 SC03豊穴住居跡（南西より）

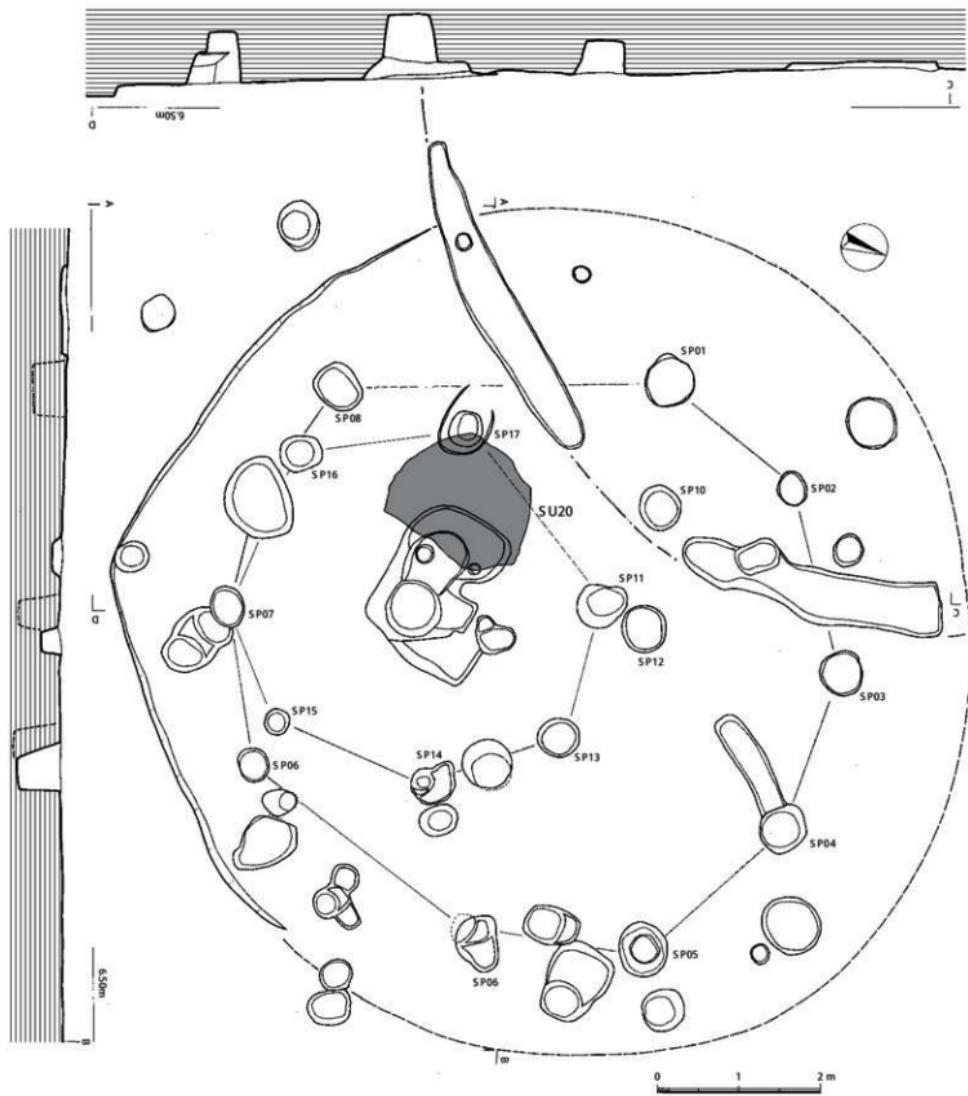


Fig.23 SC03壁穴住跡図(縮尺1/60)

復元した屋内には、いま30数個のピットがあるが、壁より約30~70cm内側にあるSP01~SP08を結ぶとほぼ円形に近い。ところがこの内側にもやや南壁に偏って7~10個のピットがある。いま中央土壤と考えられるSP18を中心にして円形に囲むピットを選び結ぶとSP11~SP17が直径約4mの円形となる。これらを柱穴として壁を復元すると約8mとなる。この大きさはSC06やSC07に近く、竪穴住居跡として蓋然性は高い。

とすると外側に結んだSP01~SP08のピットは、恐らく約3m程北側に向かって拡張した際に掘り込まれたと推測した。その時、中央土壤は新たに屋内の中心ではなく元の位置のままであったことになる。もう一つの推測であるが、西寄りに弧状の浅い落ち込みが2か所にあり、これを結ぶとSC03と

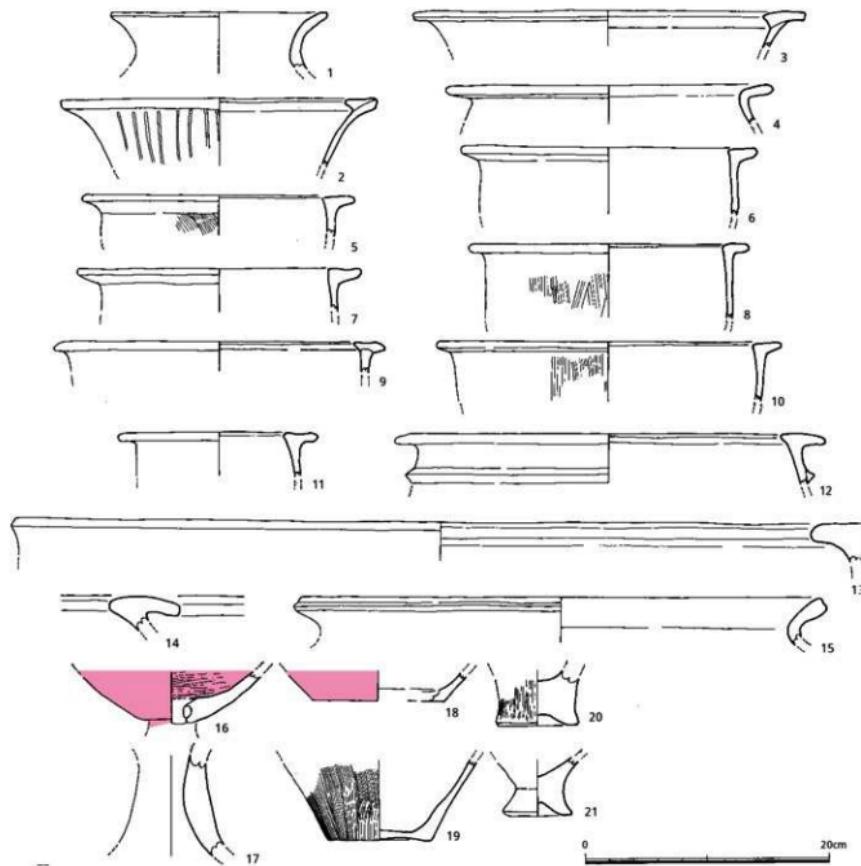


Fig.24 SC03出土遺物図 (縮尺1/4)

同じようなカーブとなる。その南端を延長するとSC04の壁にのびている。後述するようにSC04の南壁がやや湾曲気味なのは、ここに別の円形竪穴住居跡があったとも考えられる。しかしこの内側にはピットが極端に少なく、この他に積極的に証明する根拠もないことから別の竪穴住居跡とは認定し難かった。

このようにピットの配置や壁を共有していることなどからSC03は再建拡張があったと推測したが、遺物の出土状況や遺物に時期差を見出すことは難しい。

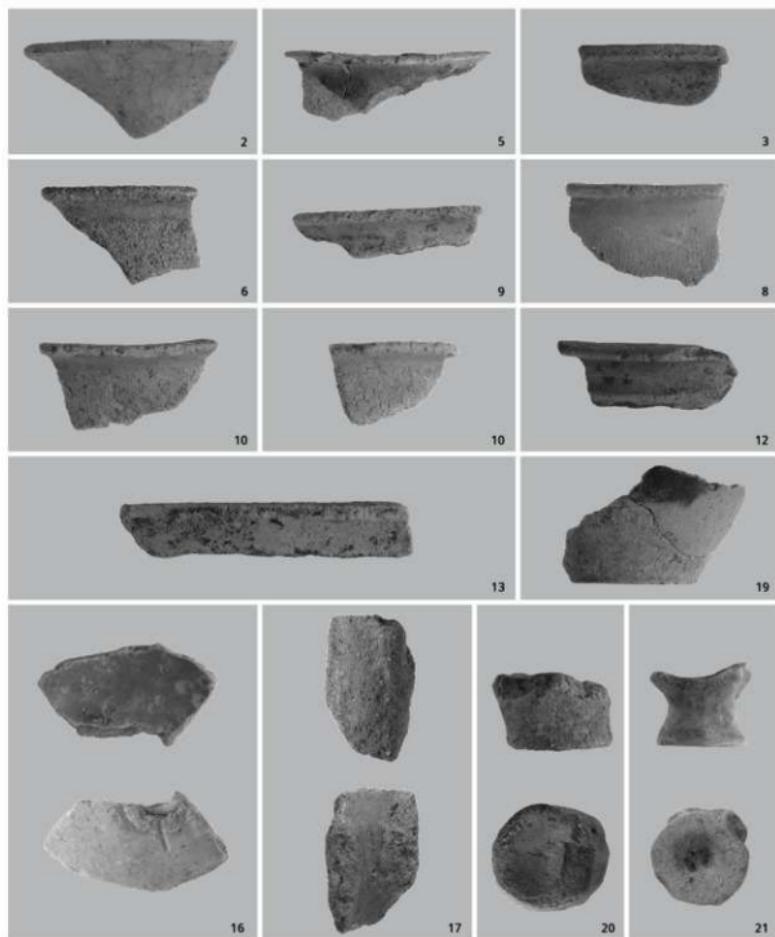


Fig.25 SC03出土遺物

出土遺物 SC03と推測した範囲での出土遺物はコンテナ3箱で総重量は24.45kgである。竪穴住居跡の大きさに比べ数量が少いのは、後世の削平でわずかな落ち込みしか残っていなかったことが原因である。このうち21点の弥生土器と6点の石器を実測、図示する。なお中国製青磁碗が出土しているが、表土層からの混入と考え Fig.12に図示している。

土 器 図示した弥生土器は主に弥生中期中頃の時期が多い。器種には壺、甕、高坏がある。1～3は広口壺。1は口径17.8cm、頸部から大きく外に湾曲して開く。わずかに砂粒を含む胎土である。2、3はいわゆる鋤先口縁部を持つ広口壺。2は口径26.0cmで、口縁内側に断面三角形の粘土紐を貼り付けて幅広の口縁部を作り出している。朝顔状に大きく聞く頸部外面にはタテの暗文を加えている。3の口縁部はさらに幅が広く、その上面はわずかに内傾している。器壁断面では口縁部粘土の貼り付け方が2と異なり上部に乗せて接合している。

4～15は弥生中期～後期の甕。4は口径27cm、強く内傾した胴部からくの字形に屈曲して口縁部を作っている。口縁端部の断面は丸くおさめている。内外面ともナデ調整。弥生後期か。5～12は逆し字形の口縁部を持つ弥生中期の甕。口縁部の作りに微妙な違いが見られる。5の口縁部上面は水平ではなくわずかに内傾し、内端部は小さく尖り気味。6の口縁部は厚みのある断面である。7も同じように分厚い口縁部で、外端が小さく上がっていることから上面が凹状になる。8は逆に上面が丸く盛り上がっていている。胴部外面はタテ方向のハケ目を施している。口径23.0cm。9の胴上半は直でその上に平らな粘土紐を乗せて接合している。内端部は断面が三角形状となり、外端部も尖り気味で角張った口縁部となっている。口径27.2cm、胴部器面は内外面ともナデ調整。10は口縁28.4cmでやや大きめの甕。口縁部の屈曲はく字形に近く、端部がやや上向く。11の口縁部は内外端部とも丸みある断面で、上部が凹んでいる。口径16.4cmの小型の甕。12は内傾する胴部の上部水平な口縁部を作る。内外端部にのびて幅広くなっている。口縁部下に断面三角形の凸帯を1条貼り付けて巡らしている。口径35.4cm。13は口径70.6cm。口縁内端部は水平にのびて丸くおさめている。外端は面取りして角張っている。胎土には2～3mm大の砂粒を含み、内外面とも黄色を呈する。これらの特徴から中期前半の汲田式の甕であろう。本遺跡の調査でも、また周辺でも甕棺墓の発見例はない。14は鋤先状口縁の甕。屈曲が強く、上面は丸く盛り上げている。外端はヨコナデして方形断面に作る。15の口縁部は厚みのあるく字形で弥生後期の甕。口径は43.8cm、屈曲は緩く内面は丸みがある。口縁部はヨコナデでM字状の断面となる。16は高坏の坏部。精良土が用いられ、外面は摩滅して調整痕が不鮮明だが内面はヨコミガキ。内外面とも丹塗りを施している。坏部と脚部との接合は、坏部の中央に粘土を充填している。17は胎土に1～3mm大の砂粒を多く含み、器面調整も難であることから器台とした。18～21の4点は底部。18は外面丹塗りで、径10.8cmの壺の底部。胴部への立ち上がりは弱い。19～21は甕の底部。19は底径8.4cm、胴部へは直線的に立ち上げている。外面はタテハケ目調整。21、22は上げ底の甕。21は底径5.7cm。胴部へは強く括れてから移行する。

石 器 出土した黒曜石の剥片は約38gを測る。このうち石器に加工された石鎌5点と石錐1点を図化した。6点とも良質の黒曜石が用いられている。4は基部を欠いているが、他の4点は凹基式石鎌である。1は全長2.4cm。一方の脚を欠いているがいわゆる鋤形である。表裏とも細かな調整を施してよく整った二等辺三角形をしている。4は基部を欠く。2、3、5の基部は浅い。6は全長2.7cmの石錐。先端をわずかに欠いているがほぼ全形を知ることができる。一部に原石面を残し、調整剥離は大きく粗い。使用痕は認められない。

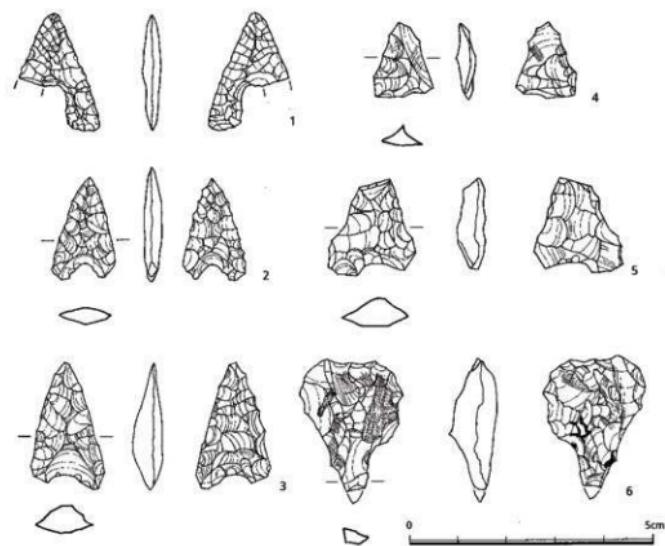


Fig.26 SC03出土遺物図 (縮尺1/1)

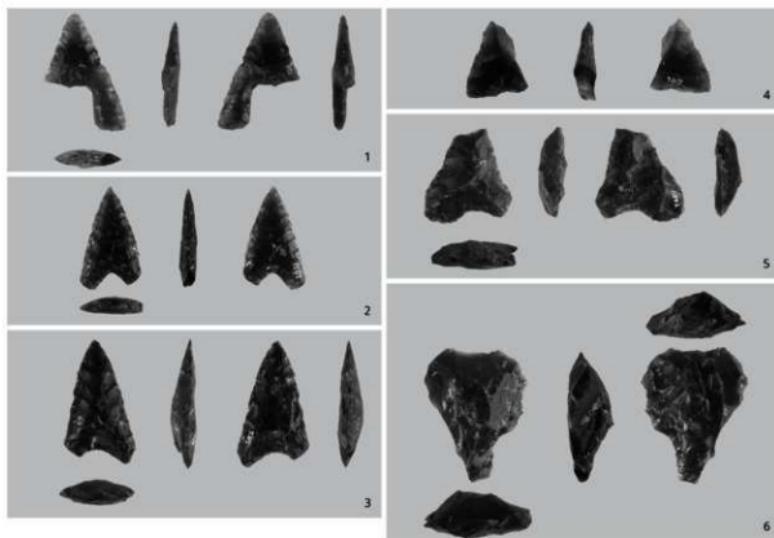


Fig.27 SC03出土遺物

SC04竪穴住居跡

調査区のはば中央の北西縁部に位置する。グリッドはG、H-1、2に当たる。弥生時代前期の貯蔵穴SU14とSU15上に営まれている。壁の一辺が丘陵縁で削られているが残りの3壁からプランを推測することができる。いま残りのよい壁を東壁とするが、その全長は4.2mを測る。壁の高さは17cmで決して残りはよくない。コーナーは隅丸となり北壁、南壁がほぼ直角にのびている。南壁は直線ではなく外に膨らんでやや出入りがある。これは下方に貯蔵穴があって残りが悪かったのだろう。北壁は直線であるが約2mで途切れている。床面には他の竪穴住居跡と違って大小6個のピットしかない。これらを主柱穴とするとSP05を中心にして図のような4本柱の配置を想定した。1本は丘陵縁外にあると仮定したことだが、SP05の南北横の小さなピットも22~32cmの深さがあり中央柱の支柱としての機能を考えられる。これらの柱が屋内の中央部に配置されていたとすると、SP04を中心にして西に折り返すとSC04の大きさは約4.6m方形と推測できよう。面積は推定で21.16m²である。なお貯蔵穴上の床面は、当然貼り床など何か補強したと思われるが、発掘時の所見では叩き締めた痕などは特に見られなかった。また壁溝や床面の焼土なども認められなかった。

出土遺物 床面直上での遺物出土はなく、また埋土にも遺物は少なくコンテナ1箱、総重量4.0kgに過ぎない。ほとんどが細片となり実測したのは弥生土器4点に留まった。1は無頬壺。口径13.6cmで外面に丹塗りは認められない。通例のように口縁部には小孔がある。2、3は大小の甕。2は口径45.4cmで胴部上半は内湾している。口縁部のすぐ下方に断面三角形凸帯を1条貼り付けている。3も

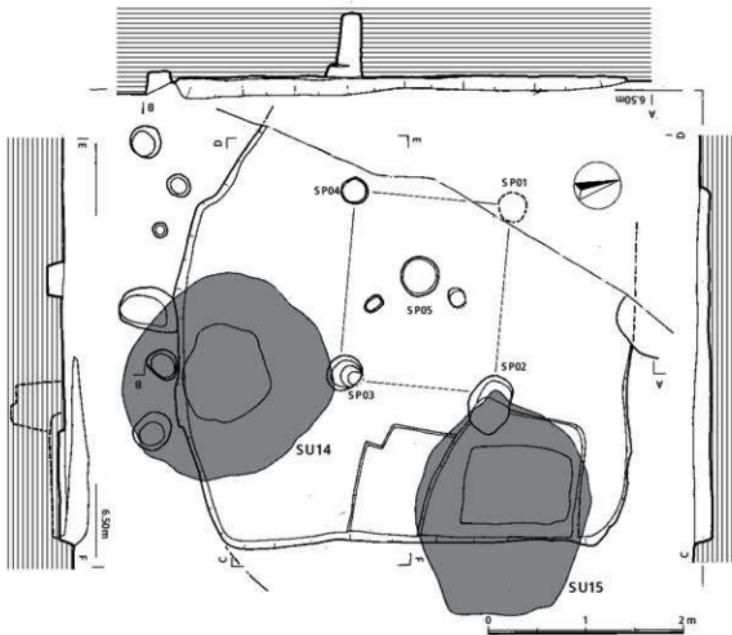


Fig.28 SC04竪穴住居跡図(縮尺1/50)

逆L字形口縁の甕。胴部上半がわずかに内傾し、厚みのある口縁部がつく。4は底部で外面はタテハケ調整。この他に黒曜石剥片が75gと滑石1個75gが出土している。

図化できなかった破片は弥生中期のみである。しかし同時期のSC06、SC07が円形プランであるのに対し、SC04はプランも柱構造も大きく異なっており、古墳前期のSC02、05、09によく類似している。先に予想したようにSC03を切るもう一つの円形竪穴住居跡があり、古墳前期になってSC04の南壁が偶然に重なり、このため弥生中期の遺物が混入したと考えるべきなのだろう。いずれにしても調査期間に追われ精査できず詰めを欠いたことが悔やまる。

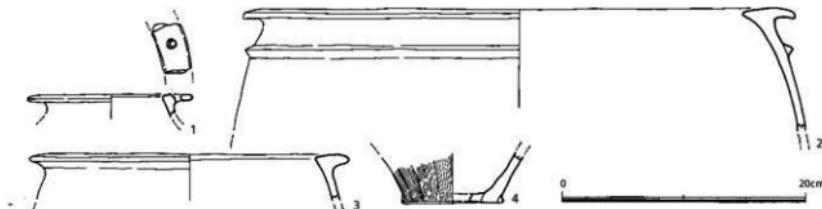


Fig.29 SC04出土遺物図 (縮尺1/4)

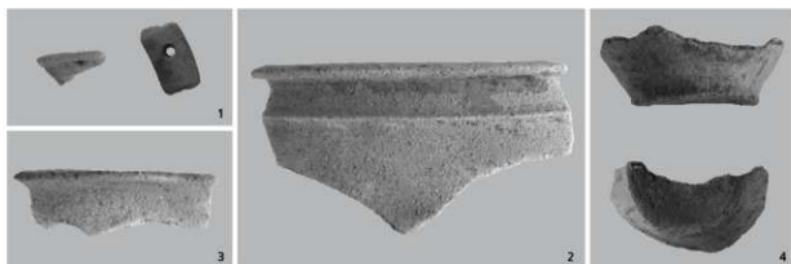


Fig.30 SC04出土遺物



Fig.31 SC04竪穴住居跡 (南東より)

SC06竪穴住居跡

F、G-6、7リッドにあり、舌状丘陵の西側縁に接している。わずかに南東部の壁が削られてい るがほぼ全形を留めている。割合整ったプランではあるが、よく見ると壁は滑らかな湾曲ではなく短い直線を繋いだように角張った形状である。ただ他の遺構との切り合いがなく、また屋内の攢乱も認められないことから単独の竪穴住居跡として規模や柱配置などを検討する上で好条件を備えている。

円形プランはやや東西方向にのび、この東西軸は長さ7.3m、南北軸は6.1mを測る。屋内の面積は35.06m²。最も残りのよい壁の高さは約25cm、全周とも垂直ではなくわずかに斜めに掘り込んでいる。床面は中央に向かって緩やかに傾斜し、床面の中央よりわずかに西に偏って二つの不整円形が接した中央土壇がある。大きさは1.66m×0.9m、深さ50cm。この埋土は特に焼土や炭化物が含まれているわけではなく、屋内の埋土と変わらない。床面には大小22個のピットがあって、主柱穴は1~2m間隔で壁に沿って並ぶものと思われる。図のようにその推定線を結んでみた。床面には北西側と南西側に幅約20cm、床面からの深さ約5cmの壁溝が残っている。また北西側からは中央土壇方向にものびており、さらに中央土壇を越して南側にものびている。

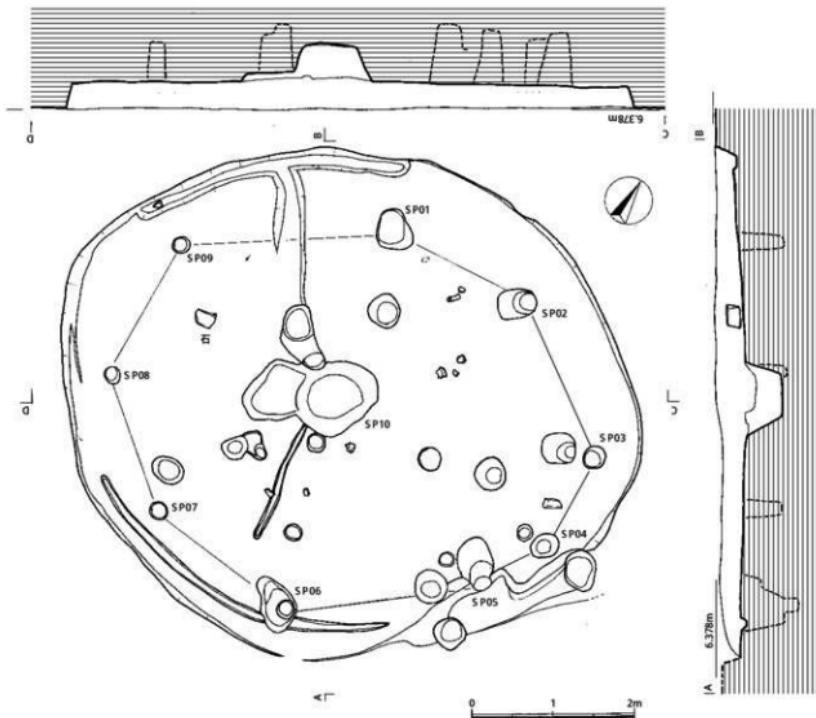


Fig. 32 SC06竪穴住居跡図(縮尺1/60)

床面南側では壁溝と壁とは約40~60cmの間隔があり、また床面東側にはピットがやや数が多いことから、東側に建て替え、拡張した可能性がある。床面には焼土は認められないが、土器片や角礫などが残っていた。角礫は台石として使ったのだろう。

出土遺物 本遺跡の竪穴住居跡ではもっとも出土遺物の数量が多くコンテナ8箱68.8kgである。また埋土からではあるが本市で2例目となる玦状耳飾が出土し注目された。この内、36点の弥生土器と12点の石製品、土製品、さらに鉄鎌1点を図化した。黒曜石は184g出土している。

土 器 1~5は広口壺。1は口径42.0cm。頸部から朝顔状に開き、端部を分厚く作りあさめている。さらに内端部に粘土紐を貼り付けて幅広の水平な口縁部となっている。口縁外端部はヨコナデして口唇状となりその上下縁には右斜行の刻み目を加えている。2の口径は18.6cmで小型の広口壺。いわゆる鋤先状口縁であるが、分厚い器壁で口縁外端は方形断面に近い。3は胎土にわずかに砂粒を含む。口縁部は外端部に長く引き出し、内端部にも丸く張り出し水平な作りとなっている。その上面はわずかに凹んでいる。4の口縁部は水平に粘土紐を貼り付けている。口径28.0cm。5は頸部より直に立ち上がり急に大きく開き、幅広の口縁部を乗せている。口縁外端は下方に垂れ、内端部は三角形に尖り気味である。6、7は壺。6は口径9.0cm、器高9.7cmの小型壺。胴上部に最大径がありわずかに肩が張る。全体に厚みのある器壁で特に底部は分厚い。7は口縁部を欠くが短頸壺とした。胎土は精良土に近い。

8~17は甕。8~11は如意形の口縁部を持つ弥生前期の甕。8は口径27.2cm、口縁部の屈曲は緩く、斜め上方に短くのび、口縁端部に鈍い刻み目を加えている。9の胴部上半はほぼ真っ直ぐに立ち上がり、緩やかに外反して口縁部となる。同じようにタテの刻み目がある。10の口縁端部は細丸となっており、屈曲も直線的である。胴部外面はタテのハケ目調整。11は口径24.0cm、胴部は外に大きく開き、短い如意形の口縁部が付く。口縁外端は上方に小さく摘み上げて、その上下端に細い棒状工具を使った刺突文が不規則に並んでいる。

12~16は逆L字形の口縁部を持つ。16は口径21.0cm、口縁部には焼成前に小孔が穿たれている。外面は丹塗りではない。17は口径29.0cm。く字形口縁で、胴部にはあまり張りがない。

18は短頸壺。外面から内面上部まで丹塗りが施されている。口縁部には焼成前に穿たれた小孔があるが直ではなく胴部に合わせて内側に傾いている。口縁部の屈曲は強く、その上面は上方に丸く盛り上がっており、水平ではない。口径14.6cm。胎土に1mm大の砂粒を含んでいるが精良土に近い。

19、20は高杯。19は口径19.2cmの杯部。20cm近い深さがある。口縁部は緩く外反して如意形とな



Fig.33 SC06竪穴住居跡（北西より）

っており弥生前期であろう。20は高環脚柱部で、外面には丹塗り痕がわずかに残っている。
21~24は器台。器形はよく似ているが、21以外は分厚い器壁で、23、24は指押さえ痕がある。

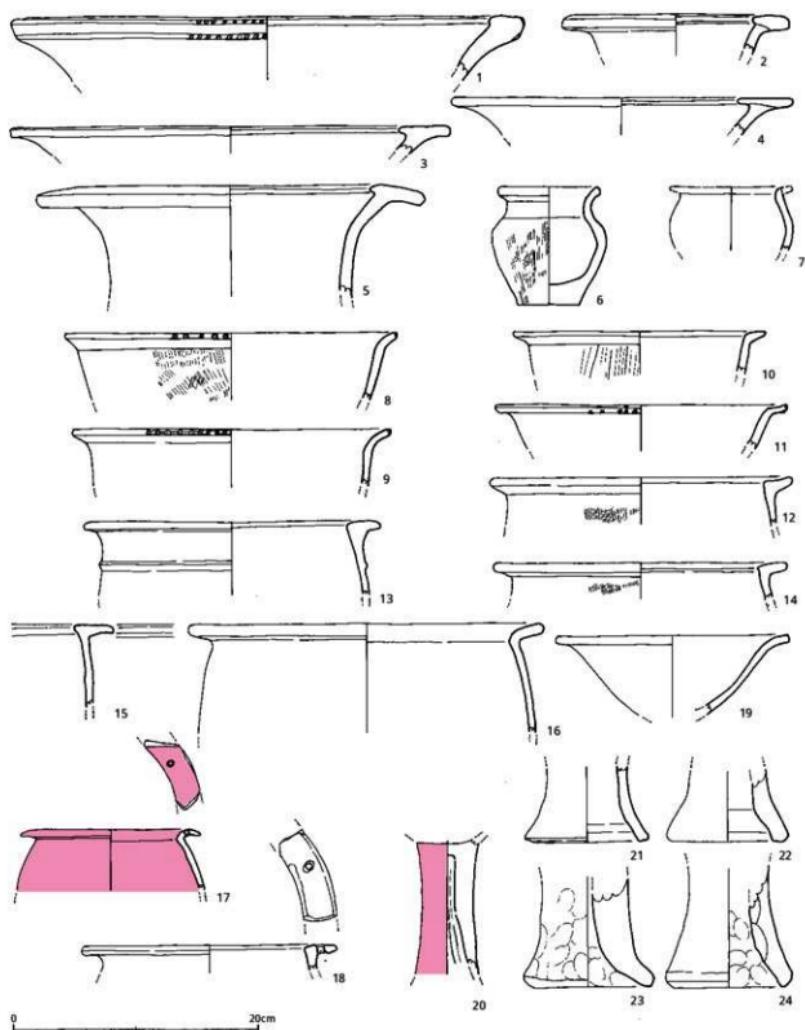


Fig.34 SC06出土遺物図（縮尺1/4）

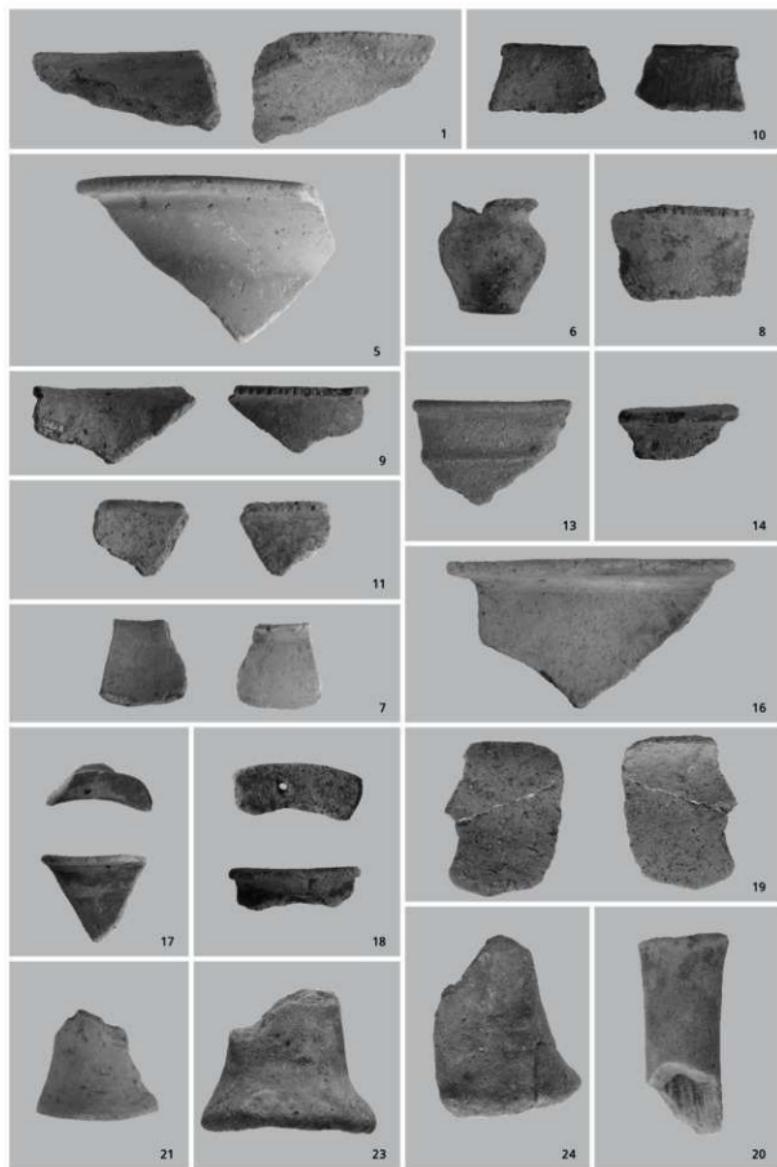


Fig.35 SC06出土遺物

25は土師器の碗。1mm大の小砂粒をわずかに含み、灰褐色を呈する。SC06に伴うものではない。26～36は底部で、うち26～30は壺、31～35は甕、36はミニチュア土器と思われる。26の胎土は精良土ではないが、外面は丹塗りを加えている。27も平底で、外縁部がわずかに外に張り出している。28は平底から均一の器壁のまま胴部が丸く湾曲してのびている。球形胴部となるのであろう。外面は丹塗り。29の底径は8.4cmで、中央部に焼成後の穿孔がある。30の外縁部は丸みがある。31にも同じような小孔がある。31～35の外面はタテハケ目調整。32、33は浅い上げ底状となっている。

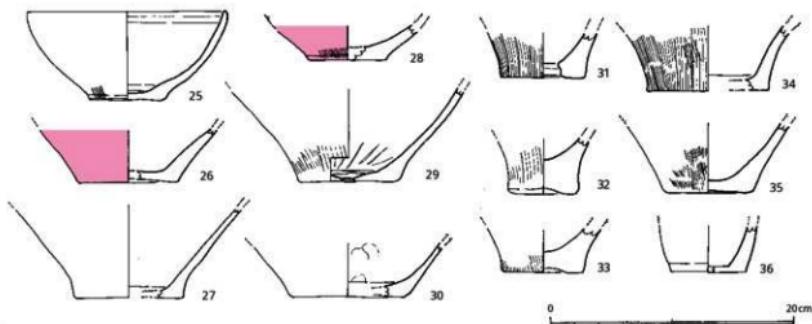


Fig. 36 SC06出土遺物図 (縮尺1/4)

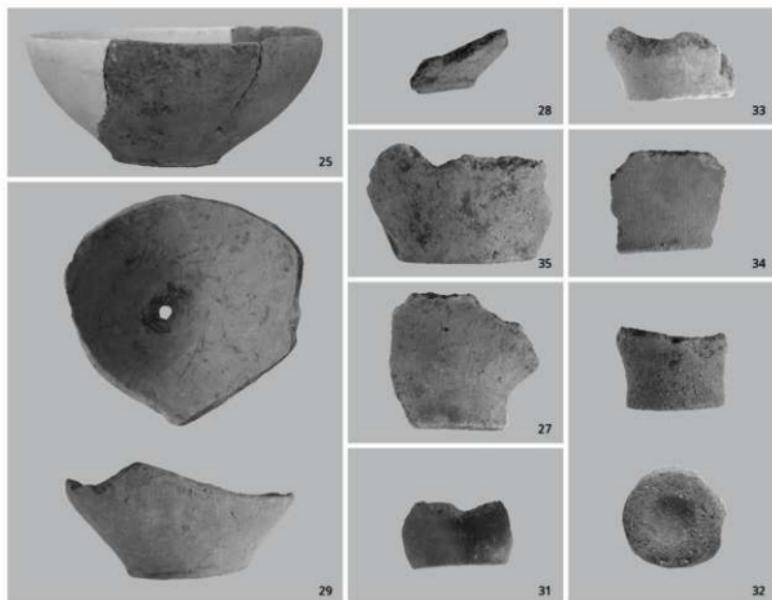


Fig. 37 SC06出土遺物

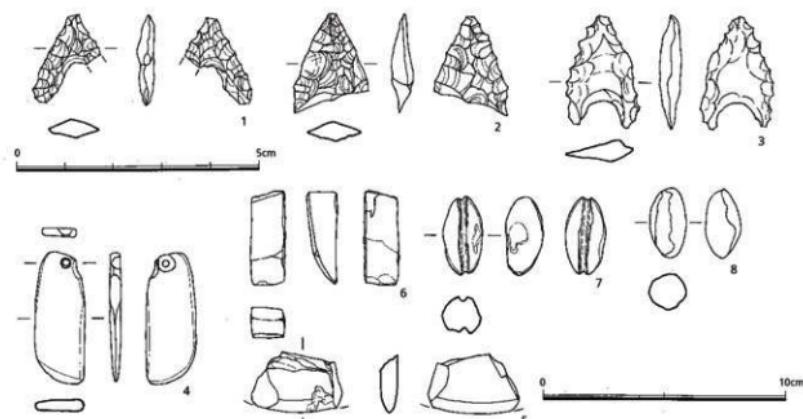


Fig. 38 SC06出土遺物図 (縮尺1/1, 1/2)

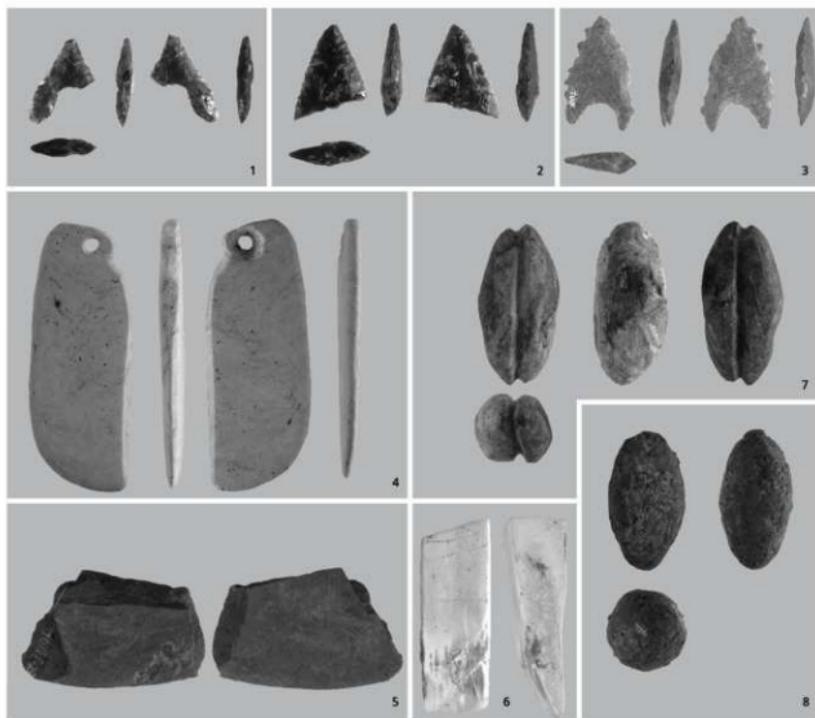


Fig. 39 SC06出土遺物 (縮尺1/1)

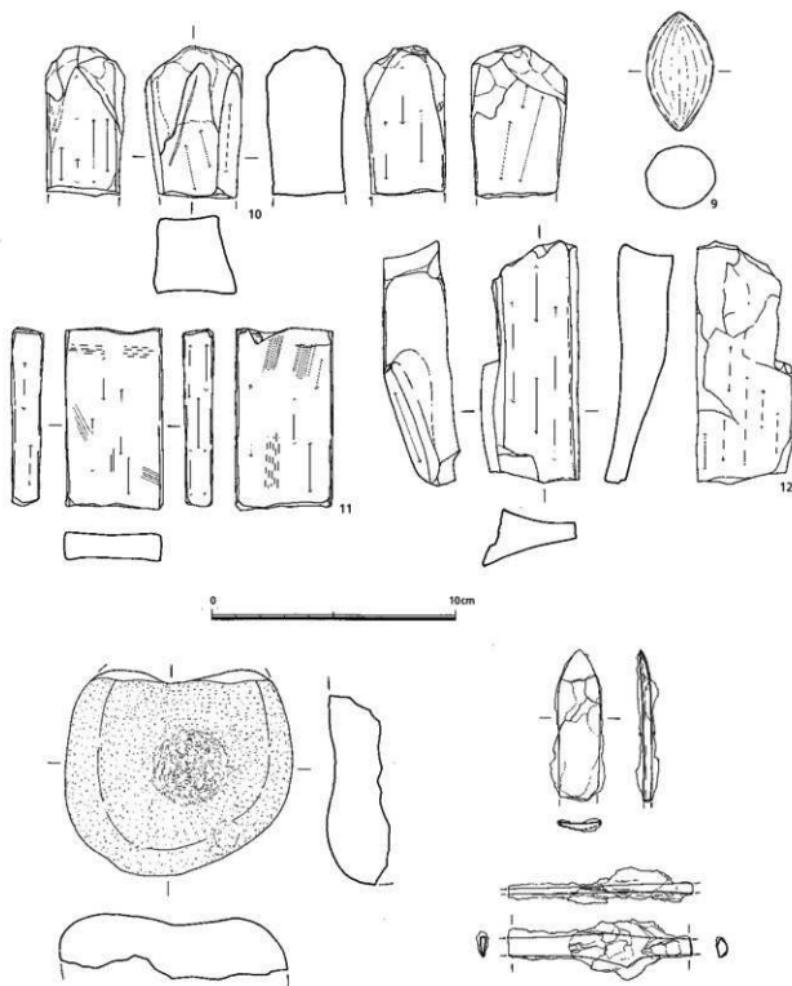


Fig.40 SC06出土遺物図（縮尺1/2）

石器・土製品 土器と同じように石器の点数も多いが、埋まっていく過程で混入したと思われるものを含んでいる。1～3は石鎚。1は黒曜石製で脚の長い錐形である。一方の側縁は細かな剥離。2も黒曜石製で、いま基部を欠いているが三角形の石鎚。3は安山岩製で粗い剥離で鋸歯状となる。

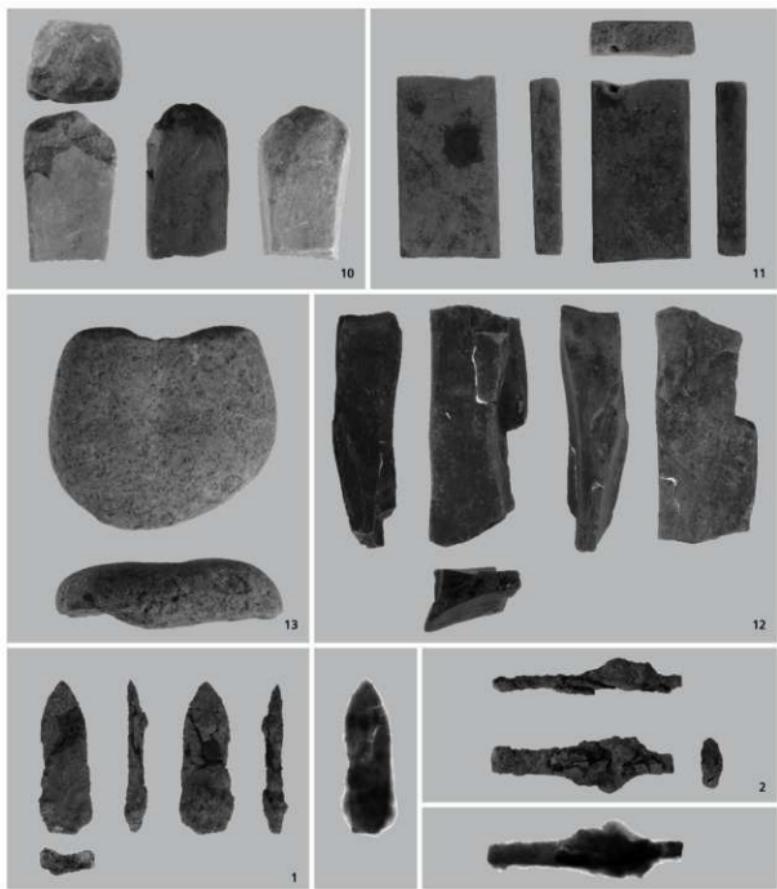


Fig.41 SC06出土遺物

4の正確な石材は不明だが乳白色の块状耳飾である。全面に丁寧な研磨が加えられ、その地肌は白、灰色の墨を流したような水紋のようにも見える。埋土からの検出時には頭部に小孔があることからSC06に伴う弥生中期の垂飾品と考えていたが、下村智氏から縄文時代の块状耳飾であるとの教示を受けた。中央のスリット部から折れ、図上端の頭部をわずかに欠いているが、元の形状を復元できる。現在は、長さ5.3cm、最大幅2.03cm、上端ほど厚く4.3mm、下端は3mm。また中央部から外側に向かつて厚さを減じている。重さ8.19g。左図の左側縁断面は丸く仕上げ、右側縁のスリット部は両面から研ぎ落としている、下端側も日本刀の切っ先のような形状で、両面から研ぎだしているが、図左面からの方が研ぎ出し幅が広く、ヘラ様になっている。頭部側縁の折れ面は残っていないが著しい研磨は

加わっていない。小孔は右図側から円錐台状に穿っており、直径は右図側で7mm、左図側で3mmを測る。使用時に折れて補修したのだろう。スリットの上方には少し凹んでおり、ここが本来の孔の位置であろう。とすると頭部の欠損は8mm程度であったと推測できる。

5は小片であるが両刃であることから、石包丁（石製穂摘み具）とした。石材は輝緑凝灰岩。

6は小型柱状片刃石斧。灰白色の層灰岩で頭部と側縁を欠いて全形は不明。左図が石斧前面に当たり、刃部は節理に直交して研ぎ出しているが直線的ではない。全面に摩耗、風化していることから研磨痕は不明。後面刃部の小さな剥離は使用時のものであろう。

7の石錘は滑石質の石材を加工している。縦に巡る1状の溝は、幅3mmで明瞭に彫り込んでいる。長さ3.2cm、中央断面は $1.55 \times 1.35\text{cm}$ 。本遺跡ではSC02でもよく似た石錘が出土している。

8、9は土製の投弾、表面の調整痕はないがよく元の形状を残している。全長2.73cm、重さ4.89g。

9は所在不明になっているが、調査後の実測図によると全長4.85cm、最大径は2.80cm。

10～12は砥石。10は砂岩製、11、12は粘板岩製。

13は花崗岩の円鏡で中央部が使用で凹んでいる。側縁には特別な加工も使用痕も認められない。

鉄製品 1は刀子。いま刃部先端と茎部の末端を欠いている。現存長は7.6cm。両側で、棟闇はなだらかに下り、刃闇はなで肩状で両側の位置は異なっている。茎部断面形は橢円形をなしている。2は^鉤_{ハサカ}。刃部から身部の一部にかけて残存している。現存長6.2cm、幅1.7cmをはかる。刃部幅もほぼ同じで明瞭な境を持たない。刃部の鑄は明らかでなく、いずれの横断面も三日月形をしている。

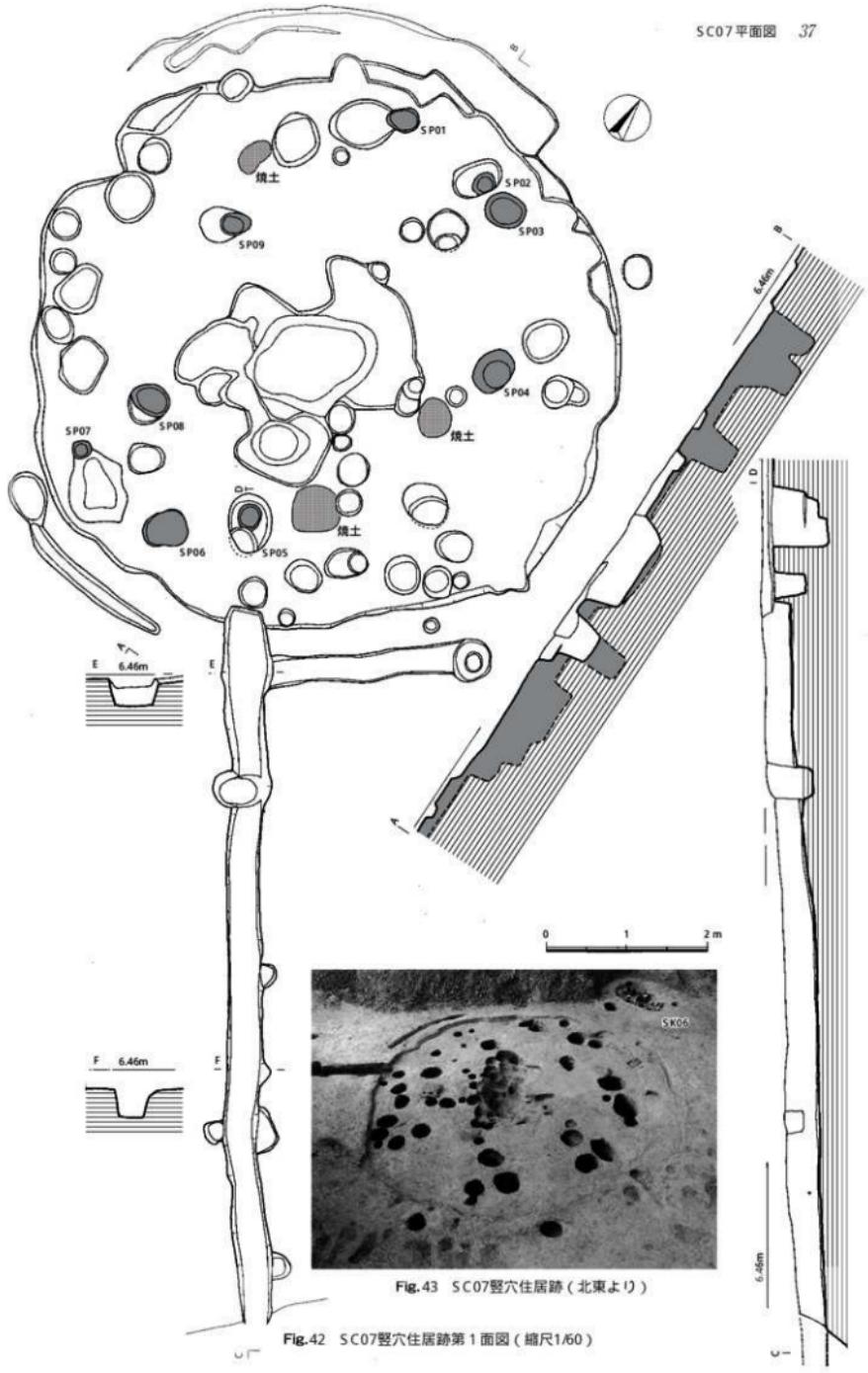
SC07竪穴住居跡

SC06の西側3m、グリッドH-5で検出したもので、排水溝や貼り床などがありきわめて特異な竪穴住居跡である。調査区の南側にやや寄っているが、舌状地形の長軸中心線に近い。発掘ではまず南北で弧状の落ち込みが見つかり、さらにそれに囲まれて直径約7mの円形落ち込みがあったことから、大小2軒の竪穴住居跡が重なっていると予想した。しかし外側の溝状落ち込みのうち北側は幅約60cm、深さは数cmと浅く、また長さ約6mで両端が途切れた。南西側では壁溝のように幅約22cm、深さ約7cmであるが、これも長さ約2.2mで途切れる。しかし内側の円形落ち込みから南東方向に一直線に溝がのびていた。この溝にはほぼ直角に東方向に幅約33cm、深さ5cmの溝が直線的に取り付き、その東端は円形ピットに接している。その長さは約2.2mである。

これらの溝に囲まれた中央の円形落ち込みは、深さ約15cm前後で無数の小ピットと3か所で焼土が見つかった。これら的小ピット群の中央には深く大きめのピットがあることなどから住居床面と判断し、SC07竪穴住居跡とした。

南東方向にのびる直線の溝は、SC07の南壁部の床面を24cm掘り下げて始まり丘陵縁まで達している。その長さは8.8m、幅約44cm、深さは約30cmである。断面逆台形に掘り込まれ、底部は緩やかに丘陵縁に向かってわずかに傾斜し、その差は約15cmである。排水溝と考えたが、他の円形竪穴住居跡にはこのような溝はなく、また舌状丘陵の最先端部でほぼ平坦な地形が想像できることから、背後から大量の雨水が流れ込むような急斜面地形であったとはとても考えにくい。また出土遺物からもSC07が何か特別な意味を持つ竪穴住居跡であったとは思えない。ただし屋内の構造は、他の竪穴住居跡とは次の点で異なっている。

まずSC07の周壁は緩やかなカーブではなく、微妙な凹凸がある。床面の深いピット搜すと図のようにSP01～SP09があり、これらを結ぶとSC01やSC06と同じように多角形の配置となる。しかし、この外側にもピットがあり、これらは壁に接したり壁際に片寄っているものが多い。しかもそのピットの



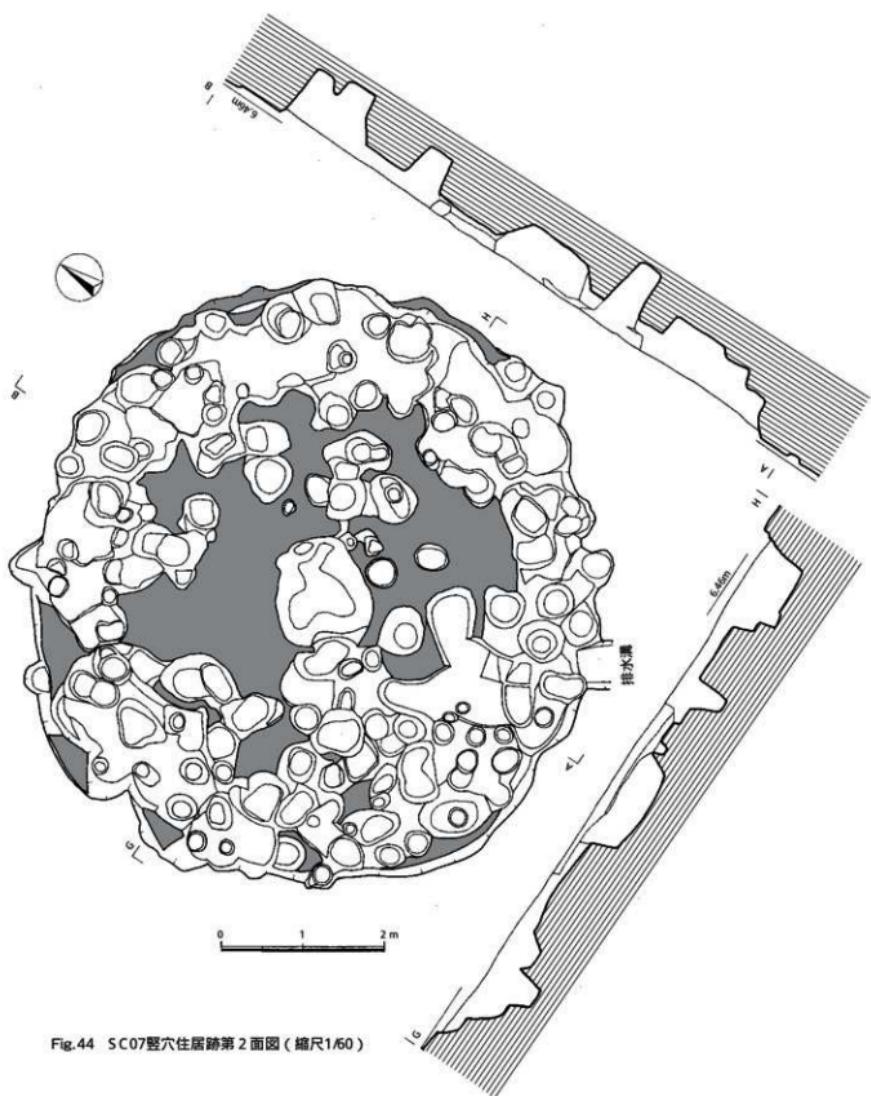


Fig.44 SC07竪穴住居跡第2面図(縮尺1/60)

部分は中央のローム面とは異なりやや褐色がかっていたことから、平面実測と撮影を済ませた後に再度掘り下げ行ったところ Fig. 44 のアミ部分がローム面であるが、周壁の間約 1 ~ 1.5m 幅に無数のビットが掘り込まれていることが分かった。

いま主柱穴数や配置、さらに建て替え回数を明らかにできないが、相当な建て替え回数を想像できよう。これ程までに手を加え、さらに排水施設と思われる溝を設けているのは、やはり何か特別な目的があったとすべきだろう。



Fig.45 SC07竪穴住居跡（北より）



Fig.46 SC07竪穴住居跡第2面（北より）

他の竪穴住居跡や貯蔵穴などの各遺構にも共通するすることだが、本遺跡の遺構の残り具合はきわめて悪い。他遺跡の竪穴住居跡を参考にすると少なくとも50cm以上は削平されたと思われ、SC07の本来の形状は外側の溝の位置で壁が立ち上がり、屋内の壁際に幅40~60cm前後の低い段が回っていた可能性がある。とするとSC07は、直径約8.3m前後の円形であったことになる。

出土遺物 何回もの建て替えを推測したが貼り床中の遺物は少なく、コンテナ6箱50.6kgの遺物はほとんどは埋土からの出土である。床面には焼土も残り、著しい擾乱は受けていないが、廃絶時の状況を示すような床面直上の出土はない。埋土中の遺物であることから時期の異なる遺物が混じり、また細片が多い。この内、弥生土器29点と石器4点を図示している。

土 器 1は弥生後期のく字形口縁の甕。口縁端部はヨコナデで口唇状の断面となる。2は口縁部を欠くが、球形に近い胴部から短頸壺とした。胴部外面はナデ調整で丹塗りは施されていない。3、4は壺胴部の凸帯。3の凸帯は断面M字形で色調はにぶい橙色を呈する。胴最大径部位置のやや上方に

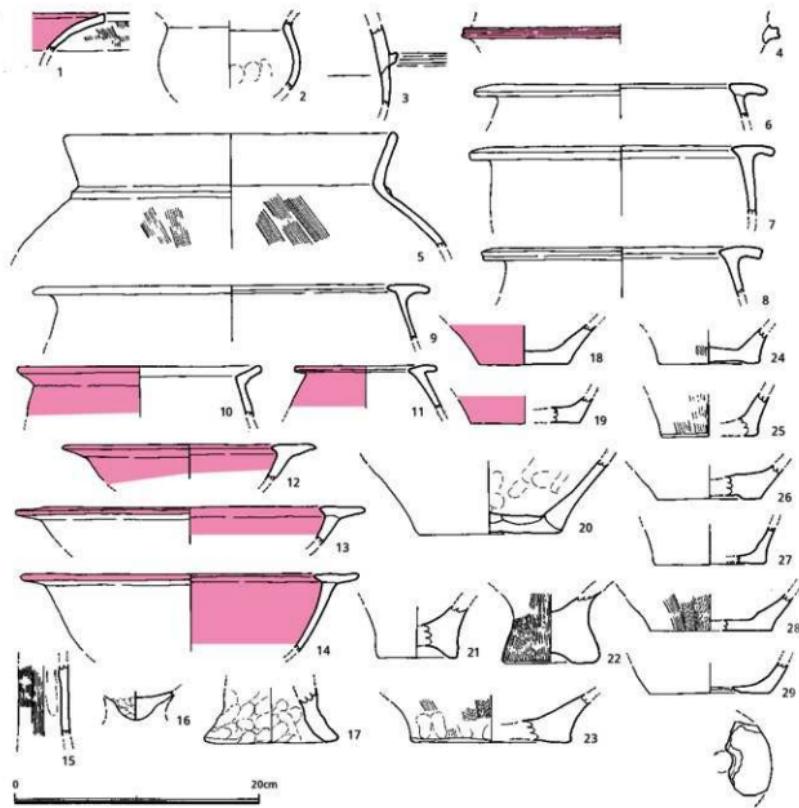


Fig.47 SC06出土遺物図 (縮尺1/4)

貼り付けられている。4は胴部から剥離した凸帯で、断面は同じようにM字形だが、背が高く丹塗りも施されている。5は口径27.4cmの弥生後期の壺。張りのある胴部上方から強く屈曲して直線的に開き、そのまま口縁部とする。屈曲する頸部外面には断面三角の低い凸帯を貼り付けている。

6～11は甕。6～9の口縁部は逆L字形である。6は口径24.0cmで、やや内傾する胴部の上方に平らな粘土紐を水平に接合して口縁部を作っている。口縁内端は断面三角形で、その先端は丸みを持形の低い凸帯を貼り付けている。胴部の外面にはハケ目調整痕が残っている7も同じような特徴を持

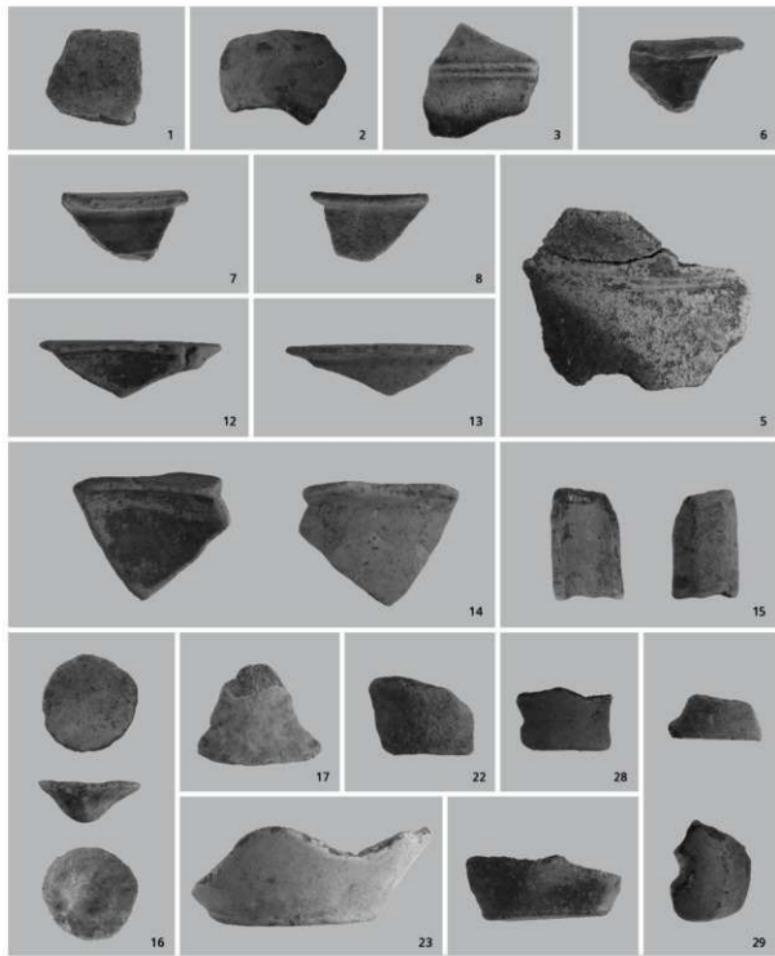


Fig.48 SC06出土遺物

つ口縁部である。胴部器壁は厚みがあり、内外面ともナデ調整。8は口縁部が厚く、上面が盛り上がって外端断面はM字形でステッキの握り部のような形状をしている。9は口径32.6cm。口縁内端部への張り出しが長く鏑先状口縁部を作る。口縁部の厚さに比べると胴部器壁はきわめて薄い。10はく字形に外反する弥生後期の梗。11は細片のために傾きがやや不正確であるが、鏑先状の口縁部を持ち、

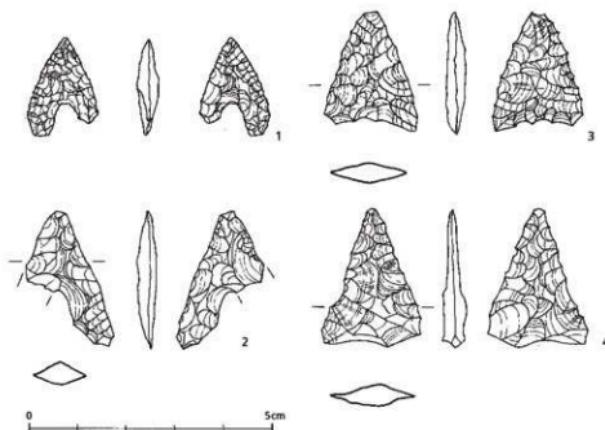


Fig.49 SC06出土遺物図（縮尺1/1）

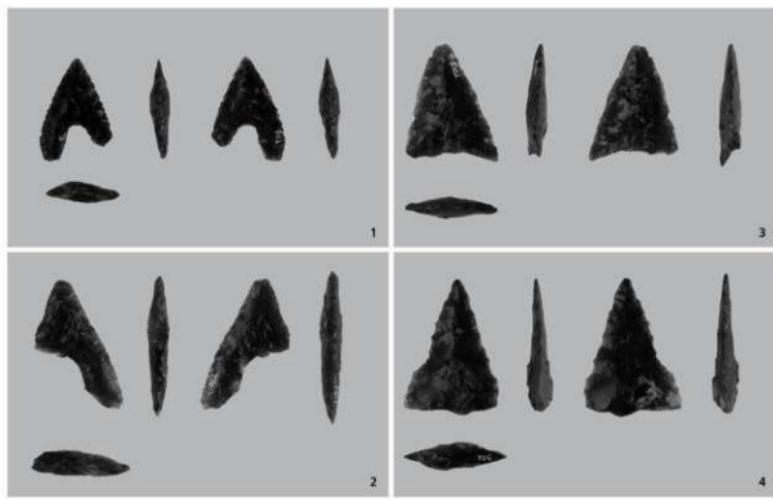


Fig.50 SC06出土遺物

11.6cmと小さな口径である。1mm大の砂粒と雲母片をわずかに含んでおり、精良土に近い。外面は丹を塗布している。

12~16は高杯。12~14は弥生中期に特徴である鋤先状口縁を持つ坏部である。12は口径20.8cmで、口縁内外端部とも断面が尖り氣味である。胎土には1mm大の砂粒がわずかに含んでいるが精良土に近い。器面は内外面とも丹塗りを施している。13は一回り大きい坏部で口径は28.6cmである。丹塗りは坏部内面から口縁部外面にかけて見られる。坏部のカーブからすると半球形に近く深みのある坏部になるのであろう。14は大きめの破片である。13よりやや口径が大きいが、器形、口縁部の接合法や丹塗りなどよく類似している。15は脚柱部で丹塗りではない。直径3.5cmの円筒状で、器壁も6mmとうすい作りである。内面にシボリ痕と外面にはタテハケ目が見られる。16の丸みのある笠型円盤は、坏部と脚部を接合する際、坏部底に充填したもの。高坏破片ではその断面で節合方法が知られるが、本例のようにきれいに剥離しているのは珍しい。笠型部は指押さえ、基部は坏部底に当たることから丁寧なナデ調整で滑らかになっている。

17は器台。裾部下端は八字形に開いており、底径は11.0cmである。器壁は厚く、内外面とも粗い指押さえで器面を整えている。胎土は特に粗くはない。

18~29は底部。18~20は壺の平底。18は底径7.2cmで、胴部へはわずかに反り氣味に立ち上がってい。内外面ともナデ調整で、外面は丹塗りを加えている。19も同じように外面丹塗りである。胴部への立ち上がりは逆に内湾気味にのびている。20は器壁断面に粘土接合の様子がよく観察できる。底部内面の中央部には色調の異なる粘土を押さえ充填している。底径は12.0cm。21、22は上げ底の底部。22は分厚い器壁の底部で、強く括れてから胴部へのびている。外面は底部外縁までタテハケ目調整。上げ底の深さは5mm。底径は8.0cm。23~28は甕の平底。同じように平底であるが器壁の厚さや器面調整などそれぞれ微妙に異なる作りとなっている。29は底部中央に焼成後に外面より穿孔している。胴部へは外湾気味にのびてあり、器種は壺とすべきか。

石 器 土器と同じように石器の出土数は少なく図示した4点の石鎌のみである。黒曜石剥片は267gが出土している。1~4は黒曜石製。1は長さ2.50cm、基部幅1.40cm。凹基式石鎌で片方の脚が短いが最初からの加工で破損ではない。2は脚の長い石鎌で、幅広の剥離をしている。先端と一方の脚を欠いている。3は基部の抉りは小さく、割りに整った二等辺三角形をしており、細かな剥離を施す。4も同じような形状であるが、長側辺は直線ではなく基部近くで小さな段を作っている。

SC02竪穴住居跡

SC02は調査区の北東部C、D-2、3グリッドで検出した古墳時代前期の長方形竪穴住居跡。舌状丘陵の最先端部に位置するSC01より西側に約2.5mと接近している。西側ほど壁の保存状態はよく高さ18cmであるが、東側は削平を受け、また大小のピットが重なって明瞭な壁になっていない。各コーナーは直角ではなく丸くカーブしている。いま北東側の壁を北壁と呼ぶが、各壁の長さは、短辺壁の北壁が4.90cm、南壁が4.70cm、長側壁の東壁が6.36cm、西側壁が6.36cmを測る。短、長側壁とも大きな差はなく、よく整った隅丸長方形プラントと言えよう。長側壁の方向はN-57°-Wとなり、同時とを考えたSC05やSC09とほぼ同じ方向である。床面には周囲に高さ4~14cmのベッドを巡らしている。ベッド幅は、各壁とも1.0~1.6m前後であるが、北壁と西壁側のベッドは1.1mに狭くなっている部分がある。後世の擾乱の影響とも考えられるが、中心軸からベッド幅を割り当てるに、狭くなっている部分が本来のベッド幅に等しいことから、当初からの設計であろう。東壁側のベッドは、幅約1.7cmが途切れしており、この位置がSC02の出入り口部なのであろう。早良区有田遺跡群など市内同時期

の竪穴住居跡の発掘例からすると、床面中央に炉が掘り込まれ、これを挟んで2本の主柱穴構造となっているが、SC02のその位置に対応する炉もピットもないことから、床面やベッド下などを精査した。この結果、アミ点で示しているように南壁に接してSU18の円形貯蔵穴や10数個のピットが見つかった。これらを加えて検討したが長軸に並行、直交する複数のピットはない。ベッドの四隅にあるSP01～SP04を結ぶと長方形にはなるがピットがやや小さいのが難点であろう。主柱穴の本数、配置については断定できない。また各壁やベッドには小溝は設けられていない。床面積は32.71m²、ベッドの面積は17,608m²なので全体の約54%を占めている。

出土遺物 他の竪穴住居跡と同様に埋没時に古い時期の遺物が混入しているが、SC02では床面直上から写真のように多くの土器が出土した。廃絶時の遺物と考えられ、ほとんどは古墳時代前期の土師器である。中には完形の土器が潰れた状況を示すものがあったが、残念ながら保存状態が悪く、また薄手のために復元できなかった。石器も10点を図化したが、ほとんどがSCO 2 の時期とは異なる。出土遺物はコンテナ11箱88.1kg、黒曜石剥片は225gである。

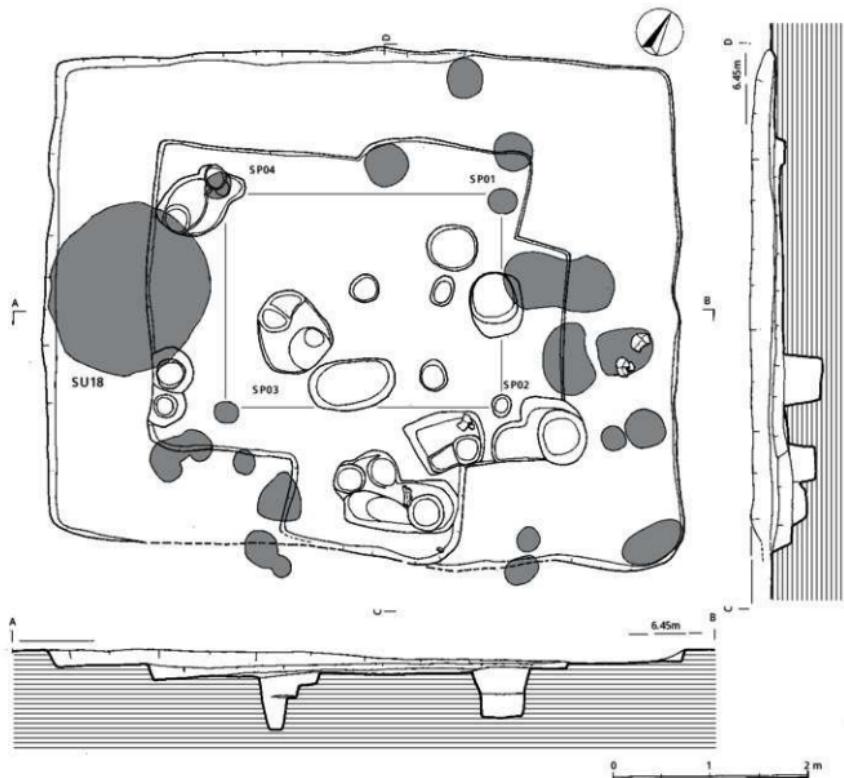


Fig.51 SC02竪穴住居跡図（縮尺1/50）

土 器 1～4は弥生中期の壺。1は広口壺の口縁部。口径28.0cm、朝顔状に聞くが直線ではなくわずかに内湾しながらのびている。口縁部は内側に断面三角形に張り出して鋲先状となっている。2の口縁部破片は広口壺としながら、高壺の可能性もある。外面は丹塗りを施している。3は胴最大径部で外側に断面M字形の凸帯を上向きに貼り付けている。胎土に1mm大の砂粒と雲母片を含んでおり、外面は丹塗りである。4は弥生後期大型壺。胴部上半部の破片。断面M字形の凸帯を4cm間隔で貼り付けている。この凸帯にはそれぞれ2段の刻み目を加えている。

5～11は弥生中期の逆L字形口縁部を持つ甕。5は口径25.0cm、口縁外端部は方形断面におさめ、右斜行の刻み目を入れている。6～8の口縁部上面は水平ではなくわずかに盛り上がり、内端部は断面三角形で尖り気味となる。9～11は口縁部下方に凸帯を1状巡らした甕。9は口径27.6cmで、凸帯



Fig.52 SC02竪穴住居跡（南東より）



Fig.53 SC02竪穴住居跡床面下（南東より）

は幅広い。10の口縁内端部への張り出しが弱く、水平ではなくやや内傾している。また胴部凸帯下方の器壁は薄手の作りとなっている。11は口径36.0cm、器壁の断面で口縁部の粘土貼り付けがよく分かる。口縁外端はヨコナデで口唇状となっている。胴部の凸帯は背の低いIM字形である。

12、13は弥生中期の高坏。12の坏部は外面のみ丹塗り。口径23.0cm、鋸先状口縁部の上面は少し凹んでいる。13は一回り大きく、丹塗りは内外面に施している。坏部中央よりやや口縁部に寄って小さな断面三角形凸帯を1条貼り付けている。

14は壺のミニチュア土器、手捏で丸みのある胴部を作っている。上部を欠くが現高は3.5cm。

15は短頸壺の蓋。山笠形で径は15.4cm。外面のみ丹塗りで、焼成前に穿った小孔がある。

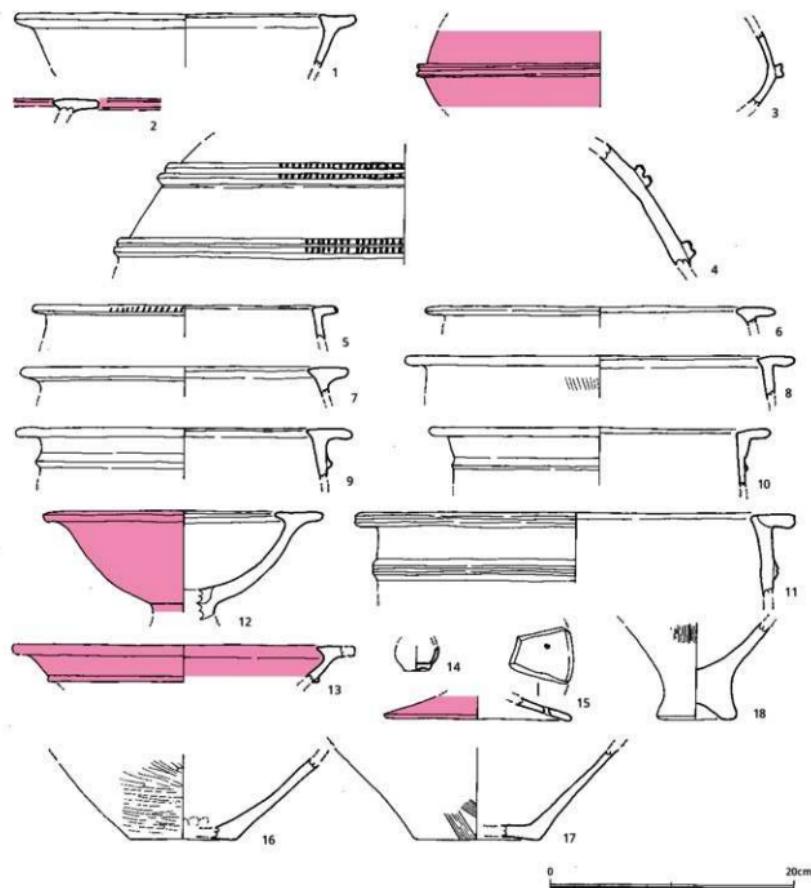


Fig.54 SC02出土遺物図 (縮尺1/4)

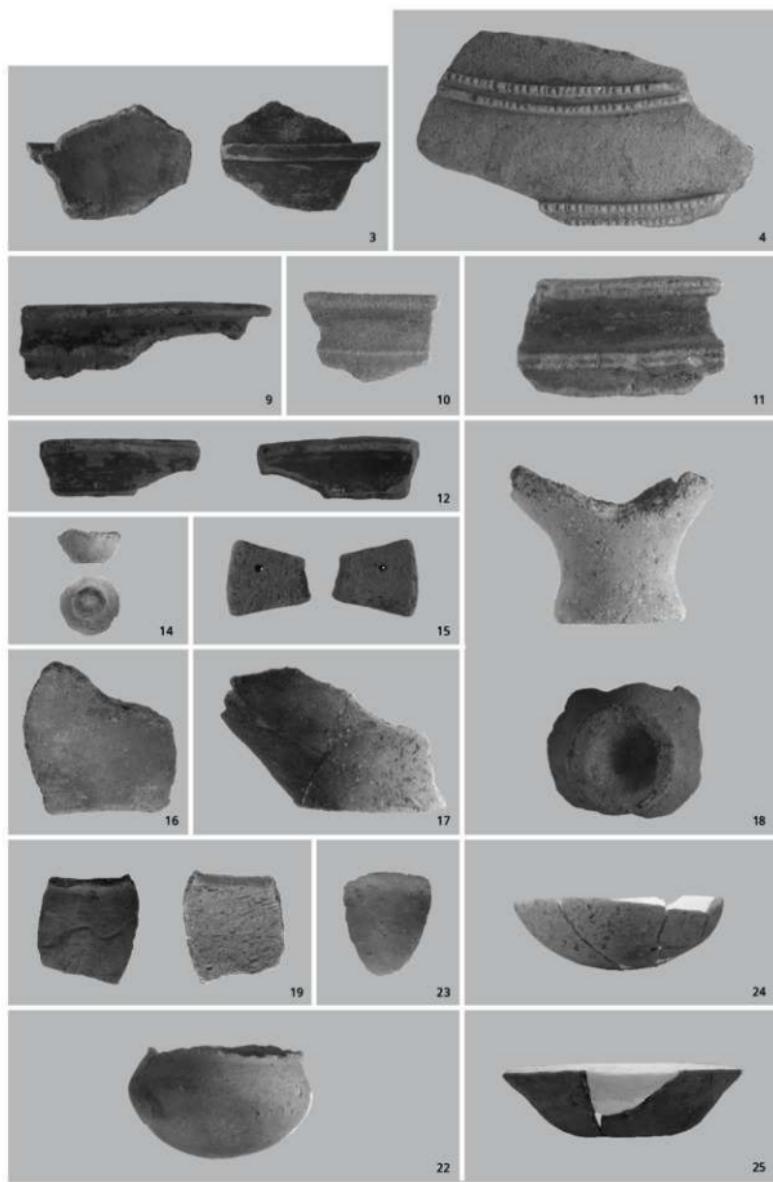


Fig.55 SC02出土遺物

16から18は底部。16の底径は16.0cm。中央部がわずかに凹んでいる。外面はヨコミガキを加えている。壺の底部である。17も同じように胴部が外に大きく開いているが、底部から微妙に外湾してのびている。18は上げ底の底部。強く括れてから胴部へと続く。胴部下半はタテハケ目調整。

19～24は古墳前期の土師器。19はいわゆる布留式の壺。底部を欠くが球形に近い胴部となるのだろう。肩部外面には波状の沈線が1条巡っている。内面は右上がりのケズリ。器壁はある程度の厚みがある。20は完形に接合できた。口径15.4cm、器高18.5cm。球形に近い胴部にやや内湾気味にのびる口縁部がつく。その端部は丸くあさめている。肩部外面には櫛状工具で4本の沈線が緩く一巡している。器面の色調は黄橙色を呈し、やや軟質となっている。21は複合口縁を持つ壺で、いわゆる山陰系の土師器。出土時は写真のように底部まで掘っていたが、水洗い後に接合復元できなかった。口径は27.8cm。胴部最大径は33.4cm、丸底であることから胴部は整った球形となっている。強く屈曲した頸部から直線的に開いて口縁部を丸くあさめている。胴部内面はケズリ、外面はハケ目とナデ調整である。22は丸底壺。胴部はややつぶれた球形で、緩やかに屈曲した頸部が付く。外面はハケ目とナデ調整。23、24は丸底の壺。23は口径12.0cm、内面はケズリとナデ、外面はハケ目とナデ調整。24の口径は14.4cmと大きい。全体に風化、摩耗していることもあるが、口縁部が水平な作りとなっていない。

25、26は古代の土師器壺。25の口径は13.7cm、器高4.0cm。26は口径16.2cm、器高6.0cm。



発掘作業風景



Fig.56 床面遺物出土状況下（南東より）

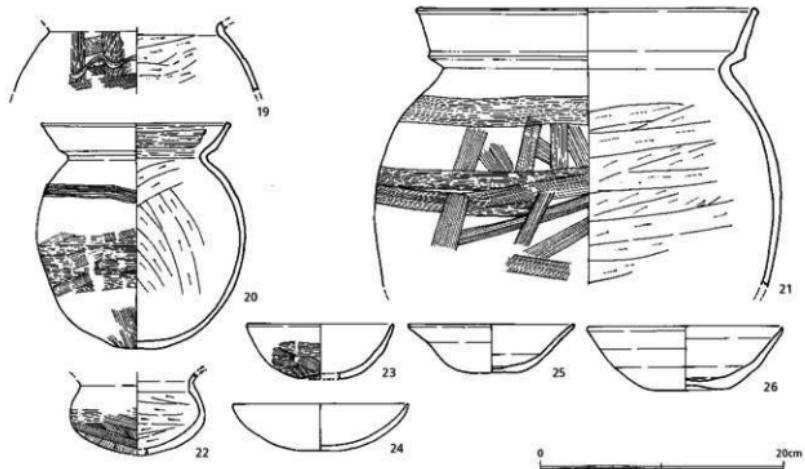


Fig.57 SC02出土遺物図 (縮尺1/4)

Fig.58 SC04出土遺物、二重口縁壺 (21)
出土状況

石 器 今回の資料整理に当たって8点を実測したが、発掘時にはこの他に細石刃核と石錐が出土している。これらは発掘後に実測し、遺跡パンフレットに掲載したがその後所在不明となっている。実測や撮影ができないので遺跡パンフレットから再トレースして報告する。

1は埋土から出土した黒曜石製の細石刃核。高さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ1.3cmを測り、表面と両側

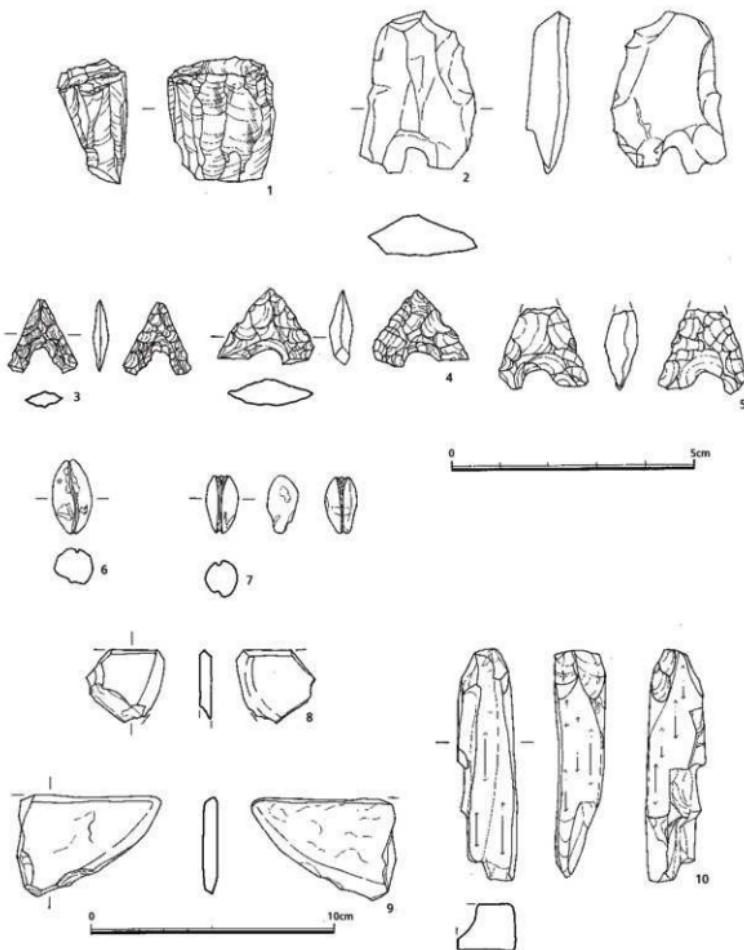


Fig.59 SC02出土遺物図 (縮尺1/1, 1/2)

面に細石刃剥離作業面がある。打面部は複数の剥離面があり、正面頂部は右方からの調整剥離が入る。形態は茶園原型に類似し、細石刃石器群としては古段階に所属し、旧石器時代最終末に当る。

2～5は石鏃。2は安山岩製で抉りが加工されていることから石鏃の未製品と推測した。3は二等辺三角形の凹基式石鏃。側辺は直線的で両脚は細く長い。黒曜石製で全面に細かな剥離を加えている。4は正三角形に近い形状になっているが、両脚が折れており本来は抉りが深い石鏃だったのだろう。5は白灰色の黒曜石製石鏃。大分県姫島産であろう。剥離は大きく両脚の大きさが異なる。



Fig.60 SC02出土遺物

6、7は滑石製の有溝石錘。6は全長3.05cm、中央部で長径1.55cm、短径1.35cm。断面逆三角形の溝が縦に巡っている。いま所在不明のために重量測定ができなかった。7も同じように細い溝が縦に巡るが頭部では二股に分かれている。全長2.20cm、長径1.40cm、短径1.27cm、重さは5.04g。

8、9は石包丁（石製穂摘み具）。8は頁岩質で、小片だが刃部を両面から丁寧に研ぎ出していることから石包丁とした。背に当たる部分の片面が剥離していることから断定できないが丸く加工したのだろう。9は砂岩質、全面が風化、摩耗しているので加工、使用痕は認められないが、両刃の一部が残っている。いま現存部には紐用の小孔がないことから、12cmを越す長い形状に復元できる。

10は砥石。石材は粘板岩。欠損しているが元は方柱状で4面を研ぎ面としていたのだろう。

SC05竪穴住居跡

調査区中央の西縁に接しており。本遺跡では最も北西側に位置する竪穴住居跡である。床面の約1/6が丘陵の斜面で削り落とされているが、他の壁は20cm前後の高さがあり、本遺跡では残りのいい竪穴住居跡である。いま北東側を北壁とし時計回りに東、南、西壁とすると、その長さは北壁が3.44m、東壁が3.26m、南壁が2.30mを測る。西壁は完全に残っていないので次のように推測した。床面にはベッドが東壁と西壁に平行に並んでいる。いま西壁側のベッド幅を東壁側のベッドと同じ1.16m幅だと仮定し、さらに西壁の両コーナがほぼ直角とすると、北、南壁は約3.70mとなり、北壁はあと26cm、南壁はあと140cm長かったことになる。従って北、南壁が東、西壁よりも44cm長い長方形となる。また各コーナは直角とするにはややシャープさがなく、わずかに丸みがあることからSC05は隅丸長方形の竪穴住居跡としておく。面積は11.662m²、長軸方向はN-35°-Wである。ベッドは床面より

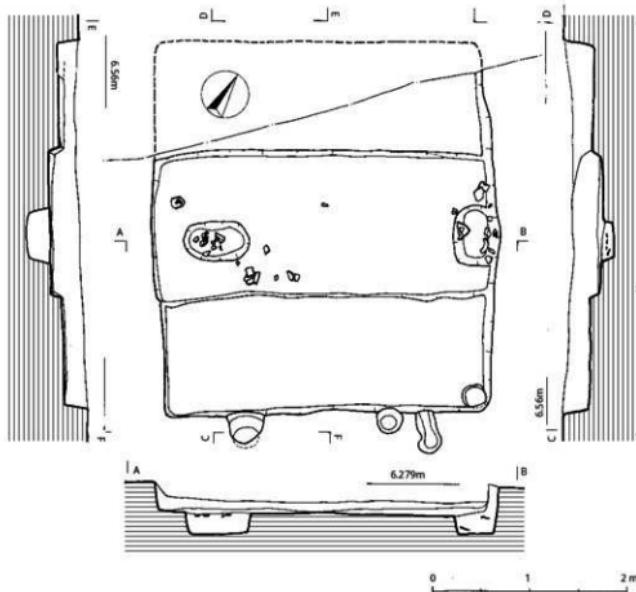


Fig.61 SC05竪穴住居跡図（縮尺1/50）

10~14cmの高さで、その上面はほぼ水平である。また東、西壁のベッド上面の高さもほぼ等しい。床面には壁溝はなく、またピットもわずか3個に過ぎない。SP01とSP02の2個はベッドの間の床面にあり、北壁と南壁に片寄っている。それぞれ長楕円形で、長軸方向が異なっている。この二つのピット以外には北、東壁コーナーに1個あるのみで、これらだけで主柱穴をなしていたかは疑わしい。南壁に内側を向いて斜めに掘り込まれたピットなど住居外部のピットにも柱穴の候補を広げてその配置を検討すべきであろう。



Fig.62 SC05豎穴住居跡（南東より）



Fig.63 床面遺物出土状況（南西より）

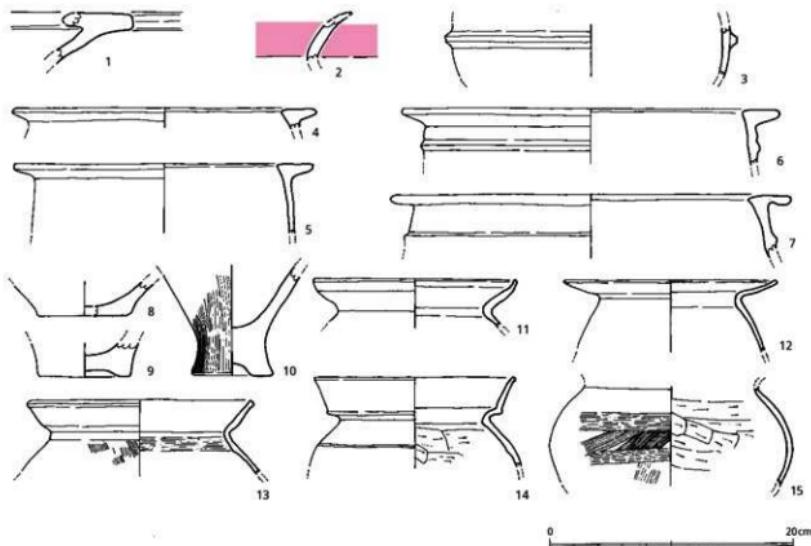


Fig.64 SC02出土遺物図（縮尺1/4、1/1）

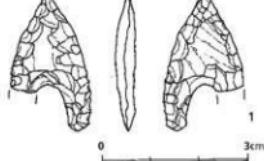
出土遺物 ベッドに挟まれた中央部の床面とSP01、SP02で遺物が出土している。これらはピット埋土の上、中程にあり、SC05の廃絶後に埋没したのであろう。また他の竪穴住居跡と同様に古い時期の遺物が住居内埋土から出土している。遺物量はコンテナ3箱16.6kgを数える。

土 器 1～10は住居内埋土から出土した弥生土器。1～3は壺で、1は広口壺の頸先状口縁部。口縁内端部を欠くが、幅広の口縁を作っている。2は外反す口縁部で、内外面とも丹塗り。3は壺の球形の胴部。最大径部に断面台形の凸帯を1条貼り付けている。全面に摩滅が進んでいる。

4～7は逆L字形口縁部の甕。胴部上半が直立して砲弾形となるものと胴部上半が内傾して張りのある胴部となる2種がある。また口縁部の作りも微妙に異なる。6、7には口縁部下方に断面三角形の凸帯が巡っている。口径は6が31.0cm、7が33.0cmである。

8～10は底部。8は平底で裏か。9は甕の上げ底。底部外縁の接地面は平坦で割りに幅広い。底部からわずかに括れて胴部へのびる、外面はタテハケ目調整。

11～15は古墳前期の土器で、先に記したように床面直上やピット埋土より出土し、SC06廃絶直後の時期を示すと考えられる。11は布留系甕で口径16.8cm、口縁端部を上方に短く摘み上げておさめている。12はく字形の屈曲が強く口縁部も長めである。口縁部の傾きがもう少し立ち、球形に近い胴部となるのかも知れない。口径17.6cm。13の口径は18.6cm、口縁端部の断面は丸くおさめている。頸部内面には強いヨコハケ目。14は山陰系の甕。口径16.4cm、頸部は強く屈曲し、さらに反転して外に開きながら立ち上がっている。端部は丸みを帯びている。肩部外面には暗文状の沈線が1条巡っている。



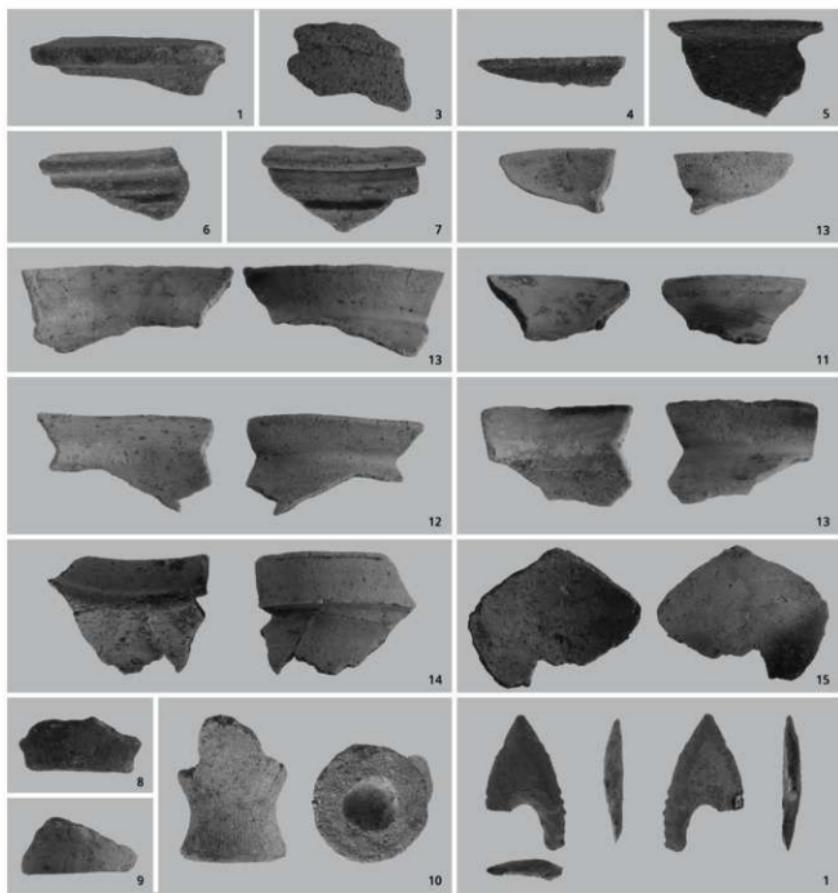


Fig.65 SC02出土遺物

胴部内面は幅広のケズリ。胎土の色調は灰白色。15はやや背が詰まつた球形の胴部。15は口縁部を欠いている。張りのある胴部で膨らみが大きい。内面は左上がりのケズリ、外面は右斜行と横方向のハケ目調整。

石 器 1は片方の脚を欠いているが鍔形の石鎚である。石材は安山岩製で、全体に風化が進んでいる。長さ2.70cm、剥離は大きめで、左図前面に素材剥片主要剥離面を、図右後面には礫面を残している。基部は深く抉り込みU字形となっている。残っている脚の端部は丸みがある。側辺は直線ではなく中位でわずかに膨らんでいる。この他に黒曜石剥片が9g出土している。

SC08竪穴住居跡

SC05とは反対側の丘陵西側縁近くでL字形の細い溝を検出した。竪穴住居跡の壁溝と考え、溝の延長部や住居内部に当たる範囲を精査し、ピットの配列などを検討したが、すでに床面より下まで削平されたと思われ竪穴住居跡を積極的に示すものは掘むことはできなかった。溝と平行、直交するSP01～SP04は長方形の位置に結ぶことができるが、あまりにも間隔が大きい。ここでは発掘時のままの番号で報告する。

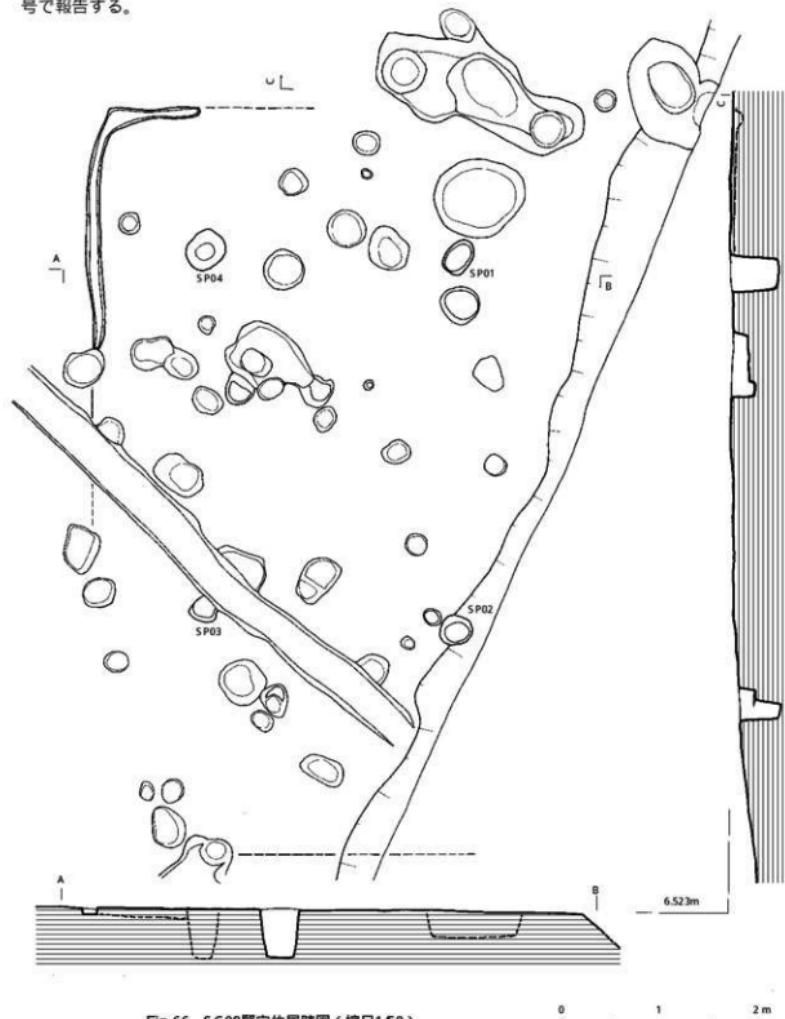


Fig.66 SC08竪穴住居跡図（縮尺1/50）



出土遺物 著しい削平で竪穴住居跡としての落ち込みはない。ここではL字形溝の近くで住居内と想定した範囲から出土した2点を図示するが、SC09に伴う遺物と断定はできない。

土器 1、2とも弥生中期の甕。1は胴部上半部が内傾し、口径よりも大きい胴部となる。2は鋤先状の口縁部で、内端部への張り出しが強い。口径32.0cm。胎土は2mm大の砂粒を含み相い。

このようにSC08は竪穴住居跡としては認定できないが、本遺跡ではこのような細い溝は竪穴住居跡にしか見られないことから、ここに竪穴住居跡があった可能性は高いと思われる。



Fig.67 SC08竪穴住居跡（北より）



Fig.68 SC02出土遺物図（縮尺1/4）

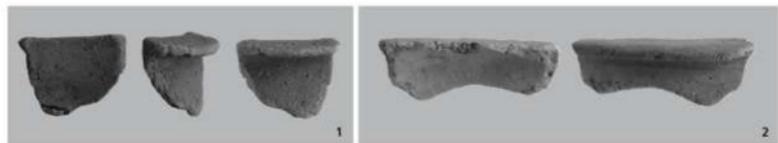


Fig.69 SC02出土遺物

SC09竪穴住居跡

D-1、2グリッド、丘陵西側縁に接しており、西側には約1mでSC02が接近している。SC05と同じような長軸方向の竪穴住居跡で、丘陵斜面で壁、床の一部が削り落とされているが、主柱穴の配置などから元の平面プランや規模を推定復元が可能である。いま北東側の壁から時計回りに北、東、南、西壁とする。東壁だけが完全に残っており、長さは3.5m、高さは18cm、コーナーは隅丸である。北壁は直線的に2.88mのびている。南壁は直角ではなくわずかに内側に寄って2.14mのびる。床面には10数個の大小のピットがあり、SP01～SP04は方形に結ぶことができ4本柱の構造が考えられる。この4本の主柱穴が床面の中央に配置されていたと仮定し、その中心線から折り返すと北、南壁は3.5mとなる。東、西壁と同じ長さであることから、SC09は隅丸方形プランとなる。4本柱と想定したSP01～SP04は本遺跡の他の竪穴住居跡に比べると直径20cm以内の小ささでありながらSP01から順に59cm、49cm、60cm、49cmときわめて深く掘り込まれている。また3壁には深さ10cm前後の壁溝が巡っているが、北、東壁の壁溝は幅が乱れている。床面下には弥生前期の円形貯蔵穴SU19がある。

出土遺物 遺物点数はきわめて少なくコンテナ2箱7.7kgにとどまる。このうち土器6点と石器4点、鉄器1点を図化した。ほとんどが埋土出土であるが、北壁の壁溝から一部が出土している。

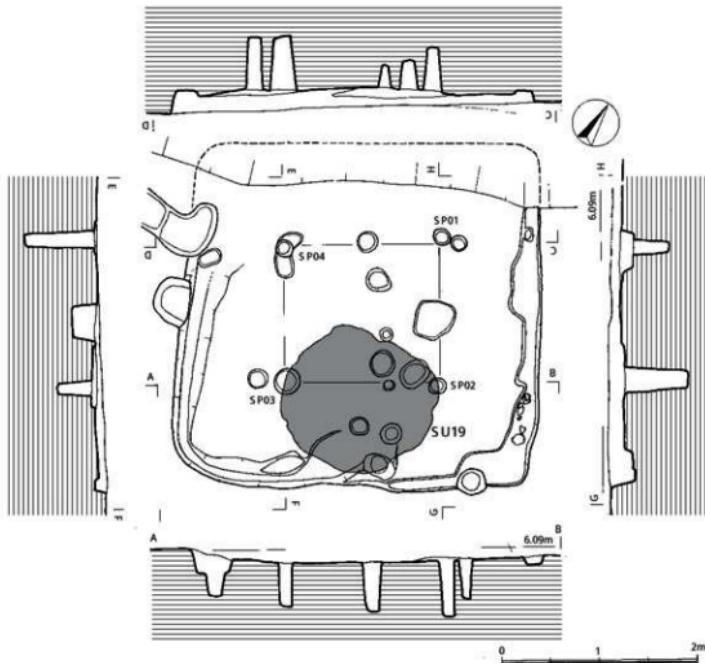


Fig.70 SC09竪穴住居跡図(縮尺1/50)

土 器 1は弥生後期の壺で、口縁部は直に立ち上がっている。胴部との屈曲は緩く、口縁部内面ヨコハケ目。2、3は口径15.5cm、古墳前期の布留系の甌。口縁部は外湾しながらのびている。4は台付き鉢。八字形の台は直線ではなく膨らみがある。鉢上部が不明であるが半球状となるのだろう。鉢下半部にハケ目が残る。5は高坏の脚部。端部は面取りしておさめる。外面は丹塗りを施す。

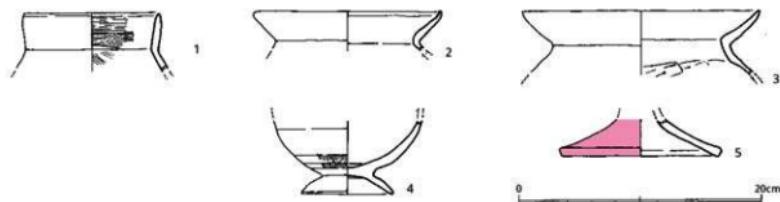


Fig.71 SC02出土遺物図 (縮尺1/4)

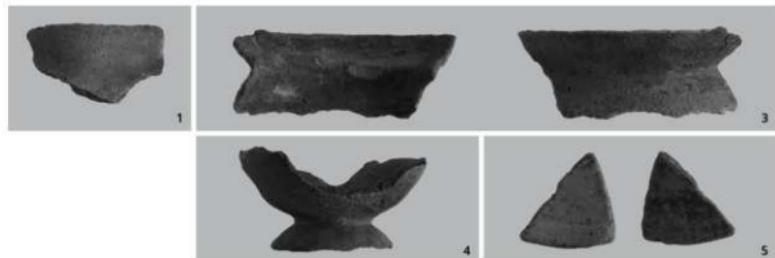


Fig.72 SC02出土遺物



Fig.73 SC09竪穴住居跡 (東南より)

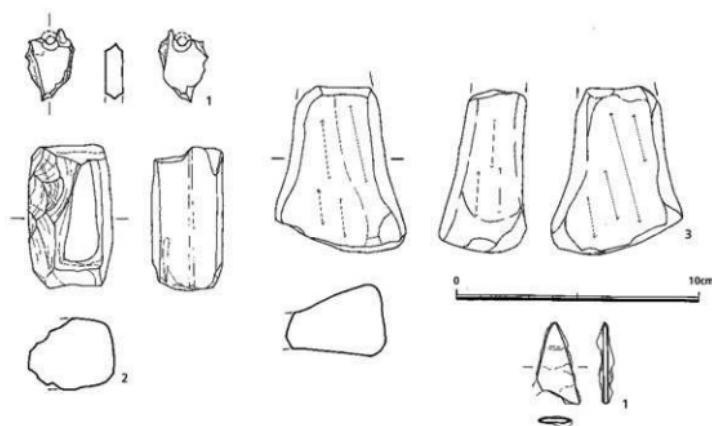


Fig.74 SC02出土遺物図（縮尺1/2）

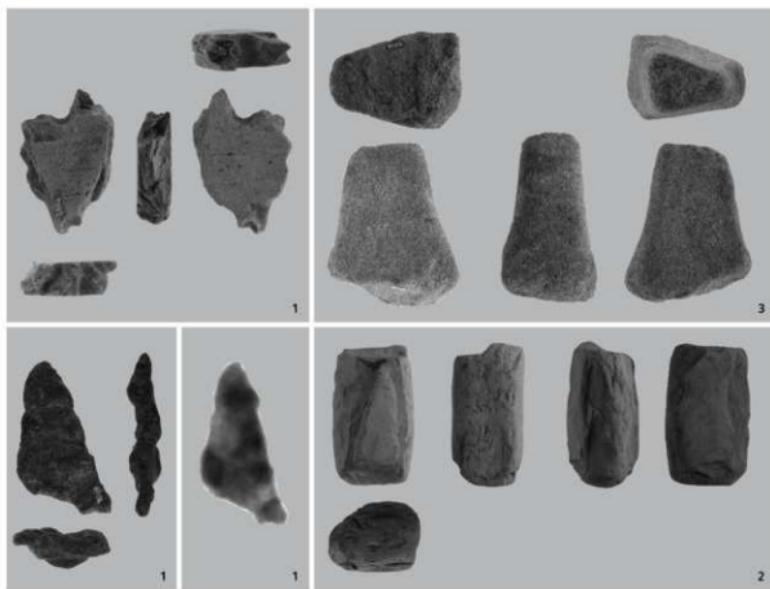


Fig.75 SC02出土遺物図（鉄錠は1/1）

石 器 1は粘板岩で両面がよく研磨されており、両面から穿った小孔がある。推定外径は7mm、内径は4mm。石包丁破片とも考えられるが、厚さが6.7mmあり石包丁としてはやや分厚い。

2は柱状石斧の未製品。現在長5.8cm、厚さ2.8cm。粘板岩質の石材を用いている。

3は砂岩製の砥石。3面が研ぎ面に使用されている。短辺側はあまり使用されていない。

鉄 器 1は三角形凹基式の鉄鎌。最大長は3.3cm。厚さは2mm。基部は左右対称ではなく、三角形に抉りこまれていたと思われる。

2. 貯蔵穴

発掘開始早々にD-4グリッドとE-3グリッドで直径1.5m程のやや大きめの不整方形ピットが現れた。掘り下げるに50cm程の深さながら弥生土器片が出土し始め、ピットの形状や遺物などの出土状況から弥生前期の貯蔵穴と判断した。弥生前期の貯蔵穴が検出された市内遺跡の例からすると豊穴住居跡や周溝などの遺構を伴うことが多く、調査区が舌状丘陵の先端部に位置していることもあって弥生前期の集落発見の可能性が高まった。このため検出遺構については、性格が不明瞭のものでも積極的に遺構番号を付けて慎重な掘り下げ作業を実行するよう努め、後日の類例集めや出土遺物の細かな検討を期した。この方針から大きめのピットについても貯蔵穴(SU)の遺構名とし、発見順に番号を付け計20基を確認した。

前述しているように今回の資料整理、調査報告書作成に当たって再検討を行い、明らかに平面プランや断面形、出土遺物が弥生前期の貯蔵穴と異なるものを豊穴(SK)として区別した。ただしその番号は発掘現場のままとしている。

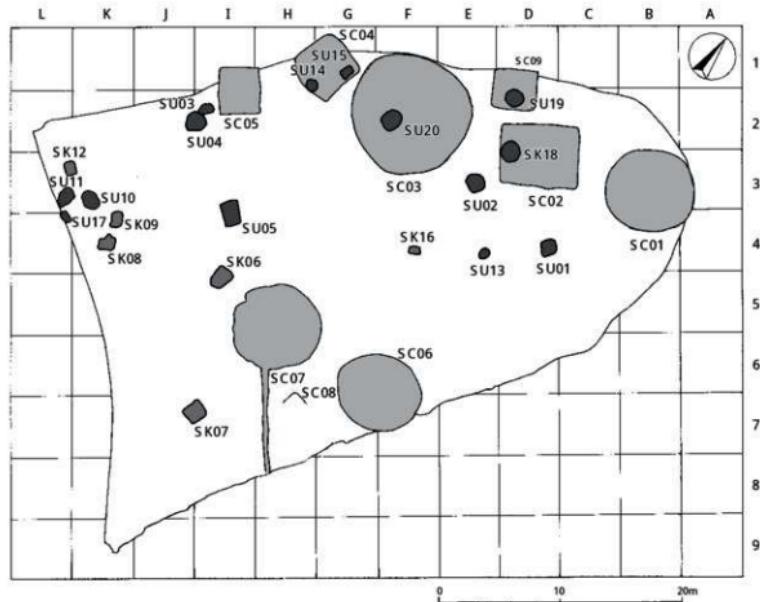


Fig.76 豊穴住居跡と貯蔵穴、豊穴の配置図 (縮尺1/400)

貯蔵穴 (SU) 一覧表

No.	平面形		断面(備考)		図示した遺物		頁 Fig	推定期
	上部・大きさ	底部・大きさ	形 状	深	土 器	石器、土製品		
1	楕丸方形 20cm×13cm	楕丸方形 13cm×12cm	ほぼ直の壁。底面は中央に低い段。上部に蓋被せの縫り込み。	50	弥生前期-完形壺1、甕1 土器2kg	石織1	64 79	弥生前期
2	不整円形 158cm×149cm	不整円形 152cm×141cm	ほぼ直。底部近くで丸みを持つ	80	弥生前・中期-壺5、甕 12、鉢1、底部6 土器7.1kg	石織3、石槍1、 砾石1 黒曜石19g	66 83 86	弥生中期
3	不整椭円形 128cm×96cm	不整椭円形 168cm×71cm	Iほぼ直。底面はほぼ平坦	117	未図化破片 土器1kg			弥生中期
4	不整円形 175cm×164cm	不整円形 170cm×148cm	ほぼ直。底面は凹状	90	弥生中期-甕2、 土器1kg		70 90	弥生中期
5	楕丸長方形 187cm×118cm	楕丸長方形 207cm×150cm	ほぼ直。底面はやや波打つ	66	弥生前・中期-壺2、甕 5、底部8 土器3.95kg	石織2、柱状石斧1、 石錐1、石斧1、 石匙1 黒曜石113g	72 95	弥生前期
10	椭 圆 形 170cm×125cm	椭 圆 形 190cm×160cm	袋状だが一方は直線に近い。底面はほぼ平坦	96	弥生前期-壺3、底部3 土器3kg	黒曜石156g	75 101 105	弥生前期
11	椭 圆 形 171cm×115cm	円 形 218cm×211cm	フラスコ状。底部は微妙な凹凸がある	129	弥生前期-壺3、甕7、 底部5 土器3.65kg	石織1、石包丁1	77 105 108	弥生前期
13	円 形 99cm×80cm	円 形 153cm×156cm	フラスコ状。底部は中央部がわずかに陥る	84	縄文土器3、弥生前期-壺 2、甕4、小型土器1、 底部2 土器4.55kg	石織1、石槍1 黒曜石53g	81 113 116	弥生前期
14	不整円形 108cm×80	不整円形 206cm×216cm	極端なフランコ状。底部の中央部がわざかに隆む。蓋被せる段がある。	97	弥生前期-壺1、甕棺1、 甕5、鉢1、底部9 土器18.3kg	石鍬1、土製投擲1 黒曜石201g	84 120 123	弥生前期
15	楕丸方形 108cm×80cm	不整椭円形 213cm×171cm	底面より壁は直に立つが上部になって急激に口がすぼまる。底面は平坦。蓋被せの段。	76	縄文土器1-押型文土器1、 弥生前期-壺2、甕5、 底部5 土器4.1kg	黒曜石131g	88 125	弥生前期
17	長椭円形 115cm×60+cm	楕丸長方形? 206cm×70+cm	北壁は直だが他のフランコ状。底面はほぼ平坦。全形不明	80	弥生前期-甕4、鉢1、 底部4 土器4.6kg	黒曜石30g	91 129	弥生前期
18	円 形 160cm×166cm	円 形 161cm×156cm	一方の壁は袋状だが、一方は上部が開く。底面は平坦でない	50	弥生前期-壺1、甕1 土器0.21kg	黒曜石8g	92 132	弥生前期
19	円 形 147cm×145cm	円 形 150cm×149cm	一方の壁は袋状だが、一方は上部が開く。底面は中央部がわずかにへこむ。	53	縄文土器1、 弥生前期-壺3、甕2、 鉢1、底部1 土器2.8kg	石織1、石劍1、 不明1 黒曜石43g	94 136 138	弥生前期
20	不整円形 176cm×84cm	不整円形 170cm×120cm	壁は直。底面は平坦。	85			96 140	

豊穴 (SK) 一覧表

No.	平面形		断面(備考)		図示した遺物		頁 Fig	推定期
	上部・大きさ	底部・大きさ	形 状	深	土 器	その他		
6	楕丸長方形 200cm×125cm	楕丸長方形 180cm×115cm	底面と新しい境界がなく斜めに立ち上がる。底面は中央部に向かって緩やかに深くなる	23	古代-皿1、壺4、高台付 壺2、底部5 土器6.1kg	丸瓦1	97 143	古代
7	楕丸長方形 168cm×142cm	楕丸長方形 164cm×143cm	四壁ともほぼ直。わずかに中央部がへこむ。四隅と中央部に小ピット	26	古代-甕3、底部2 土器3kg	石織1	99 148 152	古代
8	楕丸長方形 138cm×93cm	楕丸長方形 130cm×88cm	四壁ともほぼ直。東瓶辺側に斜めのピットがある。	79	國化できない小破片ばかり などが弥生中期の片断り土器 片あり。			弥生中期?
9	楕丸長方形 136cm×93cm	楕丸長方形 125cm×95cm	北コーナーが斜めの壁となる。 東瓶辺側に斜めのピットがある。	55	ほとんどが小破片。L字形口 縁甕の小片あり。			弥生中期?
12	楕丸長方形 124cm×94cm	楕丸長方形 128cm×106cm	南瓶辺と東瓶辺の壁が斜め。底面は埋土上からのピットがある。	30	無遺物			不明
16	楕丸長方形 100cm×61cm	楕丸長方形 92cm×61cm	両瓶辺側が丸く膨らんでおり、 四壁はほぼ直に立つ。	39	無遺物			不明

SU01貯蔵穴

SC01より南側約5mの位置で検出した。舌状丘陵の長軸線近くにあり、その先端からは約12mを測る。地山ローム面でのプランは不整形であるが、約10cm掘り下げるとき丸長方形の落ち込みが確認できた。その大きさは201cm×135cm。その長軸線の方はN-42°-W。次にこの部分を掘り下げる、約50mで底面に達した。断面図のように壁はほぼ直になり、北側壁がわずかに傾いている。底面は平坦ではなく中央部に高さ約10cmの段状となっている。本遺跡の豊富な居跡の残存状況から後世の削平は少なくとも50cmには及ぶと推測されることから、本来の深さにはその削平分を加える必要がある。しかし貯蔵穴には蓋などの装置が不可欠であることから貯蔵穴本体だけの素掘りとは考えにくく、検出面の不整形落ち込みは、このための段と考えた方が機能的である。おそらくは断面図のように両短辺側の段が蓋などを被せるために削り込まれたと思われる。

出土遺物 貯蔵穴内埋土の堆積状況観察を行っていないが、他遺構と同じように黒褐色土で特段の変化はない。弥生土器の大きい破片がまとまって出土し、接合すると弥生前期の壺が復元できた。この他の遺物は少なく、弥生土器1点と安山岩製の石鎧1点を図示した。なお黒曜石剥片は出土していない。

土 器 1は、口径30cm、胴部最大径40cm、器高46.8cmの壺。平底の底部から緩やかに内湾しながらのび、中位よりやや上方に最大径部がある。頸部との境にきわめて純い段をもうけ、内傾する頸部がつく。口縁部は粘土紐を貼り付けて厚みを増して外湾している。2は如意形口縁の瓶で、口径不明。口縁端部の刻み目は上端から下端に右斜行で入れている。口縁部内面はヨコハケ目になだれを加えている。

石 器 1は二等辺三角形の凹基式石鎧、石材は安山岩。片方の脚を欠損しているが、抉りは割りに深い。石材のせいもあるってか剥離は粗く、厚みもある。長さ2.6cm。

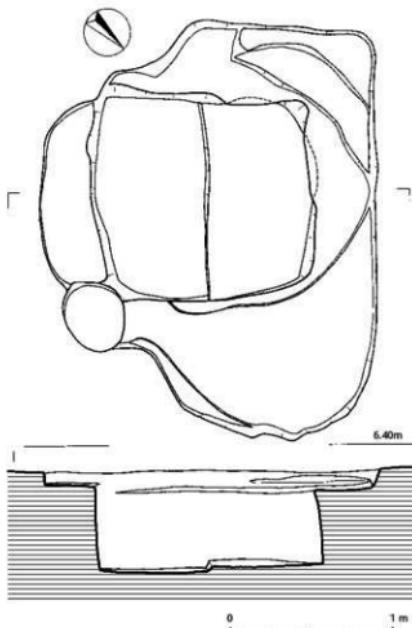


Fig. 77 SU01貯蔵穴図 (縮尺1/30)



Fig. 78 SU01貯蔵穴 (南東より)

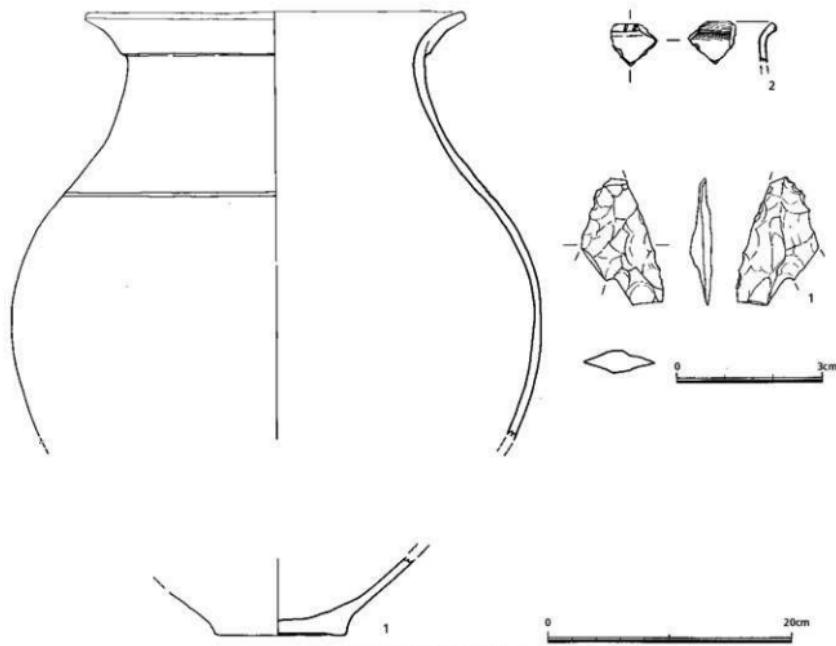


Fig.79 SU01出土遺物図 (縮尺1/4, 1/1)

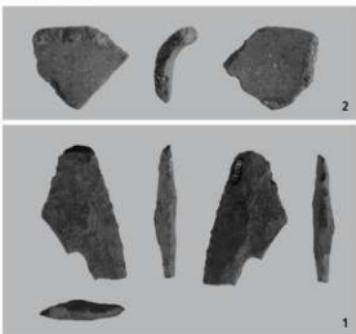


Fig.80 SU01出土遺物

SU02貯蔵穴

SC02の南コーナーより南に約1.5mあり、グリッドはE-3。不整円形のプランで、大きさは158cm×149cm。壁はわずかに底面に向かって膨らむように約80cmの深さで掘り込まれてあり、西側ほどより斜めの壁となっている。全周壁とも直線的な鋭利さはない。底面へは丸みを持って移行し、やや凹凸のある底面となっている。

出土遺物 コンテナ2箱7.1kgの遺物量で、弥生土器のほとんどは大小の破片になっており、接合して復元完成品となる土器はない。これらの多くは埋土の中程よりやや下方に多く含まれており、底面での出土はない。

土 器 弥生前期～中期の土器24点を実測、図示する。1～6は壺。1は口径30.0cm、口縁部の傾きは弱いが、外側に粘土紐の貼り付けで段を付けて頸部との境を作っている。2の器壁では粘土貼り付けの様子は不明だが、カーブは緩やかではなく、口縁端部は小さく引き出したかのように見える。口径27.3cm、内面は摩滅して調整痕不明、外面はナデ調整。3は肩部に浅く細い沈線2条を巡らしている。もう少し上方から頸部へ移行するのだろう。内面は指ナデ痕が残る。4は口径25.6cm。大きく広がる口縁部で、内外面ともナデ調整。5は胴最大径部の破片で、断面M字形の凸帯を貼り付けている。現存破片では丸みのある胴部が復元できる。6は鋸先状口縁部で口径は35.5cmである。口縁内、外端が異様に長く、水平で幅広の口縁部となっている。

7～16は如意形口縁部の甕。10は脛胴部片。7の外反は弱く、胴部がやや膨らむのであろう。口縁部の刻み目は小さい。8、9とも鈍い湾曲で短く、刻み目も不鮮明。10は胴段部で不均一の刻み目を加えている。胴部に膨らみはなくほぼ直に立っている。11は口径29.0cmの鉢。胴部で屈曲し、上半部はわずかに内傾し小さく外反する口縁部をつける。12はきわめて短い口縁部で、胴部外面のハケ目調整も口縁部の刻み目も粗雑。13も同じように短い口縁部であるが口径は21.2cmと小さい。刻み目は口縁端部の上下に渡って垂直方向にしっかりと入れている。14は口縁部が肥厚しており、端部断面は方形に近く、刻み目はその中程から下端にかけて右斜行に入れている。15もよく似た口縁部で、刻み目は大小あり、粗雑な印象が強い。

16、17は逆L字形口縁部を持つ甕。16の口縁部上面はわずかに凹んでいる。17は口径24.0cm、胴部上半は内傾して丸みのある胴部を作る。

18は弥生前期の鉢の口縁部。口縁部で内外面は割りに丁寧なミガキを施している。

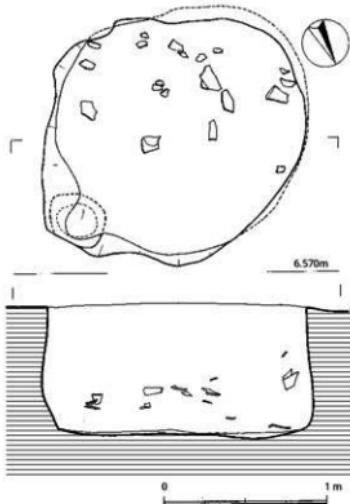


Fig. 81 SU02貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig. 82 SU02貯蔵穴(南より)

19~24は底部。19は底径11.4cm、分厚い平底から厚めの器壁のまま外に強く開きながら胴部へのびている。壺であろう。20~24は甕の底部。20は底径7.4cm、底部外縁の器壁は厚みがあるが中央部は極端に薄い。21は底径4.8cm、直線的に胴部へつながっている。外面の調整はハケ目が部分的に残っている。22は平底で、底径5.6cm。23は底径9.6cm、中央部がわずかに凹んでいる。緻密な胎土が用いられている。24は中央部を欠いている。底径は9.8cm、底部からわずかに外に膨らみながら胴へのびている。外面はタテハケ目調整。

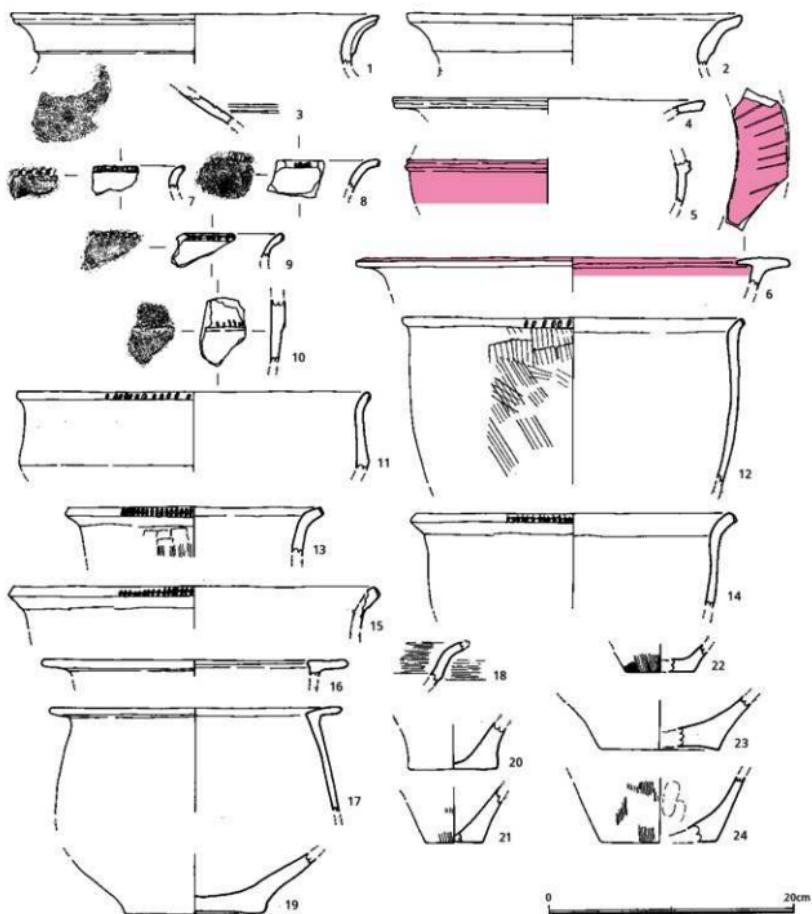


Fig.83 SU02出土遺物図 (縮尺1/4)

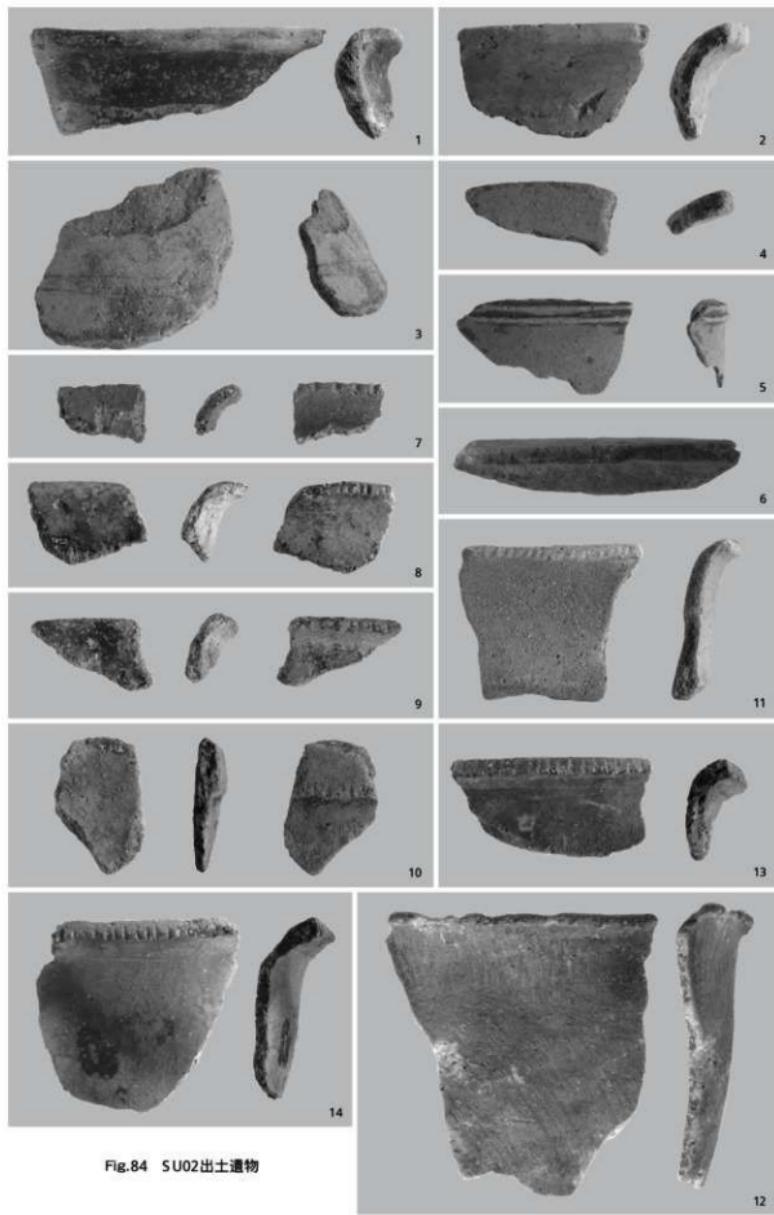


Fig.84 SU02出土遺物

石 器 4点図示した。この他に黒曜石剥片が19g出土している。

1～3は石鎌。1は安山岩製で全体に風化が進んでいる。よく整った三角形で先端の角度は74度に開いている。縁部は直線的であるが脚端部は曲線的に加工している。長さ1.45cm、幅1.85cm、厚さ0.25cm。2は黒曜石製石鎌、二等辺三角形で基部の抉りも深い。3は不純物を含んだ黒曜石製で、全体が風化している。節理から破損して先端部を欠いているが、本来は鍔形の二等辺三角形だったのだろう。剥離幅が2～3mmと割りに大きい。

4は長さ、幅とも2.50cmの尖頭状石器。安山岩で同じように風化が進んでいる。右脚の一部を欠く。5は粘板岩質の砾石。剥離しており全形不明。研ぎ面はよく使用されて平滑になっている。

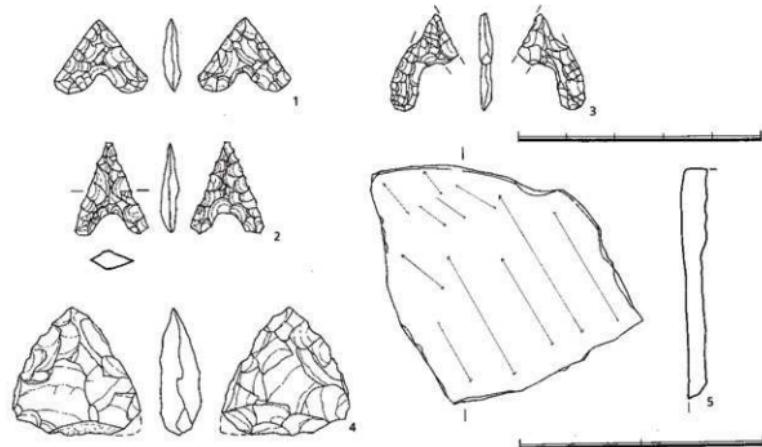


Fig.85 SU02出土遺物図 (縮尺1/1, 1/2)

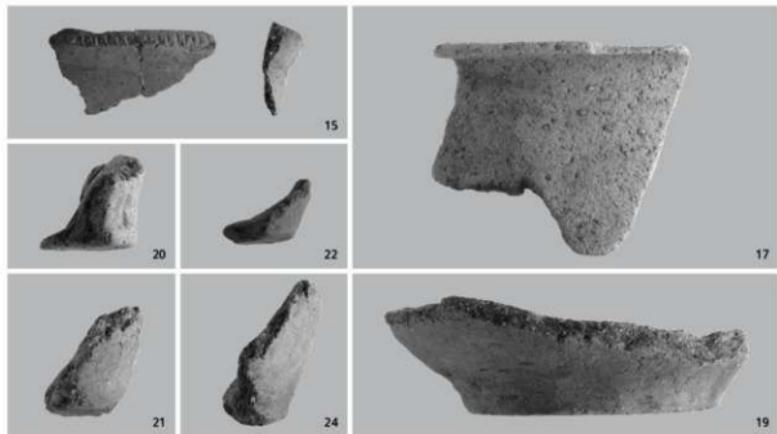


Fig.86 SU02出土遺物

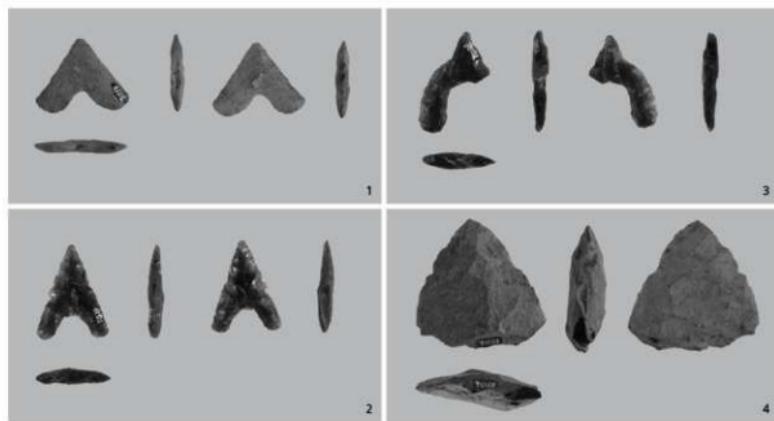


Fig.87 SU02出土遺物

SU03貯蔵穴

I-2グリッド、SC05の南コーナーに接近してSU03、04の2基の貯蔵穴を検出した。SU04からは時期判断できる土器片は出土していないが、切り合わないよう巧みに平面プランをとっていることからほぼ同時期の貯蔵穴と推測した。

SU03は不整橢円形で長軸は128cm、短軸95cm。南側が狭まっている。深さ117cmの底面は、ほぼ平坦。壁は直線的に掘

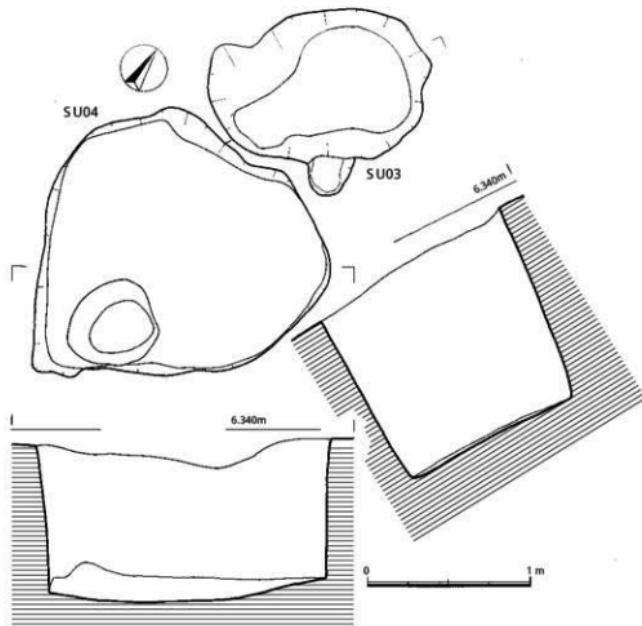


Fig.88 SU03、04貯蔵穴図 (縮尺1/30)

り込んでいることから底面も平面形と同じようなプランとなっている。

SU04貯蔵穴

SU04の平面プランは、南側がほぼ直角に角張っているが、SU03と接する北側は丸みを帯び、さらに切り合わないよう凹んでいる。このような2基の平面プランからSU04が新しく掘られたことが分かる。

壁は直な部分と斜めの部分があり一定しない。深さはSU03よりもやや浅く90cmを測る。底面は南壁に向かって傾斜している。

出土遺物 きわめて少なく、49点の土器片と3点の黒曜石片のみである。このうち実測可能な土器は2点に過ぎない。

土 器 1、2 は弥生中期の甌の口縁部。1

は小破片のため口径不正確であるが24.4cmと復元した。胴上半部は膨らみを持たない。2は口径33.0cm、口縁部は強く屈曲してく字形となり、端部は丸く尖っている。内外面ともヨコナデ調整。



Fig. 89 SU03, 04貯蔵穴（南より）

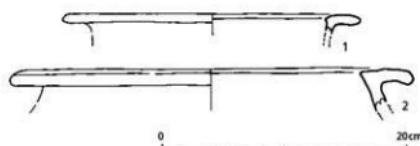


Fig. 90 SU03, 04出土遺物図（縮尺1/4）

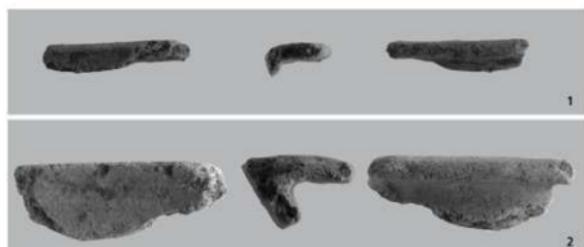


Fig. 91 SU03, 04出土遺物

SU05貯蔵穴

I-3、4グリッド、舌状丘陵の長軸線上に近い位置にある。隅丸長方形の平面プランで、その長軸方位はN-55°-Wである。大きさは長側辺が187cm、北西側の短辺が118cm、南東側が145cmなので正確には台形プランと言えよう。深さは66cmで底面は中央部がわずかに凹んでいる。壁は南東壁だけが直で、他壁は底面に向かって開いている。図では西コーナーにピットを書き込んでいるが、これはSB02の柱穴で、SU05の埋土に掘り込まれてあり、その前後関係を知ることができる。

出土遺物 底面近くで大きめの破片が出土したが、他のほとんどが埋土中の出土で小破片となっている。土器の総量は2箱3.95kgを測る。この他に黒曜石剥片が113g出土している。

土 器 いずれも弥生土器で1、2は壺の口縁部。小片のために口径不明。1の内面は細かなヨコミガキ調整。2は外側に粘土を接合して肥厚させ、端部は断面方形に近くおさめている。

3～7は如意形口縁部を持つ甕。6以外は刻み目を加えた短い口縁部である。

8は逆L字形の小さな口縁部の甕。口径18.8cm、内端部は断面に丸みがある。刻み目は割りに深いが間隔は不均一となっている。

9はミニチュア土器、外面に背の低い三角形凸帯を貼り付けてい る。

10～16は底部。14は底径10.6cm。外縁を輪状に残し中央部が凹んでいる。16は円盤状の底部から丸みのある脛部がのびてあり壺となるのだろう。

石 器 1、2は黒曜石製の石鎚。2は片方の脚を欠いているが基部折りは狭く深い。

3は柱状片刃石斧。粘板岩質の石材。剥離して元の大きさは不明。図左はよく研磨している。

4は砂岩製の石錐。図側面と頭部はよく摩滅している。下方は折れている。

5は玄武岩質の石材から石斧頭部としたが、全体が著しく風化、摩滅している。

この他に縦型の石匙が底面直上で出土している。発掘後に所在不明となっているが、その出土状況を写真で示す。



Fig.93 SU05石器出土状況

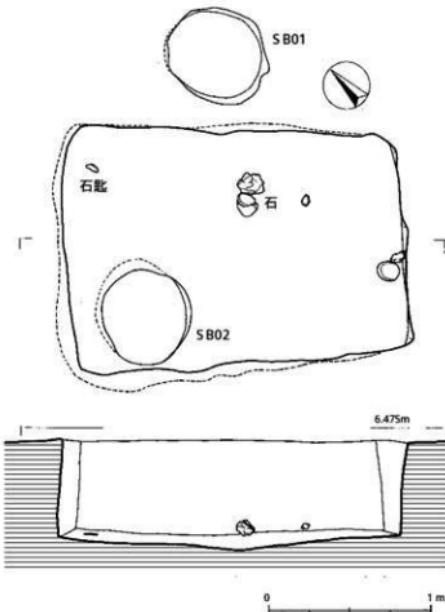


Fig.92 SU05貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig.94 SU05貯蔵穴(南西より)

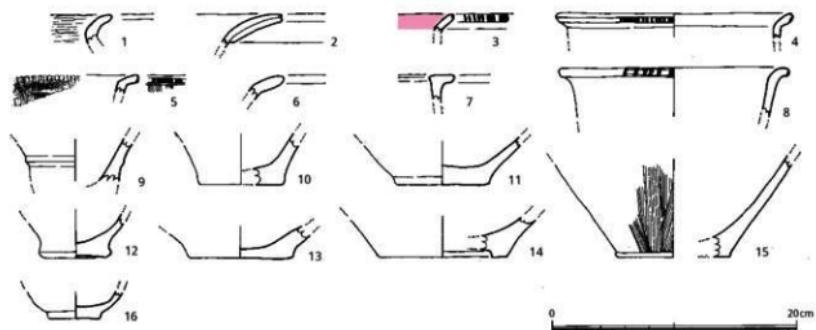


Fig. 95 SU05出土遺物図 (縮尺1/4)

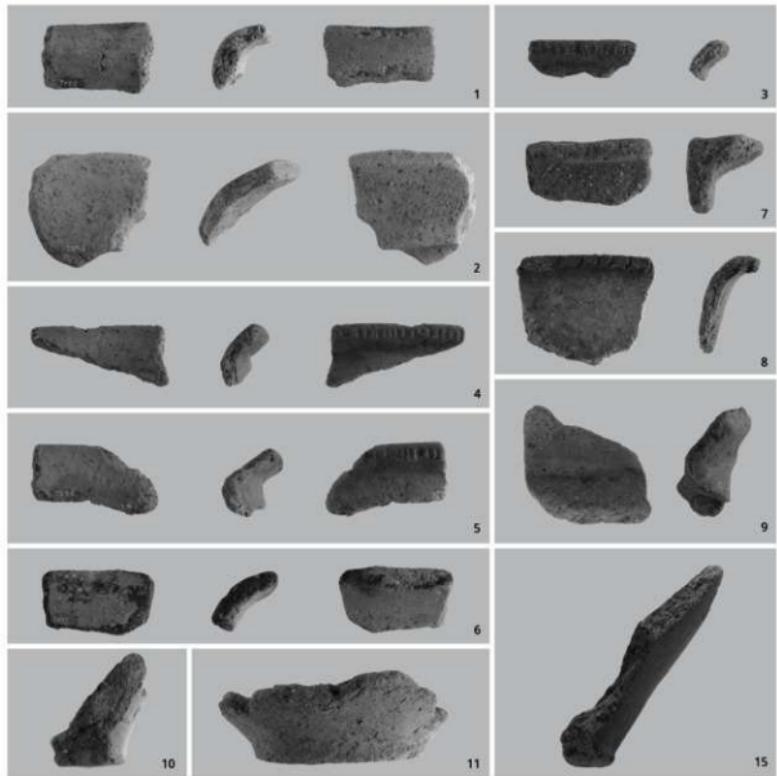


Fig. 96 SU05出土遺物

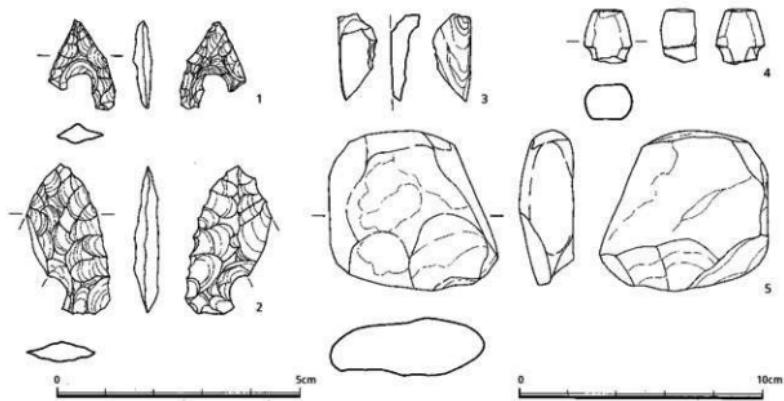


Fig.97 SU02出土遺物図 (縮尺1/1, 1/2)

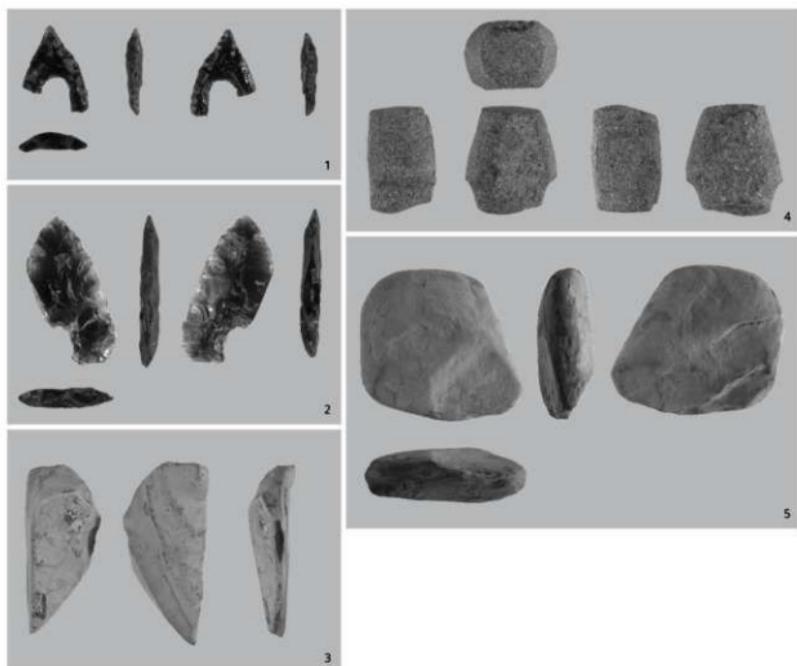


Fig.98 SU02出土遺物

SU10貯蔵穴

調査区北西隅K、L-3、4グリッドの市道に沿って貯蔵穴3基と竪穴3基が集中している。SU10はその中央を占める貯蔵穴である。平面プランは東西にやや長い橢円形で、長軸は170cm、短軸は125cm。深さ96cmで底面に達する。ほぼ平坦な底面は東側に張り出しているので、東側の壁は丸みのあるフラスコ状の断面傾斜となっている。一方の西側は底面から直に立ち上がり、地表近くで棚状に狭くなっている。上部がすでに削平されていることからすれば、現在残る断面の傾きからも上面はかなり狭まっていたと予想できる。

出土遺物 6点の弥生土器を図示したが、出土総量は1箱2.9kg、黒曜石194gと少ない。

土 器 1～3は壺の口縁部。1は分厚い器壁で頸部との境に鈍い段を設けている。2は口径41.0cmでやや大きめの壺。口縁部から頸部にかけて内外面ともに細

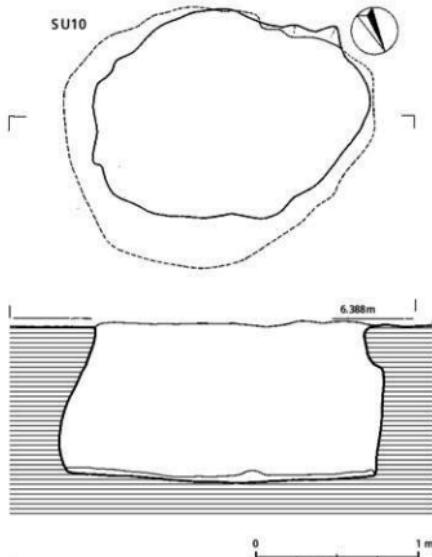


Fig.99 SU10貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig.100 調査区北西隅の貯蔵穴と竪穴

かなヨコミガキを施している。口縁端部は粘土接合とヨコナデで断面が口唇状となっている。3は朝顔状に開いており、口縁部はそのまま薄くおさめ尖ったような断面となっている。

4～6は底部。4は壺の平底。底径10.0cm。5は外面にタテハケ目。底部中央の器壁は薄いつくり。6は底部外縁を指押さえしておりその痕跡が一周している。胴部への立ち上がりは急で、上部は膨らみがないのであろう。器壁は厚手の作りである。

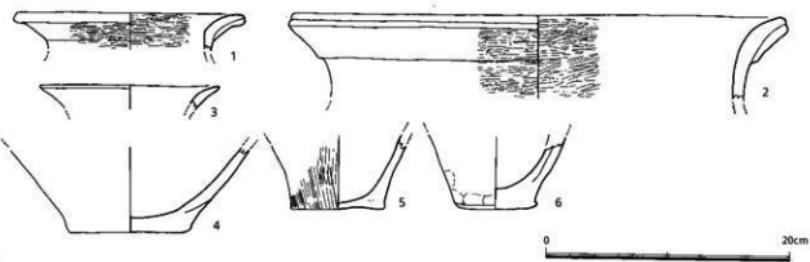


Fig.101 SU10出土遺物図 (縮尺1/4)

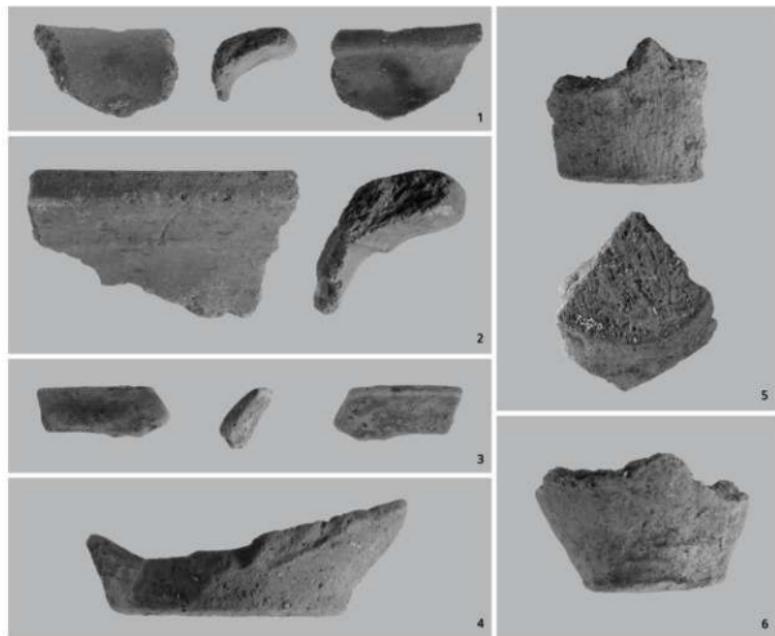


Fig.102 SU10出土遺物

SU11貯蔵穴

SU10より西にわずか50cmと接近している。平面プランは同じように楕円形でラインは乱れている。その長軸方向はSU10と八字形の位置関係である。長さは長軸が171cm、短軸が115cmを測る。南側は道路排水溝工事でカットされた可能性があり、本来は円形に近かったのであろう。底面は正円形に近く、その直径は218cmである。断面は丸みのある三角プラスコ状で、底面より高さ45~70cm当たりから直に立ち上がっている。上面に比べ底面は周囲に均一に約2倍近くの広がりを持っている。底面は平坦ではなく微妙な凹凸があり、やや南側に傾斜している。上部の直な壁の高さがどれほど削平されたのか知りたい所であるが、蓋を置くための段掘りがあったのだろう。

出土遺物 貯蔵穴の残りぐあいに比べ、遺物の出土数はけっして多くない。細片でもあっても実測を試みたが弥生前期土器15点と石器2点の図示にとどまった。総量はコンテナ1箱3.65kgである。

土 器 1~3は壺。1は内傾する頸部から外に丸く湾曲してそのまま口縁部を作る。器壁は厚くなっていないし、ほとんど段をつけない。器面の調整はナデ。口径9.0cm。2は胴部より下方を欠いているが残存部から各部の接合方法や全形を推測できる。胴部は球形で、短い頸部は直線的に内傾し、口縁部は強くく字形に屈強している。口縁、頸、胴部ともに明瞭な境をなしている。胎土は精良土が用いられ、外面はミガキに近い丁寧なナデ調整を加えている。口径は9.2cm。器高18cm程の壺に復元できる。3は口縁部の小破片。精良土の胎土で、焼成も良好。外面は丁寧なナデで、滑らかな器面となっている。口縁端部に黒斑がある。

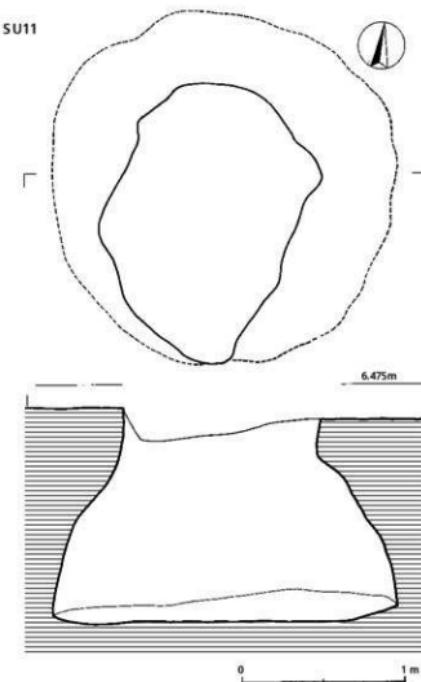


Fig.103 SU11貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig.104 SU11貯蔵穴(南より)

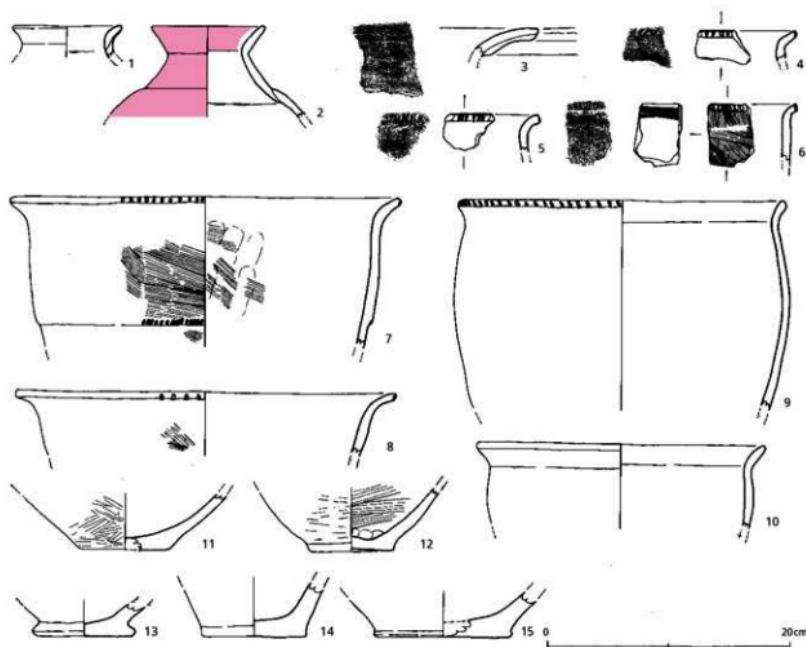


Fig.105 SU11出土遺物図 (縮尺1/4)

4～10は甕で、すべて如意形口縁部を持つ。4～6はきわめて短い口縁部で、刻み目も小さく細かい。6の外面は刻み目直下に細かなハケ目、その下方は斜行ハケ目調整。7は膨らみのない胴部で、その中位に段をつけ下方は器壁が薄くなっている。その段に入れた刻み目は口縁部よりも間隔が密である。口径32.0cmの口縁部は、長めに引き出しており、端部は丸くおさめている。胴部外面は左斜行のハケ目、内面にはタテ方向の押圧痕が残る。8はまったく膨らみのない胴部で底部から直線的に大きく開き、31.0cmと大きめの口径となる。9の胴部は中位に最大径があり、27.6cmの口径よりも大きい。口縁部も上方に立ち上がっている。10も同じように屈曲する口縁部で、胴部の膨らみが弱い。

11～15は底部。いずれも平底。11、12は壺。

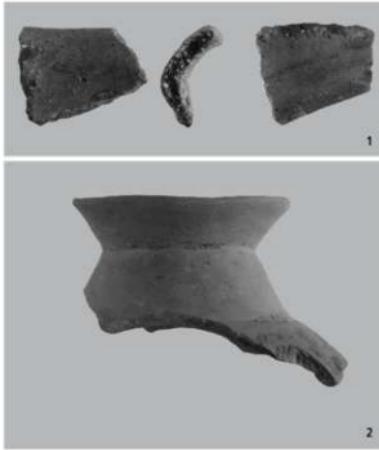


Fig.106 SU11出土遺物

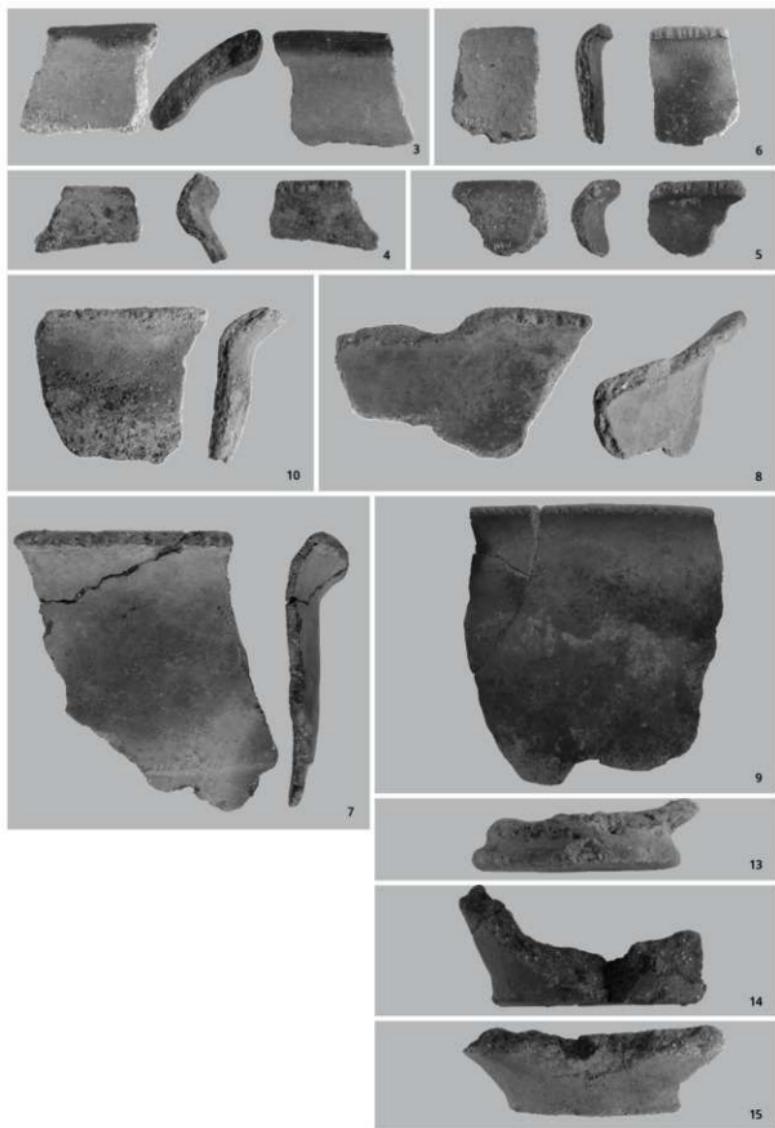


Fig.107 SU11出土遺物

底部からそのまま丸く外湾しながら脛部へのびている。11の外面は粗いミガキ。12の内面はハケ目調整。13は底部外縁が丸く張り出し、括れてから脣部へのびている。底径8.2cm。14は底径8.8cm。脣部外面はナデ調整。15は底径11.4cm。底部外縁が小さく突出している。石器加工した石器は図示した2点。黒曜石剥片は出土していない。

1は安山岩製の凹基式石鎌。全体に風化が進んでいる。基部の抉りは浅い。剥離は大きく厚みがある。両脚の形状が異なり左右対称となっていない。

2は半月形外湾刃の石包丁（石製穂摘み具）で石材は頁岩製。全体の半分以上を欠き、また風化で剥落が激しい。身部の加工痕は不鮮明だが刃部は研ぎ出し方向が観察できる。図左（前面）はタテ方向、図右（後面）はヨコ方向の研磨となっている。紐を通す小孔が残っているが、両面からの穿孔は途中のようである。刃部研ぎ出しも不十分であることから製作途中に破損したのだろう。背部を欠いているものの、かなり大型の石包丁に復元できる。

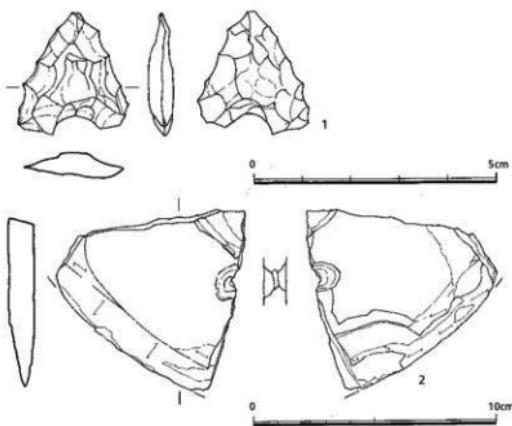


Fig.108 SU11出土遺物図 (縮尺1/1, 1/2)

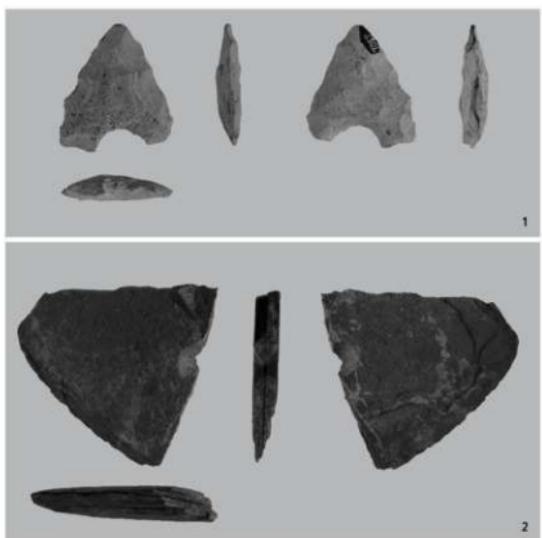


Fig.109 SU11出土遺物

SU13貯蔵穴

E-6グリッドで検出した。舌状丘陵の長軸線上近くに位置している。平面形は円に近い橢円形で長軸99cm、短軸80cm。長軸方向は北より約43度東に傾いている。断面はフラスコ状であるが、底面から直線的に入り口に向かって斜めな壁ではなく、底面から約25cmの高さまでは直に立ち上がり、次に内傾斜しさらに屈曲して上方に狭まっている。SU11の断面もよく似ているが、SU12がより鋭角的と言えよう。底面の大きさは153cm×156cmでほぼ正円に近い。上部が削平されてあることから、蓋を被せるなど入り口部の構造は不明。深さ84cm。

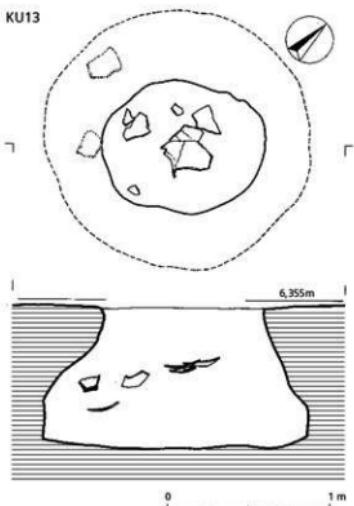


Fig.110 SU13貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig.111 SU13貯蔵穴(北より)

出土遺物 埋土のやや中程より甕の胴部や底部の大きめの破片が出土した。接合作業で甕がほぼ完形となった。土器総量は1箱4.6kg。小片の中から縄文土器3点を発見したことは、発掘、整理作業員の注意力によるもので、本調査の成果の一つとなった。

土器 先に3～5の縄文土器から記す。縮尺は図が1/4、写真が実大である。3は灰褐色の色調で、外面に鈍い条痕が上下に3列並んでいる。幅は約2mm。器壁の厚さは約7mm。胎土は小砂粒が入り粗目だが、脆くはない。小片で全形を知り得ないが縄文後期か。4の色調は暗褐色で、器壁の厚さは約8mm。同じように1mm前後の小砂粒を含んでおり、焼成は良好。外面

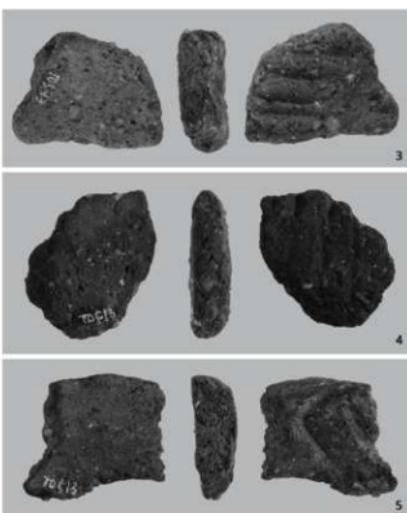


Fig.112 SU13出土遺物

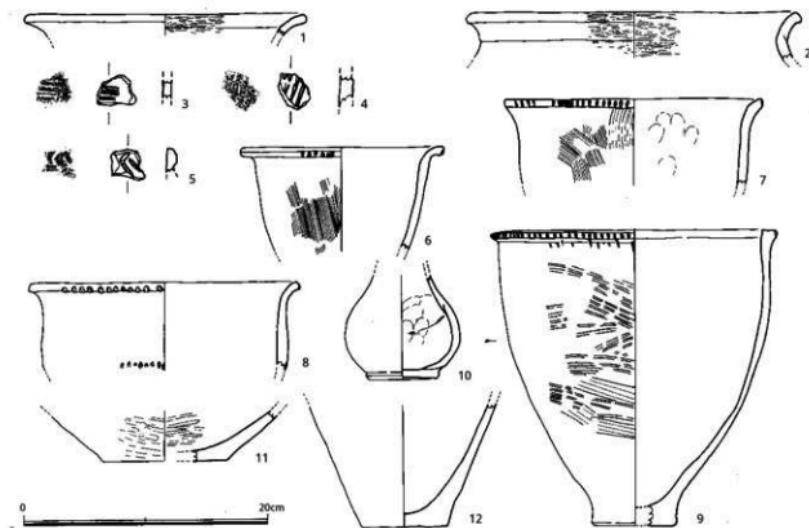


Fig.113 SU13出土遺物図 (縮尺1/4)

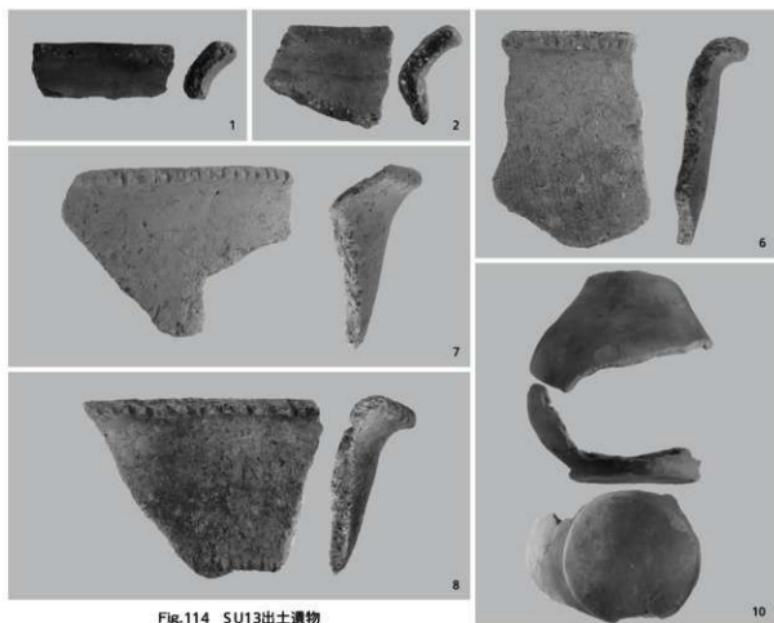


Fig.114 SU13出土遺物

に右斜行の凹線が4条ありうち2本は連結していない。図上端は細い工具を押し付けたように見え、口縁部の可能性もある。縄文中期か。5は口縁部と思われる小破片。外側に低い台形に盛り上がり、わずかに外に傾いている。器面は暗赤褐色で焼成良好。外面にく字形の沈線がつく。縄文時代後期か。

1、2、6～9は弥生土器。1、2は壺。1は口径23.2cm。精良土ではないが堅緻な胎土を用いている。内外面の調整も丁寧。小破片で頸部への移行、境は不明。2はく字形に屈曲する口縁部で口径27.5cm。胎土に小砂粒を多めに含んでいるが、調整がよく器面には露出していない。口縁端部は方形断面に近い。外面はミガキとハケ目、内面はミガキ。

6～9は甕。6は口径16.6cmで、小さく短い如意形の口縁部である。口縁端部の刻み目は中程から下端にかけて入れているが粗雑である。外面は左斜行のハケ目調整。7は胴部から口縁部へかけて厚みのある器壁で、口縁部はわずかに湾曲しているにすぎない。8は口径20.2cm。口縁屈曲部の器壁が薄くなっている。口縁端部の刻み目は下端のみ。9は接合して完形となった甕。口径23.4cm、器高24.1cm。口縁部が特徴的なつくりで上面が平坦面に近い。その外端部に刻み目を入れている。その時の傷が口縁下方にもついている。胴部は砲弾形に近く、外面には粗いハケ目痕が残る。

10は精良土を用いた壺形の小型土器。径9.4cmの底部は円盤状で球形の胴部がつく。胴上半部は緩やかに頸部にのびて段がないので無花果形の器形となっている。外面は丁寧なナデ調整。内面には指押さえ痕。

11、12は底部。11は壺の底部。内外面に調整痕が残る。12は甕底部でこのままの形状で出土し、他の破片と接合はできなかった。



Fig. 115 SU13出土遺物

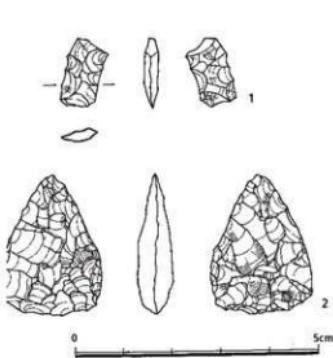


Fig. 116 SU13出土遺物図 (縮尺1/1)

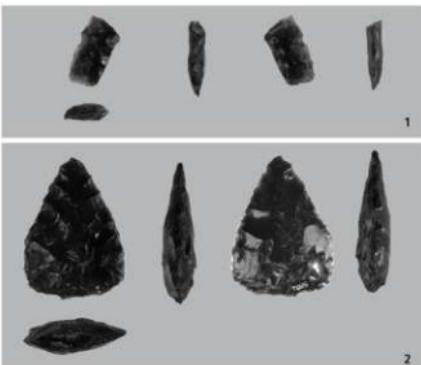


Fig. 117 SU13出土遺物

石 器 黒曜石破片が53g出土しているが、うち加工されているのは図示した2点のみである。1は黒曜石石鎚の脚部。残存部からすると凹型式で抉りは割りに深い。端部は直線的である。2は不純物の入らない良質の黒曜石を用いた尖頭状石器。完形品で長さ3.87cm、幅2.08cm、厚さ0.7cm、重さ3.5g。まず5角形に成形し、側辺を細かく剥離して完成させている。SU02からも安山岩製尖頭状石器が出土している。どちらも縄文早期と考えられることからSU13の埋没時に先の縄文土器らと一緒に混入したのだろう。

SU14貯蔵穴

D-2グリッド、SC05の床下より検出したもので、本遺跡の貯蔵穴ではもっとも特異な形状をしている。床下にあったことから少なくともSC09の壁高さである10cmは削平されており、また攪乱も想定すべきであろう。検出時の平面プランは、北側で構円形が重なったような段があるが、本来は隅丸方形状の落ち込みがあり、その中央に同じような隅丸方形状の入り口となっている。深さ97cmで底面となる。断面は三角フラスコ状である。底面から20cm程の高さまではほぼ直な壁であるが、そこから極端に傾斜して狭まり、さらに直に立ち上がっている。西側は庇状となっているが、これは後の攪乱であろう。この入り口部の大きさは南北が長さ108cm、東西が長さ80cmである。そして蓋を被せるための掘り込みが現在は10cmの高さで残っており、大きさは南北132cm、東西135cmである。深さは70cm。

竪穴住居跡の残り具合から50cm以上の削平を予想したが、SU14のような形状からすると、それほどの削平であったとは考えにくいのではなかろうか。

出土遺物 図、写真のように埋土上部で大きめの破片が集中して出土した。底面からの出土はなく、土器の出土状況は内部がある程度埋まってから投げ込まれたような様子を示している。このうち甕1個体が接合完形となった。土器の出土総量はコンテナ4箱、総重量は18.3kgを測る。

SU14

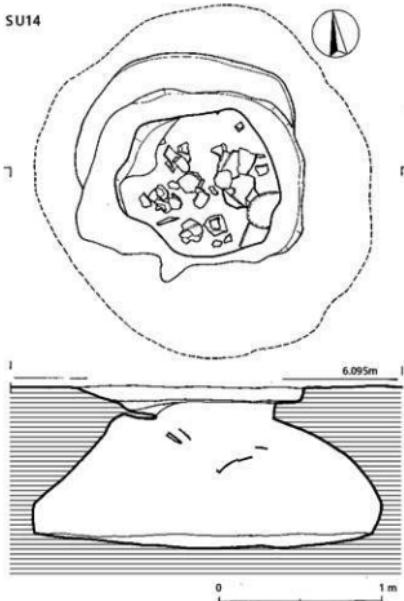


Fig.118 SU14貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig.119 SU14貯蔵穴(西より)

1、2は壺。写真縮尺は1/3、胴部最大径部より下方を欠いている。器壁で粘土接合がよく見て取れる。口径12.0cm、球形の胴部からわずかに段をなして内傾する頸部がつく。境には浅い沈線を2条巡らしている。直線的にのびていた頸部は、上半でやや立ち上がり、肥厚した口縁部が直線的に外反内面にはタテ方向の指押さえ痕がある。外面は丁寧なナデ調整。2は朝顔状に大きく開く金海式甕棺の口縁部。その上部に粘土帯を貼り付けあり、その外端部の上下端に細かな刻み目を入れている。甕棺の口径は不明。3～9は甕、いずれも如意形の口縁部を持っている。3の口縁部は胴部上端に粘土紐を貼り付け三角形断面の口縁部となっている。口縁部直下にかすかにタテハケ目が残っている。

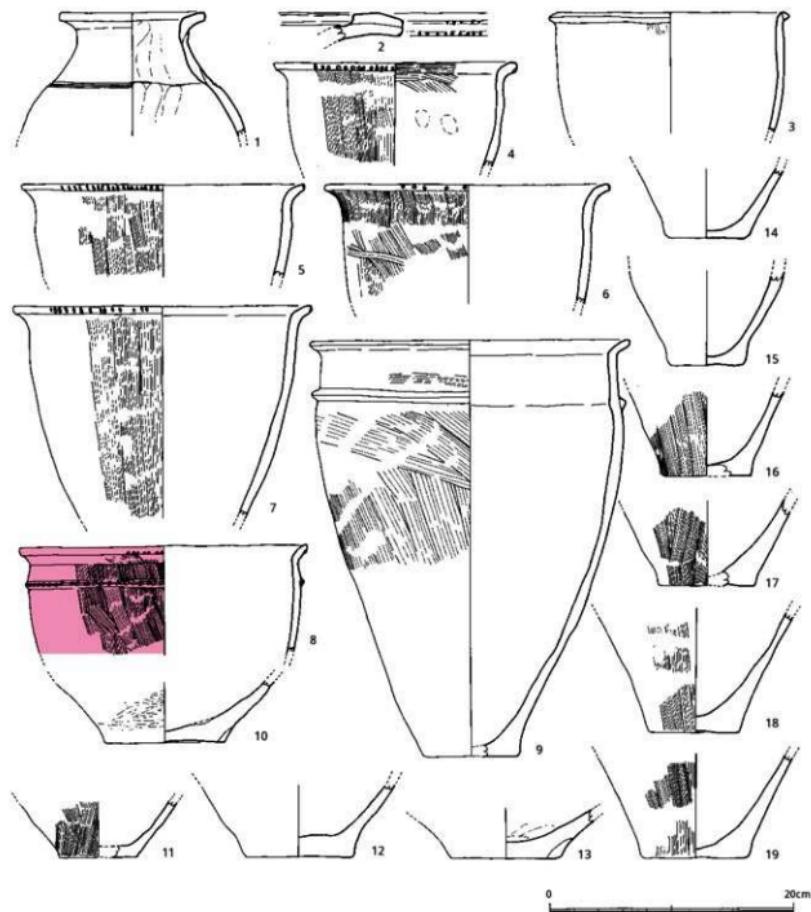


Fig.120 SU14出土遺物図（縮尺1/4）

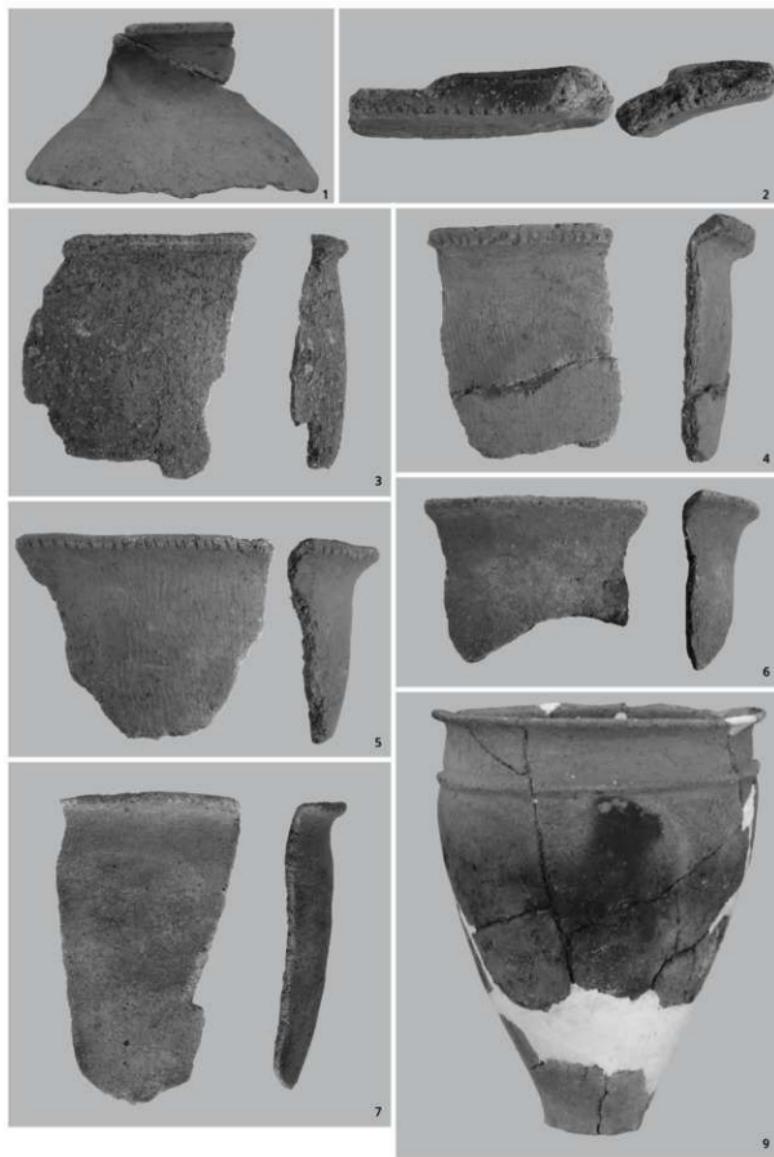
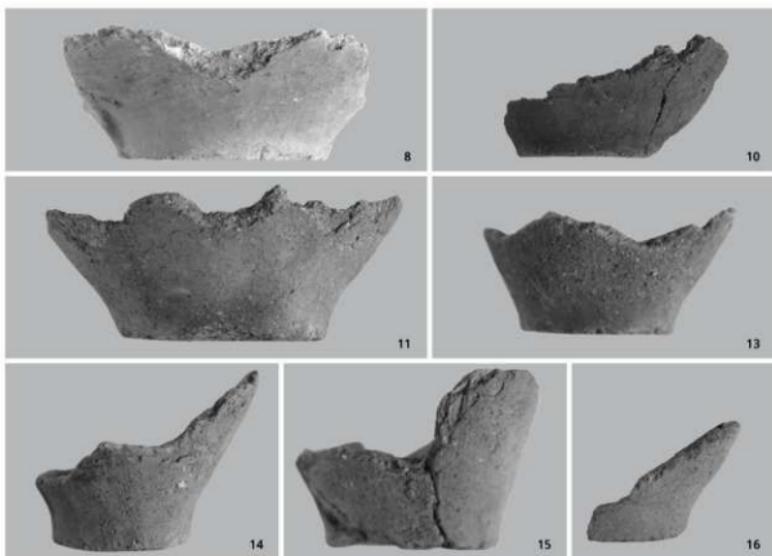


Fig.121 SU14出土遺物



4は口径20.0cm、5～6は口径23.2～24.6cmとほとんど変わらない。また口縁部の如意形もよく類似している。しかし刻み目の付け方はそれぞれ異なり、6は刻み目ではなく細い棒状工具を突き刺したように見える。内面はナデ調整で熱を受けている。7の刻み目の間隔は不均一で規則性がない。8も口径23.6cmであるが、口縁部下方に断面三角形凸帯を1条貼り付け、ここにも刻み目を入れている。外面は左斜行のハケ目調整。9は胴部下方の破片が少し足りないが接合して完形となった。口径26.0cm、器高34.2cm。細身で背の高い器形となっている。胴上部に断面三角形凸帯を1条貼り付けており、ここから直線的に内傾して口縁部が屈曲している。

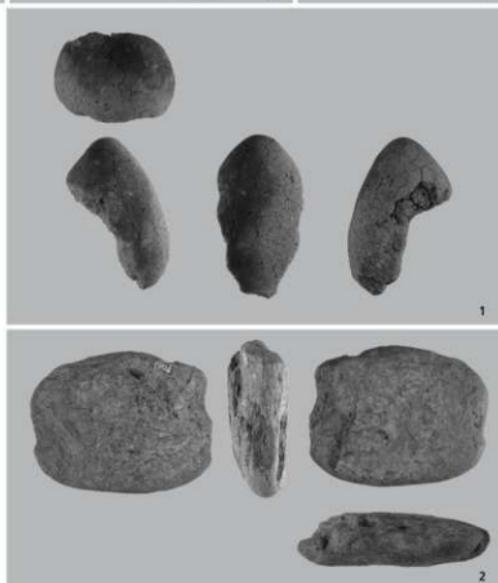


Fig.122 SU14出土遺物

11~19は底部。10~13は壺の平底。
 10は底径9.8cm、底部外縁に粘土を貼り付けている。胴部外面はミガキを加えている。11は分厚い作りで、底径は6.4cm。外面はタテハケ目調整。12は底部からいったん反り気味にのび、次に丸く湾曲する胴部となっている。
 13も10と同じように底部外縁に粘土を貼り付けている。

14~19は壺の底部。それぞれ底径、器面の調整、胴部への立ち上がりなど微妙に異なっている。
 16は底径7.7cm、胴部器壁の厚さが均一でない。外面はハケ目調整。19は底径9.0cmと最も大きい。底部から胴部へは膨らみがなく直線的にのびているのが特徴である。

土製品 1は土製投弾で、約半分を欠いている。砂粒の少ない胎土で焼成は良好。頭頂部は丸く尖っている。器面はタテに成形時の痕跡が見られる。

石 器 2は、長方形に近い橢円形自然石の両短辺側を打ち欠いて石錘を作っている。打ち欠きは両面からで、この他に特別な加工はない。図の下方が摩滅している。石材は結晶片岩。この他に黒曜石剥片が201g出土している。

SU15貯蔵穴

G-1グリッド、SC04の床下で検出した。先述したようにSC03、04周辺部は、いくつかの遺構が重なっていると思われたが遺構埋土の土色変化を区別することが困難で、結果的にやや詰めを欠いてしまった。SU15も平面図で分かるようにSC05の東壁より東側での検出作業を怠っている。SC05と同時並行でSU15の遺構実測を済ましたことが一因でもある。

SU15の入り口部は108cm×80cmの隅丸長方形であるが、これを囲んで深さ10cmの掘り込みがある。この掘り込みは、本来は東側にもう少し広がっていたと思われる。断面はフラスコ形のように壁が底面に向かって八字形に広がるのではなく、壁は底面からわずかに膨らみながら直に立っており、高さ約60cmで急に狭まり、銛状の入り口部を作っている。底面はほぼ平坦で、東側に異様に広がっている。

断面図としては東西方向も実測すべきであつた。

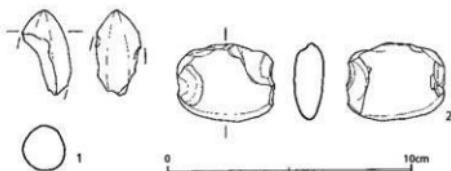


Fig.123 SU14出土遺物図 (縮尺1/2)

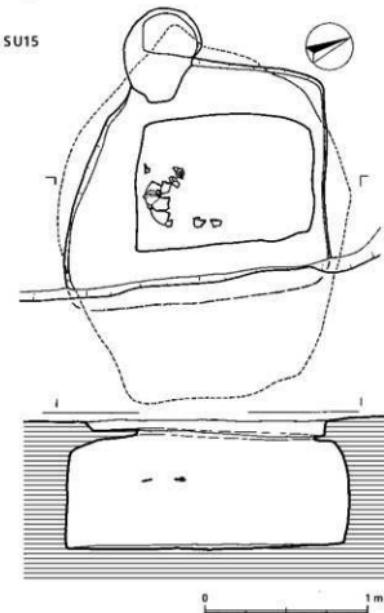


Fig.124 SU15貯蔵穴図 (縮尺1/30)

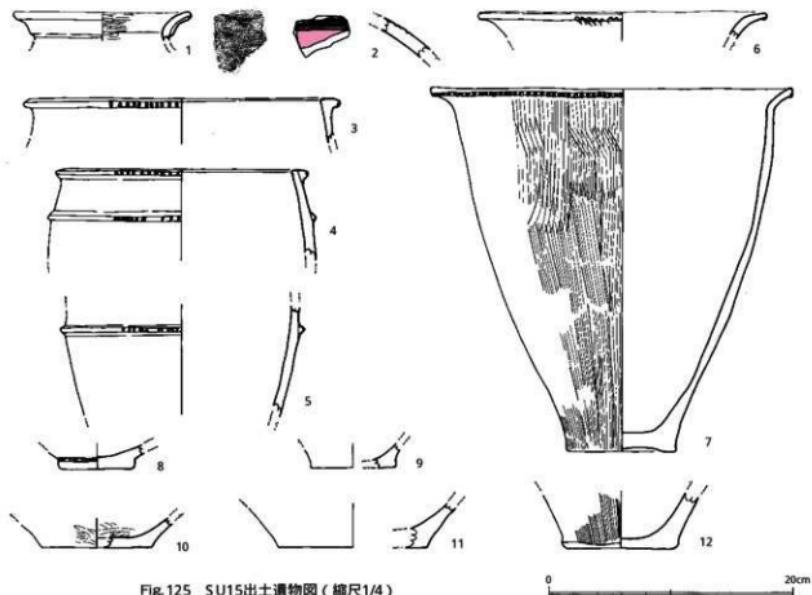


Fig.125 SU15出土遺物図 (縮尺1/4)

出土遺物 遺物は少なくコンテナ2箱4.1kgだけだが、甕1個を完形に接合復元できた。黒曜石剥片は131g。

土 器 12点の弥生土器を図示した。弥生前期が大半を占める。1、2は壺。1は口径14.6cm、口縁部の外側に粘土を貼り付け厚みを増し、緩やかに外反している。頸部との境に明瞭な段を設けている。外面はナデ、内面はヨコミガキ調整。2は胴肩部の破片で、ヘラ状工具で3本の平行沈線を入れている。内外面ともナデ調整。

3～7は甕。3は口径26.0cm、口縁部は如意形ではなく突帯文土器のように断面三角形をしている。その端部には刻み目を不規則に加えている。胴上半部は内傾しており、胴部上方に張りがあるのであろう。4も同じように断面三角形の口縁部で刻み目もつけている。また胴部上方にも小さな断面三角形凸帯を1条貼り付け、粗密のある刻み目を加えている。この凸帯を境にして器壁が上方と下方で厚さが異なる。5は胴部中位から下方の破片。断面三角形凸帯の貼り付け部は屈曲することなく緩やかに湾曲しており、4のように器壁の厚さに変化は見られない。7は如意形口縁を持つ甕で、口径26.6cm、器高29.8cm、底径9.0cm。やや上げ底状の底部から胴部がのび、中位より直に近くなり、口縁部は長めの如意形でおさまっている。刻み目は口縁端部下方に密に入れている。器面の調整は外面が上から下までタテハケ目、内面はナデ。胎土には1～2mmの大いな砂粒を含み、色調は内外面とも橙がかつた茶色。

8～12は底部。8は底径6.2cm、円盤状で底面は平坦。内外面ともナデ調整は丁寧。胴部へは開き気味に湾曲している。10は底径9.2cmとやや大きく、胴部へは反り気味にのびている。12は甕の底部で、口径は9.6cm。底面は平坦であるが、外縁部にやや張り出している。外面はタテハケ目調整。

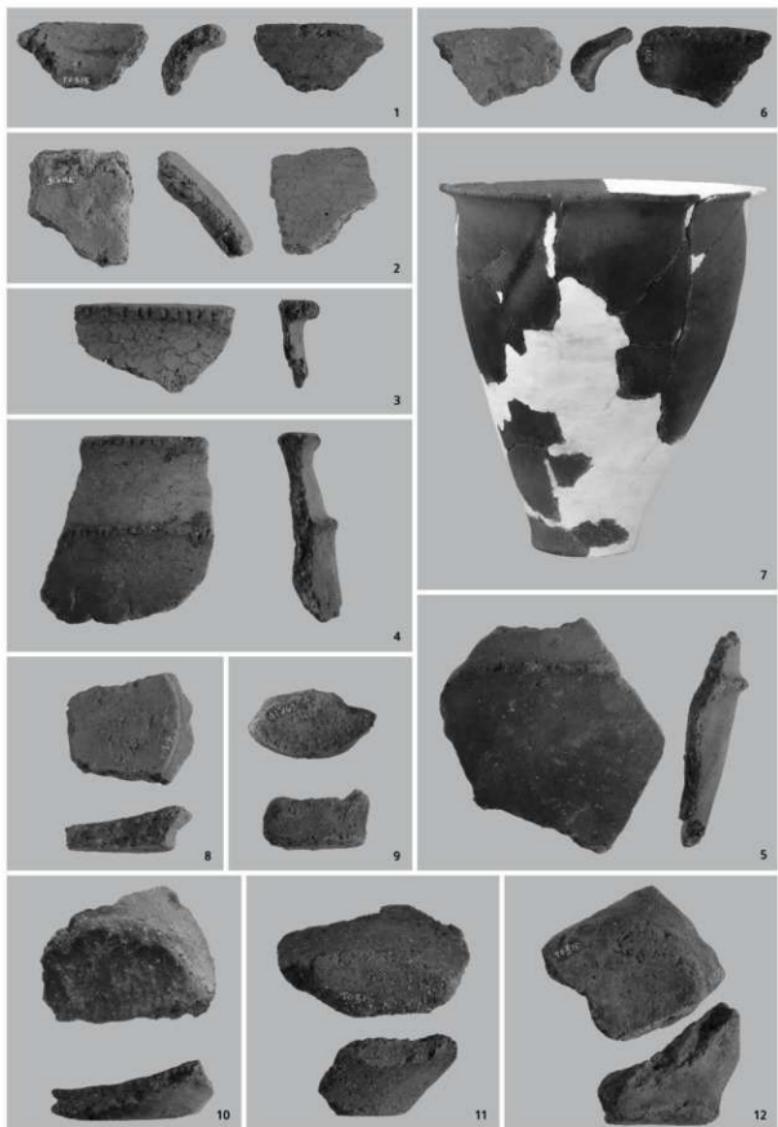


Fig.126 SU15出土遺物

SU17貯蔵穴

調査区の最もL-4グリッドで検出したもので、調査区の最西端に当たる。SU10、11は1~2mに接近している。平面形は東西方向の長楕円形で、長軸は115cmを測る。短軸は道路で削平されているので不明、現在は長さ60cmである。推定長は70cm。北壁は直に掘り込まれ、底部近くでわずかに外に丸く張り出している。ところが底面はさらに東西方向に大きく広がっており、確認できた東側では底面が約70cmも広がり、その断面はフ拉斯コ状となっている。この断面も実測すべきであったが道路落盤の懼れもあることから安全優先で断念した。深さ80cm。

出土遺物 弥生土器破片の他に遺構図のように3個の甕が出土した。うち1個のみが接合復元できた。コンテナ1箱4.3kg、黒曜石剥片30gが遺物総量である。

土 器 1~3は如意形口縁部を持つ弥生前期の甕。1は口径13.0cmと小さな甕で、口縁部の湾曲も小さく短い。2の胴部は直線的に大きく開いている。完形となった3は、口径23.0cm、器高25.0cm、底径8.2cm。内外面の調整はハケ目ではなくナデ調整。口縁部の器壁は胴部に比べ厚みがなく、内面に鈍い稜を持つように明瞭に屈曲している。

4、5は鉢。4の胴部は19.0cmの口径と同じような大きさで丸みがある。外面は細かなミガキ。5の胴部は張りがない分、深みのある器形となっている。内面にも丁寧なミガキを加えている。

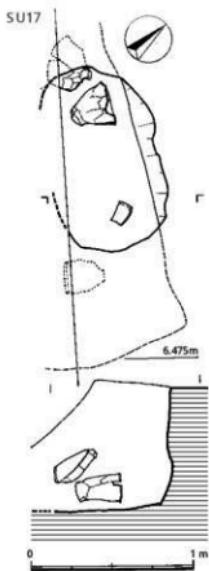


Fig. 127 SU17貯蔵穴図
(縦尺1/30)



Fig. 128 SU17貯蔵穴 (南東より)

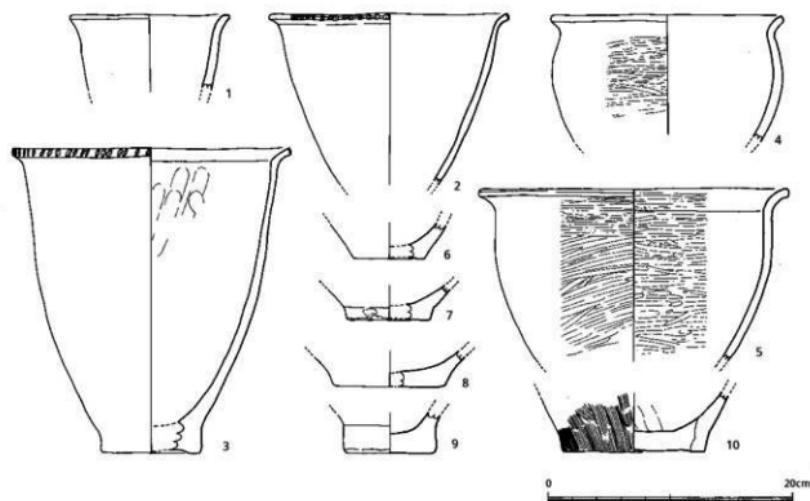


Fig.129 SU17出土遺物図 (縮尺1/4)

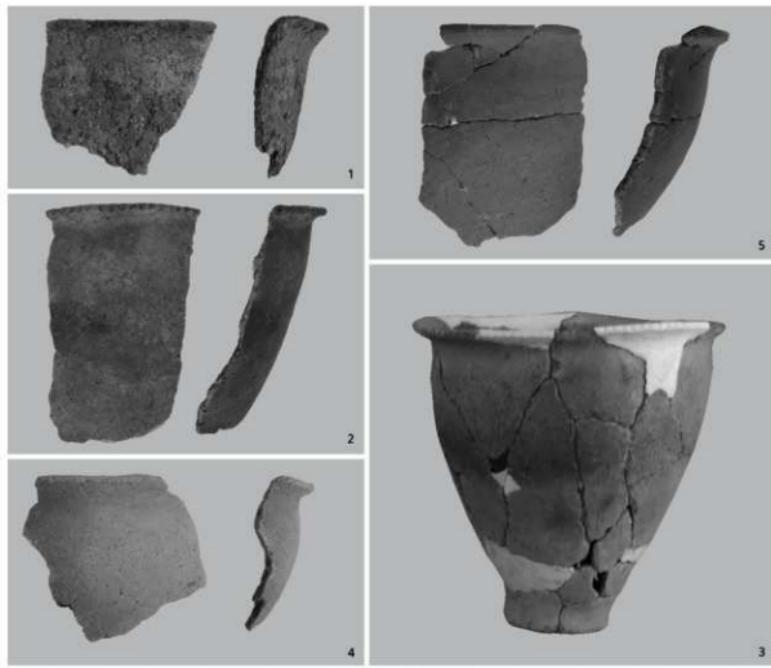


Fig.130 SU17出土遺物

SU18貯蔵穴

SC02の床面下にあり南壁に接している。平面プランは160cm×166cmの円形で、わずかに東西方向に長い。深さはSC02で削平されたこともあって50cmしか残っていない。周壁は直に近く掘り込んでおり部分的に外に広がっている。底面はほぼ平坦。

出土遺物 通構の残りが悪いこともあって出土遺物は土器片16点207gと黒曜石剥片6点8gのみである。このうち図示できたのは土器2点である。

土器1、2は弥生前期の壺。1は胴部から頸部にかけての破片で、灰褐色を呈する。球形の胴部と頸部との境にはヘラ状工具で4本の平行沈線を入れている。この下方の胴部上半には二枚貝の貝殻を押さえて連弧文を連ねている。外面はミガキとナデ調整。2は口径23.0cm、口縁部外側には粘土貼り付けで厚みを増し、頸部とは明瞭な段がついている。胎土はわずかに砂粒を含んでいるが密である。外面には丹塗りを施している。内面はナデ調整。

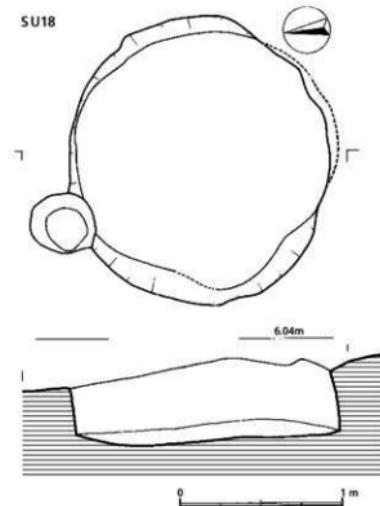


Fig.131 SU18貯蔵穴図(縮尺1/30)

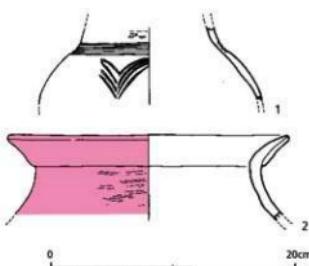


Fig.132 SU18出土遺物図(縮尺1/4)

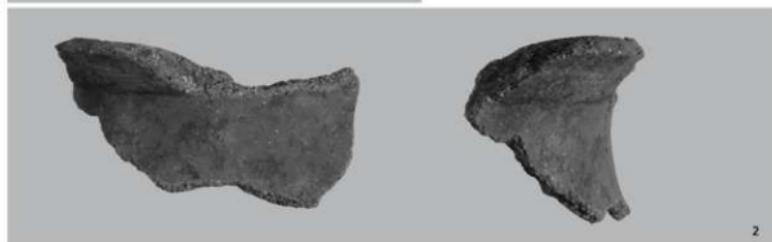


Fig.133 SU18出土遺物

SU19貯蔵穴

D-2グリッド、SC09の床下で検出した。調査区の最北西端部に位置し、舌状丘陵縁には約1.5mと接近している。南東3mにあるSU18と同じように平面プランは円形であるが、長軸147cm、短軸145cmと一回り小さい。断面形のよく類似し、基本的には直に近く掘り込んでいるが部分的には底面に向かって斜めに掘り込んでいる。底面も平坦ではなくやや凹凸がある。深さは53cm。SC09の床面の深さは10cmなので、元の深さは63cm以上はあったことになる。

出土遺物 上部が削平されていることもあって遺物の出土量はコンテナ1箱2.8kgと少ない。図化できたのは土器7点と石器3点のみである。

土器 6点の土器は弥生前期、うち1点は縄文土器の可能性がある。1~3は壺の肩部破片。1は胴部から頸部への移行部の近くで、その境にヘラ状工具で3本の沈線を巡らせており、胎土には小砂粒を含んでおり精良土ではない。内外面とも黒色を呈する。内面は摩滅して調整痕不明だが、外面はミガキ調整を施している。2も同じような部位の破片。灰褐色の色調でやや大きめの砂粒を含む胎土を用いている。文様は3本のヘラ描き沈線で、一周しないで途切れている。3は頸部への移行部に1状の沈線を巡らし、その下方に同じようにヘラ状工具で4本の沈線を入れている。おそらく三角文を連続しているのであろう。

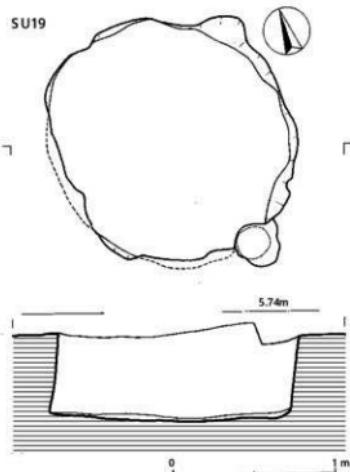


Fig.134 SU19貯蔵穴図(縮尺1/30)



Fig.135 SU19貯蔵穴(南より)

4は口径25.0cm、口縁部は緩く外湾し、胴部もわずかに膨らんでいることからS字状の器形となっている。外面がやや摩滅しているが繩文土器の粗製鉢と判断した。胎土に1~2mm大の砂粒を含んでいる。

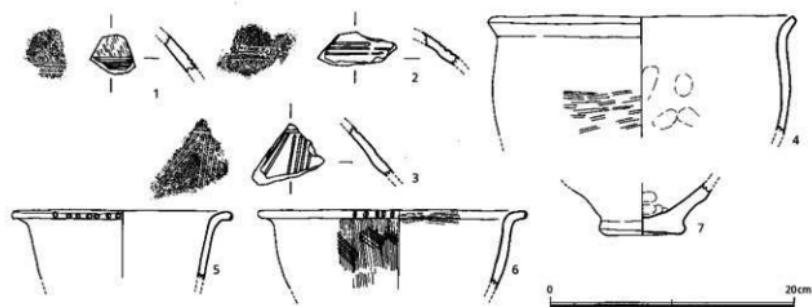


Fig.136 SU19出土遺物図 (縮尺1/4)

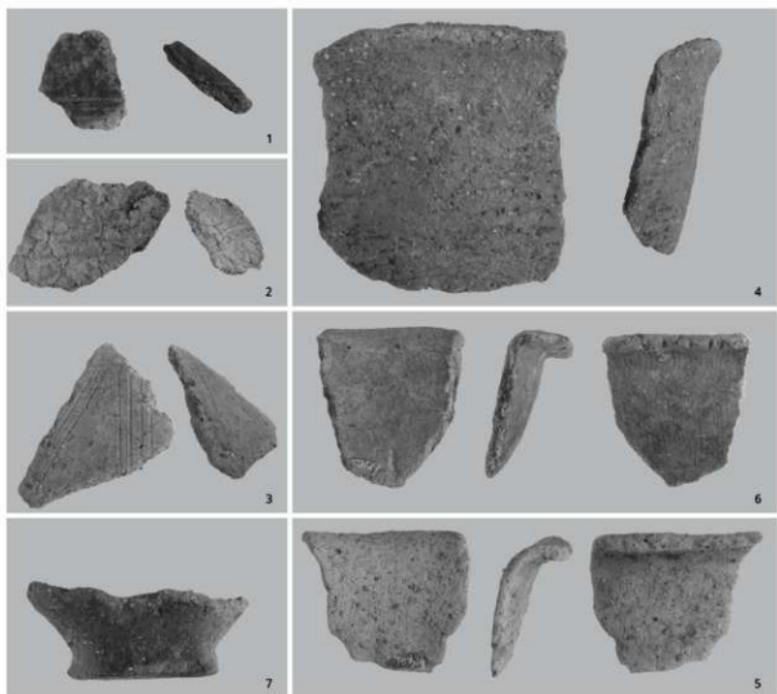


Fig.137 SU19出土遺物

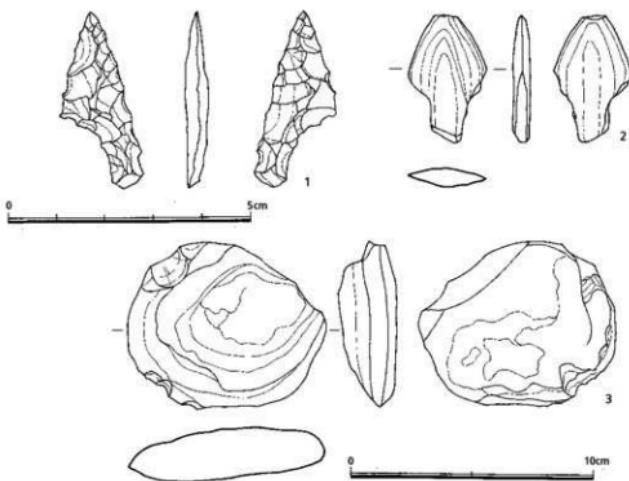


Fig.138 SU19出土遺物図（縮尺1/1、1/2）

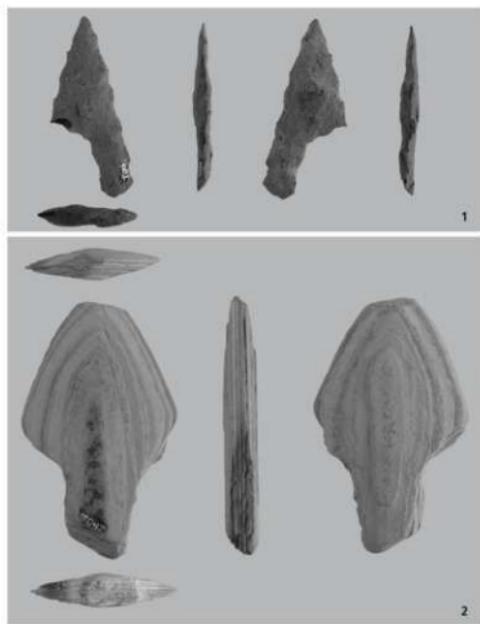


Fig.139 SU19出土遺物

5、6は如意形口縁部を持つ弥生前期の甕。5は口径18.0cm、緩く外湾する口縁部は胴部に比べやや厚みがある。6は口径21.0cm、口縁部の刻み目は間隔をあいて入れている。器面の調整は胴部外面がタテハケ目、口縁部内面はヨコハケ目。胴部はわずかに膨らみがある。厚みの器壁も特徴の一つ。

7は底径7.0cmで平底。外縁部がやや丸く張り出してあり、円盤状となっている。内面には指押さえ痕が残る。

石器 図示した以外に黒曜石剥片が43g出土している。

1は安山岩製の石鎚。全体に風化が進んでいる。片方の脚を欠損しているが、鉗形二等辺の形状がよく残っている。長さ3.55cm、厚さ0.40cm。大きな剥離を行っており、右図の右側辺部には二重バテ

イナが認められる。基部の抉りはV字形で、脚端部は丸みを持たせている。

2は磨製石剣。石材は層灰岩か。全体に風化剥落が著しく研磨痕などは残っていない。現在長は5.2cm、最大幅3.15cm、厚さ0.7cm、重さ11.95g。元は石剣であったものを折れた部分を茎状に再加工している。槍や鎌のように用いたのだろう。調査区東南部で石剣切っ先が出土している。

3は玄武岩製の石器と思われるが、全体に風化、摩耗が激しく、その用途不明。

SU20貯蔵穴

F-2グリッド、SC03の床下で検出した。SC03の中央土壌と思われるやや大きめのピットと重なっている。平面プランは不整楕円形で、東辺と北辺は直線的で、西、南辺は曲線的にカーブしている。南北軸の長さは176cm。壁は直に84cm掘り込んでいる。底面はほぼ平坦。調査工程が迫りプレハブ事務所を実測前に移動することになり、その床下で実測をするという状況であった。時期を判断するような遺物は出土していないが、平面プランや深さなどから弥生時代の貯蔵穴とした。

3. 竪穴

発掘時は貯蔵穴としていたが、無遺物が弥生時代以降の遺物が出土のものを竪穴として区別した。
SK06竪穴

I-6、5グリッドで検出。SC07の西側2mにあり、舌状丘陵の長軸線上に当たる。平面形は楕円形で、北東辺は直線的である。その北東辺の長さは125cm、長軸長は200cm。底面は中央部に向かって



Fig.141 SK06竪穴（北東より）

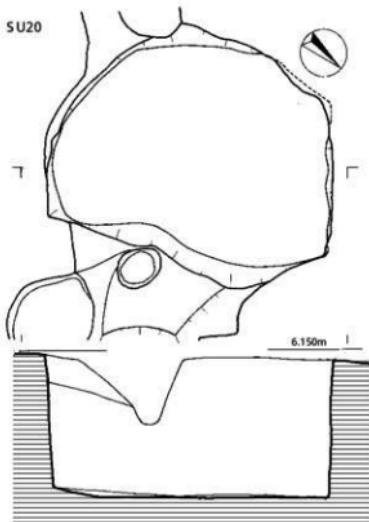


Fig.140 SU20貯蔵穴図（縮尺1/30）

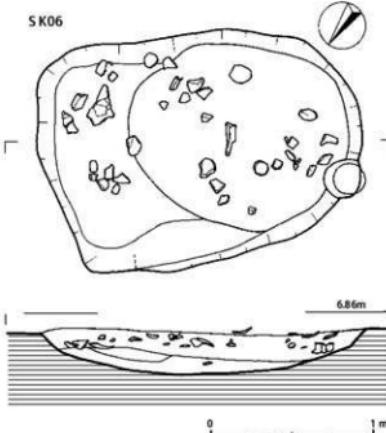


Fig.142 SK06竪穴図（縮尺1/30）

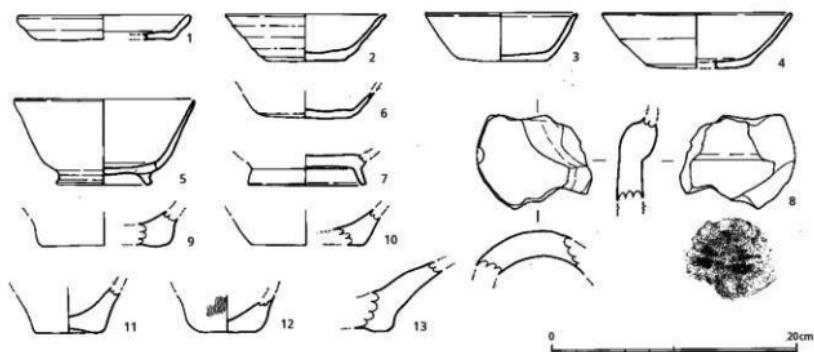


Fig. 143 SK06出土遺物図 (縮尺1/4)

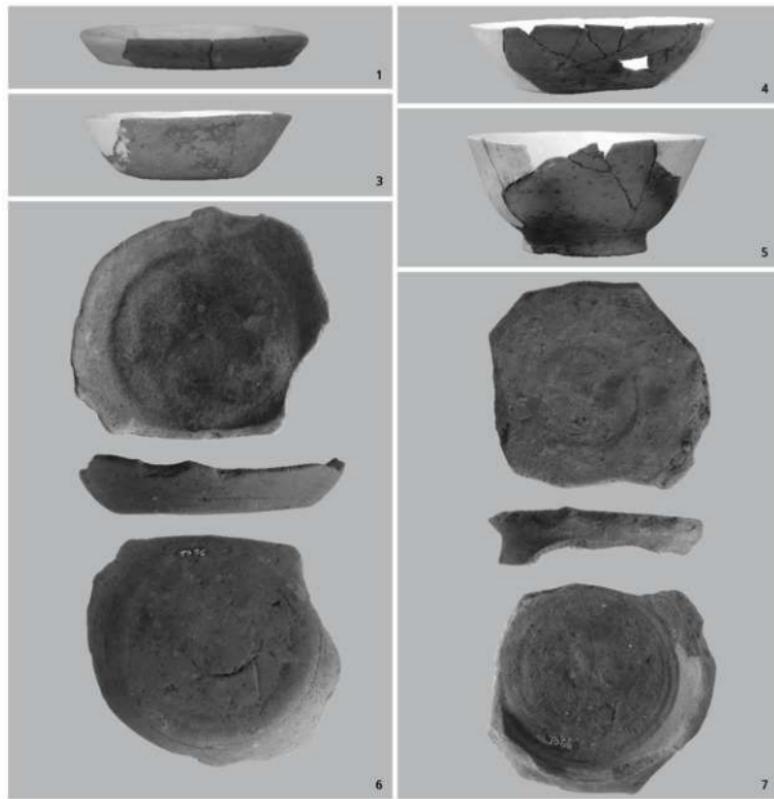


Fig. 144 SK06出土遺物

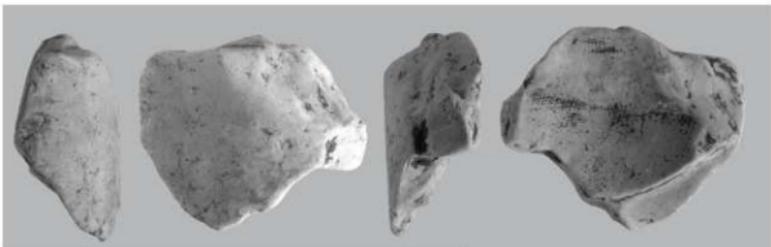


Fig.145 SK06出土遺物

て緩やかに深みを増している。中央部の深さは25cmを測る。

出土遺物 埋土は他の遺構と同じように黒みを帯びた茶褐色土で、遺物は底面直上はないが上下、全面で出土した。遺物には弥生・古墳時代の土器も含まれるが、古代の遺物を主として図化した。

土 器 1は土師器皿、口径14.2cm、器高2.0cm、底部はへラ切りで平底になっている。

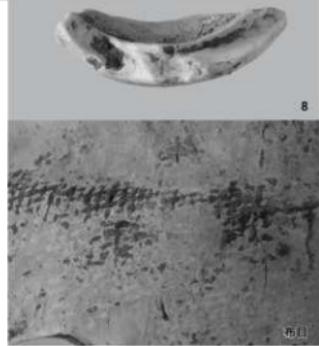
2～7は杯。2は口径13.2cm。へラ切りの底部から直線的に立ち上がり、器面はやや凹凸がある。3は口径12.5cm、口縁部は薄くおさめている。4の口径は15.4cmと大きめで、胴部の開きも大きい。5は底径7.8cm。へラ切りの底部は丸みがある。6、7は高台付き椀。6の高台は断面方形で底部外縁よりやや中央寄りにつき八字形に開いている。接合部は強くヨコナデして明瞭な棱はなく緩やかに胴部へ移行している。7の高台は径9.6cm、背が高く胴部への移行部近くに貼り付けている。

8～12は底部。底部外面に丸みがあり、どれも摩滅が激しい。

瓦 13は丸瓦。1mm大の小砂粒を含む胎土で灰色を呈する。軟質焼成のせいもあって全体に摩耗激しいが、内面に布目痕が残っている。



Fig.146 SK07竪穴（北より）



8

布目

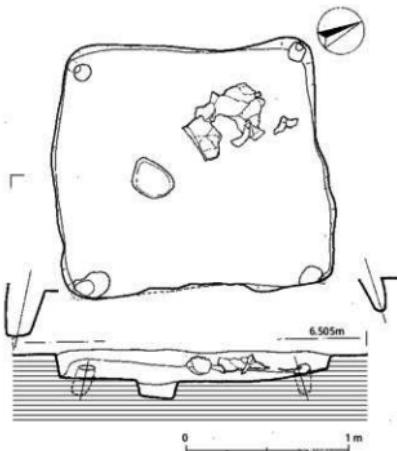


Fig.147 SK07竪穴図（縮尺1/30）

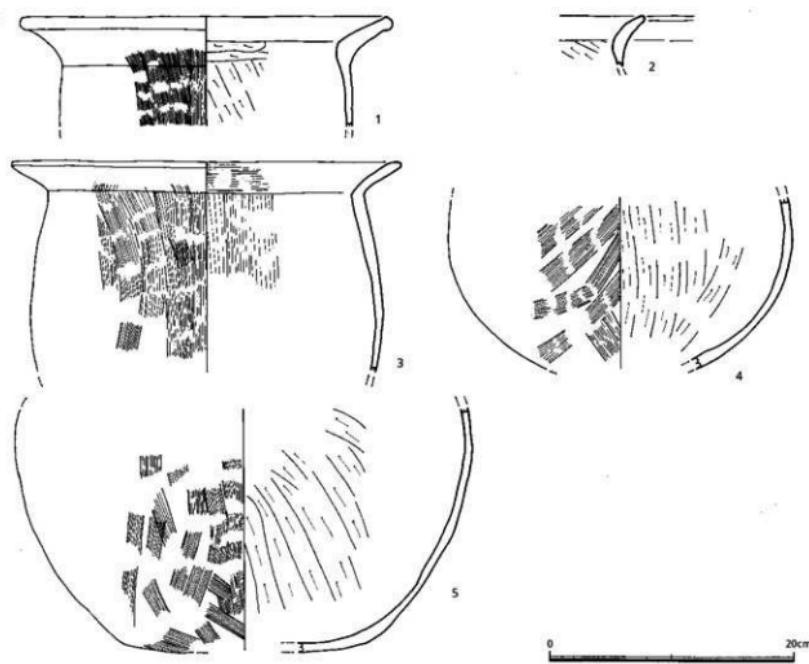


Fig.148 SK07出土遺物図（縮尺1/4）

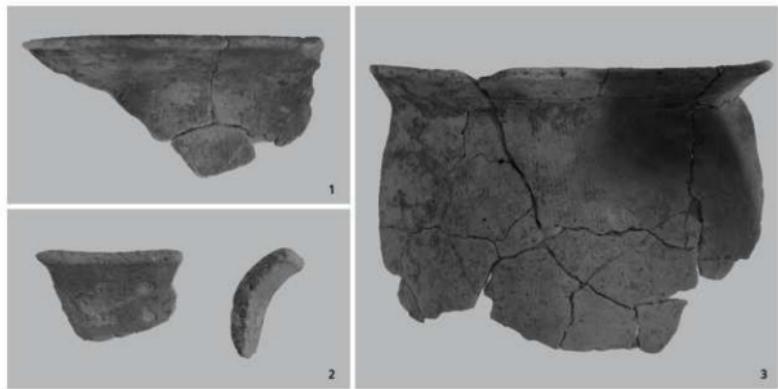


Fig.149 SK07出土遺物



Fig.150 SK07出土遺物



Fig.151 SK07出土遺物

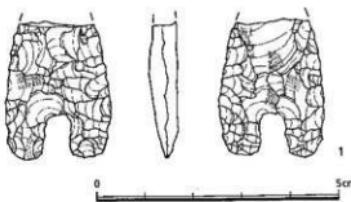


Fig.152 SK07出土遺物図 (縮尺1/1)

SK07竪穴

I、J-7 グリッドにあり他の貯蔵穴、竪穴とはやや離れた場所に位置している。長軸168cm、短軸142cmの隅丸長方形プランで四隅は丸みがある。四壁の高さは約10cm。ほぼ平坦な底面の中央よりやや南に片寄って小ピットがあり、また各コーナーには内側に傾斜した小ピットがある。おそらく中央のピットを主柱にして四角錐状の屋根をかけたのであろう。底面全体に1cm程薄く炭の層が広がっていた。

出土遺物 中央より北コーナーに寄って土器がまとまって出土した。埋土からの出土遺物の総量はきわめて少ないが縄文時代の石鎌も含まれている。コンテナ 1 箱3.0kg。

土 器 1～5は土師器の梗。1は口径30.6cm、く字形の口縁部は胴部の器壁に比べ分厚い作りである。口縁端部は丸くおさめている。胴部器面の調整は外面がタテハケ目とナデ、内面はケズリの後にナデを加えている。2は同じように緩く外反する口縁部で、屈曲する内面には鈍い稜が入る。3は口径32.0cm、く字形に外反する口縁部は長くのびる。胴部の張りは弱く、長めの胴部に丸底がつくのであろう。4、5は胴、底部。同じように内面は粗雑なケズリ。5の底部は胴部との境がなくそのまま連続しているが、不安定なやや平たい底部がついている。

石 器 1は良質の黒曜石を用いた石鎌。U字形の基部は抉りが深い。幅は2.10cm、厚さ0.53cm。

SK08竪穴

調査区の南西端のK、L-3、4グリッドで市道に面して3基の貯蔵穴と3基の竪穴が写真のように密集している。SK08はその東端に位置し、隅丸長方形の竪穴。長軸138cm、短軸93cm、深さは中央部で79cm。北側の長辺が小ピットと切り合っている。

SK09竪穴

ほぼ同じような大きさで、長軸136cm、短軸93cm、深さは中央部で55cm。各辺が丸みを帯びている。

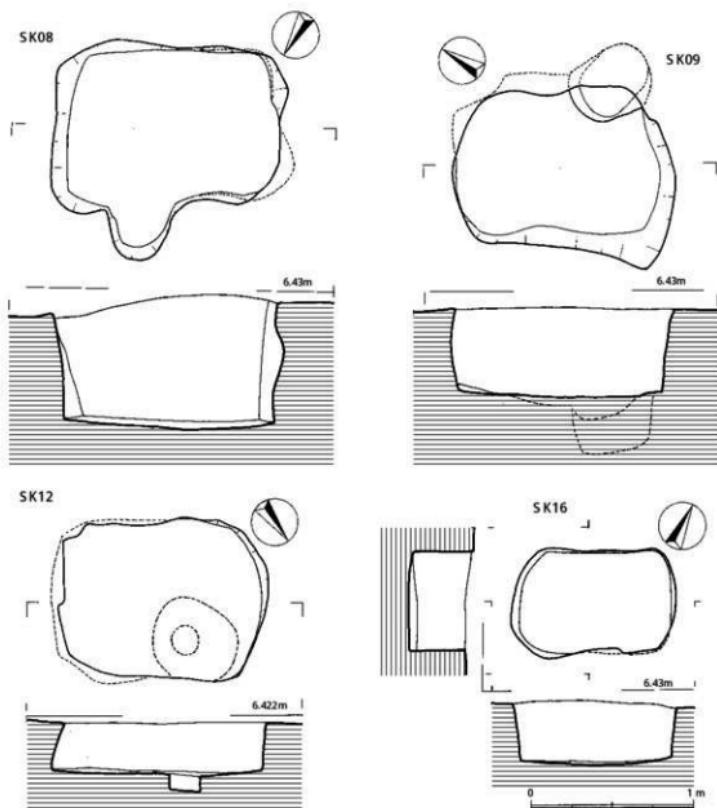


Fig.153 SK08、09、12、16竪穴図 (縮尺1/30)

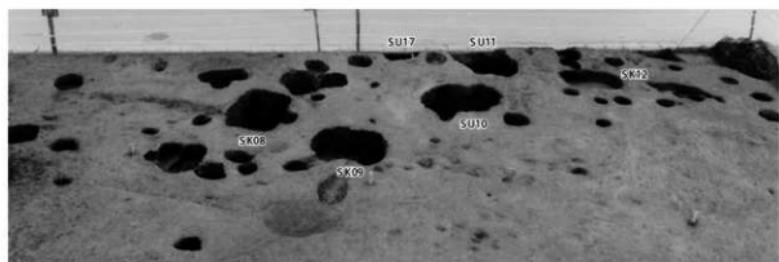


Fig.154 調査区北西隅の貯蔵穴と竪穴

東長辺側の底面には外側に斜めに掘り込まれたピットがある。底面からの深さは35cmを測る。

SK12竪穴

このグループでは西端に位置する。SK09よりさらに短辺が外に丸く膨らんでいる。長軸124cm、短軸94cm、深さは中央部で30cm、北側辺に片寄って底面に小さなピットがあるが埋土中に掘り込まれたピットである。東辺の壁は底面に向かってわずかに外に開いている。

SK16竪穴

調査区のほぼ中央のF-4グリッドに位置し、その周辺には遺構やピットなどがない。やや小型の竪穴で、長軸100cm、短軸61cm、中央部の深さで39cmを測る。以上4基とも時期判断できる遺物の出土はなかった。

4. 掘立柱建物跡

これまで竪穴住居跡、貯蔵穴、竪穴について記してきたが、調査区で最も多いのは小ピットである。遺構全体図では1間×1間を基本とする配置を数多く結ぶことができる。本調査区が50cm前後の削平を受けていると推定すると、すでに床面までカットされた竪穴住居跡の柱穴であった可能性もある。特に集中しているSC02の南東側を中心にして掘立柱建物跡の検討を重ねた。ここでは先述したように発掘現場で柱穴の配置、柱間長や深さなどで確実性の高い14棟のみを取り上げた。

SB01掘立柱建物跡

I-3グリッドでSB02と重なっている。桁行1間2.84m、梁行2間4.04m、面積11.47m²の建物。梁行方向はN-63°-E。梁行、桁行とも相対する各柱間の長さはま

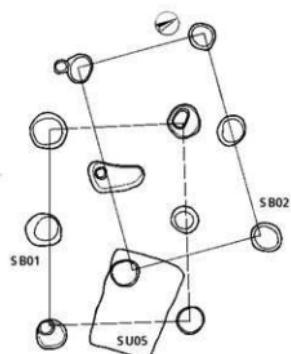


Fig. 155 掘立柱建物跡配置図

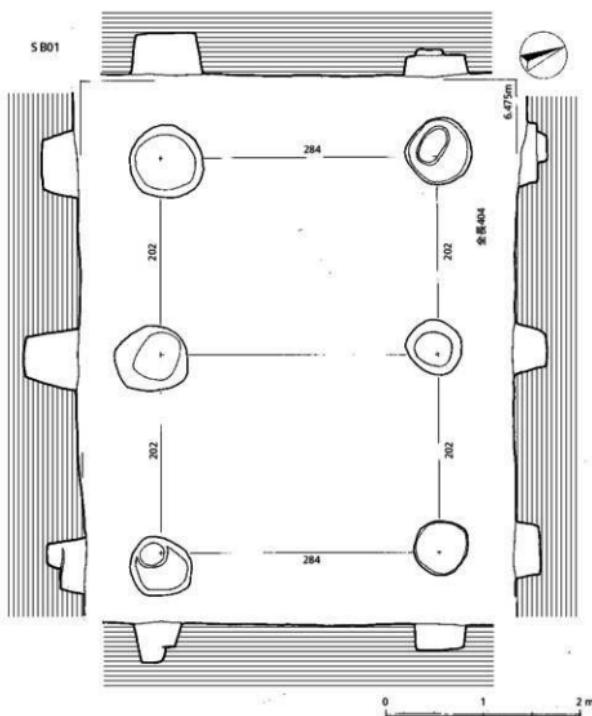


Fig. 156 SB01掘立柱建物跡図(縮尺1/50)

まったく一致している。6個の柱穴の深さは28~54cmと差が大きい。

SB02 挖立柱建物跡

SB01の北西側にあり、同じよう
に1間×2間の東西棟の建物。桁
行2.70m、梁行4.32m、面積11.66
 m^2 ある。4棟の掘立柱建物跡とも
時期判断ができるような遺物はない
が、SB02の南東隅の柱穴がSU05
の埋土に掘り込まれていることか
らその先後関係を知ることが出来
る。各柱穴の深さは14cmから49cm
と統一性がない。

SB03 挖立柱建物跡

H-2グリッド周辺もピットが集
中しており、SB03はその中で1
間×2間の南北棟の建物として結
ぶことができた。桁行2.84m、梁
行4.50m、面積12.78 m^2 。側柱の方
向はN-82°-E。各柱穴の深さは
20cmから64cmと差が大きい。

SB04 挖立柱建物跡

H、I-7グリッドにある南北棟
の建物。桁行1.80m、梁行3.64m、
面積6.55 m^2 。桁、梁とも柱間が2
cmしか違わない。北隅の柱穴は
SC07の排水溝と切り合っているが
先後関係は掴めなかった。

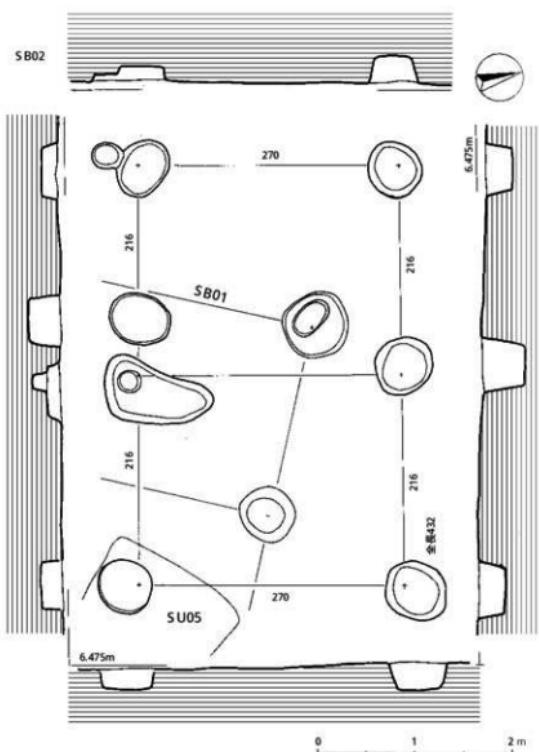


Fig.157 SB02 挖立柱建物跡図 (縮尺1/50)



Fig.158 遺構実測風景

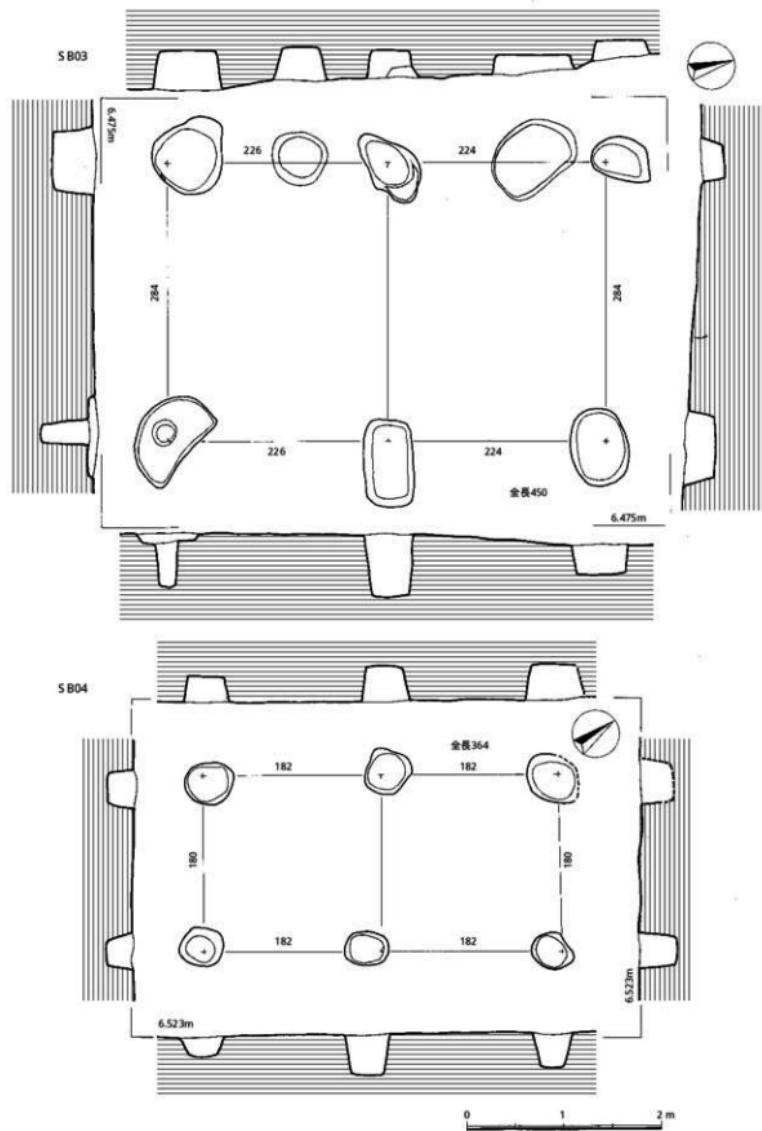


Fig.159 SB03、04掘立柱建物跡図(縮尺1/50)

第4節 福岡市内の押型文土器について

菅 波 正 人(福岡市教育委員会)

貯蔵穴15出土土器 (fig.160-161)

1は押型文土器で、小片で磨滅しているが、端部付近と判断される。内外面に3mm程度の細かい横円文を施す。文様は横走施文である。内面の文様をみると、施文具の端部の刻みが山形になっていることが分かる。色調は淡黄褐色を呈する。胎土には1~2mm程度の石英、長石を含む。器壁の厚さは8~9mm程度である。文様の特徴から稻荷山式に相当するものと考えられる。

福岡市域の縄文時代早期の遺跡 (fig.162)

近年、福岡市域においては草創期から早期前半にかけての資料の増加とともに、それに続く、押型文土器期の資料も徐々に増加してきた。当該期の遺跡は本田浩一郎氏の集成によると、70余りという。この中には調査により遺構、遺物が確認されているもの以外に、石塚、石槍などの遺物が表採されたのみのものも含まれる。市域においてこれらの遺跡は主に福岡平野、早良平野の縁辺の丘陵部で発見されており、平野内の沖積地での例は少ない。遺跡の分布を西から見ていくと、①糸島半島の東から北東丘陵部、②西山・飯盛山・叶岳・長垂山塊から北東に派生する丘陵部及び扇状地、③早良平野の最奥部の扇状地、④油山から北に派生する丘陵部などがあげられる。調査例の偏りに もよるが、東部では石器などの出土例はあるものの、土器や遺構の検出例は少ない。それでは各地域の遺跡について簡単に触れていく。

①の地域では大原D遺跡、元岡・桑原遺跡群があげられる。大原D遺跡は柑子岳から派生する丘陵の北東端に立地する。草創期から早期の遺跡は標高約20~40mの埋没した段丘面を中心で発見された。第14、15地点では柏原遺跡同様の条痕文土器、刺突文土器などが出土し、竪穴住居跡、炉跡なども検出された。第16地点では稻荷山式、早水台式を始めとする押型文土器が出土し、炉跡なども検出された。草創期から早期にかけての様相が分かる数少ない遺跡の一つである。元岡・桑原遺跡は大原D遺跡群同様に埋没した段丘面に立地する遺跡で、草創期から早期にかけての様相を知る上で貴重な遺跡である。第3次調査では標高約13~18mの段丘面で、複数時期の包含層が確認された。そこからは草創期から早期前半の条痕文土器、刺突文土器、燃糸文土器が出土し、炉跡、炉穴などが検出された。それらの上層からは稻荷山式、早水台式、下菅生B式の押型文土器が出土し、炉跡も検出された。

②の地域では広石遺跡、羽根戸原遺跡、城田遺跡、浦江遺跡などがある。広石遺跡では叶岳から派生する標高約30~60mの丘陵状に立地する。C地点では横円文や山形文の押型文土器と共に、石塚が多数出土し、落とし穴遺構と考えられる不整形土坑が45基検出された。遺跡周辺では古墳の壇丘やその下層から当該期の遺物の出土例も多い。城田遺跡、浦江遺跡は西山から派生する標高約40mの扇状地に立地する。明確な遺構は検出されていないが、下菅生B式から田村式の押型文土器が出土している。それ以前の資料としては浦江遺跡5次で燃糸文土器単純期と考えられる土器と貯蔵穴が検出されている。城田遺跡でも浦江遺跡同様の燃糸文土器が出土しており、押型文土器期以前の様相を知る上で貴重な資料と言える。

③の地域では松木田遺跡、脇山A、B遺跡、広瀬遺跡などがある。松木田遺跡は早良平野が最も窄まる部分の室見川左岸の標高約40mの扇状地に立地する。燃糸文土器単純組成の土器が発見され、押型文土器以前の様相を知る上で重要な遺跡である。近年の調査では押型文土器の出土も見られ、早期の様相が注目される。脇山A、B遺跡では標高約60~90mの扇状地で、明確な遺構は検出されていないが、早水台式から田村式の押型文土器が出土している。周辺の栗尾B遺跡、谷口遺跡などでも同様の遺物が出土している。広瀬遺跡は標高約70~80mの室見川右岸に河岸段丘にあたる。ここでは田村

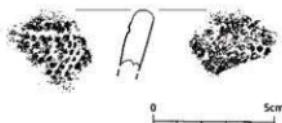


Fig.160 SU15貯蔵穴出土押型文土器図 (縮尺1/1)



Fig.161 押型文土器 (左：内面、右：外面)

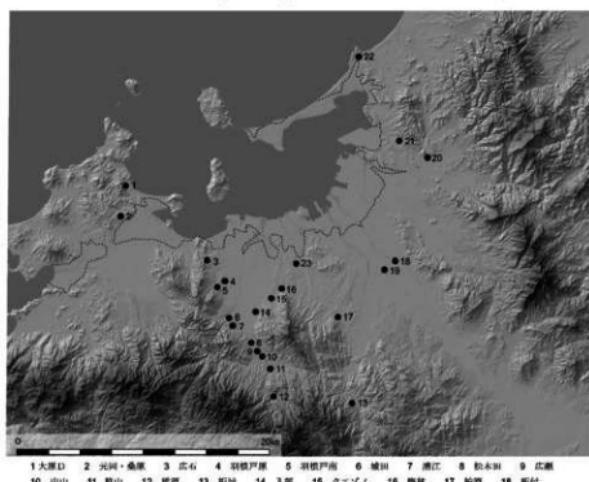


Fig.162 福岡市域の主な縄文早期の遺跡

式の押型文土器に伴って、口縁外面に刺突を巡らせる燃糸文土器が出土している。早期後葉の様相を考える上で貴重な資料である。

④の地域では柏原遺跡群、クエゾノ遺跡などがある。柏原遺跡群は油山から北東に延びる標高約40~80mの低丘陵と樋井川に開析による狭小な沖積地で数多くの遺跡が確認されている。柏原遺跡群は柏原E遺跡、F遺跡で出土した草創期から早期前半の条痕文土器、刺突文土器などがよく知られるが、押型文土器群では柏原A-1、A-2、E、F、k、M遺跡で遺構、遺物が確認されている。押型文土器は川原田式に始まる各時期のものが出土しており、E、F、k遺跡では多数の竪穴状遺構、炉跡などが検出されている。柏原遺跡群ではこのような遺跡が100~300mほどの間隔で分布していることから複時の回帰的行動による遺跡の形成が指摘されている。クエゾノ遺跡は油山から北西に延びる標高約40mの丘陵状に立地する。遺構は検出されていないが、田村式を主体に、下菅生B式の押型文土器が出土している。

これら以外で注目される遺跡として、板付遺跡では古諸岡川の低位段丘にあたる、基盤の八女粘土層の再堆積層上面で包含層を確認している。ここでは早水台式を主体とした押型文土器が出土している。周辺でも那珂君体遺跡、諸岡B遺跡などで押型文土器が出土しており、刻目突帯文土器以前の縄文時代の様相が不明確なこの地域において、埋没した低位段丘面に遺跡が存在することは重要な点である。

第3章 おわりに

包含層や遺構検出作業で出土した石器、今回の資料整理で見つけた縄文土器について先に記す。

石 器 1～6は石鏃。安山岩製の1、2以外は黒曜石製。4は先端部を欠いているが基部の抉りが深く鎌形となっている。5は長さ3.9cm、両縁が中程で括れており、基部の抉りも深く狭い。剥離も大きく、脚部も異様な印象がする。7は石包丁。二つの小孔は両面から穿たれており、両端部は丸みがある。8は磨製石剣の切っ先。鏃が通り、図右縁は角度を変えて研ぎ出している。9は玄武岩製の石斧。中程より折れしており、刃部も同じように欠いている。

縄文土器 1はSU19貯蔵穴出土土器の再整理作業で確認した。曾畠式土器の口縁部近くの破片。胎土は密ではないが小砂粒は少ない。焼成も良好で内外面とも明茶色を呈する。外面はナデ調整の後に細い棒状工具で平行沈線を入れている。沈線は口縁に対して傾斜しており、その長さは約3.2cm。この長さの平行沈線が山形に傾斜を違えながら一周するのだろう。しっかりとした施文であり、破片ながら残りもよい。

本調査区は、舌状丘陵の先端部に当たり桶井川の低平地にも臨んでいることから、周辺部の開発と並んで丘陵利用の開始期や、その後の展開の様子を明らかにできるのではないかと期待した。

弥生時代前期に丘陵西側周縁から先端部にかけて複数の貯蔵穴が分布している。板付I、II式土器であることは、すでにこの時期に周辺の低平地が水田化していることを物語っている。ただ縄文晚期（弥生早期）の土器はきわめて少なく、東西の福岡、早良平野より一時期遅れたのは水田可耕地の面積や水利など自然環境の制約が一因だろう。調査区には弥生前期の住居跡はない。おそらく丘陵基部の高所に営まれ、居住空間と貯蔵穴群とは溝などで区画されていた可能性がある。

弥生中期になると数基の円形竪穴住居跡が展開する。先にも触れたように発掘の詰めを欠き、SC03を切る円形竪穴住居跡を最終確認できなかったが、もう1軒加えるべきである。各竪穴住居跡の出土遺物には大きな時期差はなく、舌状丘陵先端部に5軒が密集していることになる。中でもSC07は排水溝を設け、数度の建て替えを繰り返している。また周壁は床面より一段高い構造であることから何か特別な用途を予想したが、出土遺物ではその違いを掴むことはできなかった。

弥生後期の確かな遺構はなく、遺物も少ないとから次の古墳前期まで土地利用が途切れている。古墳時代前期になると3軒の方形竪穴住居跡が丘陵西縁部に沿って並ぶ。土器やベッド配置などで細かな時期差は指摘できるが、ほぼ同時期と考えている。SC04は弥生中期の円形竪穴住居跡の埋土中に握り込まれ、壁の一部を共有している可能性が高く、古墳前期の竪穴住居跡とすべきであろう。

古代にはSK06、07の竪穴があるのみでその後の遺構はない。ところで4棟の掘立柱建物跡の時期判断が難しいが、柱穴の遺物は弥生土器が主であるものの中世の中国製陶磁器も含んでいることからやはり時期確定はできない。

このような各時代の遺構は、丘陵縁部に集中しており、丘陵中心部が空間部となっている。特に弥生中期には約250m²ほどの空間地を中心にして円形竪穴住居跡が取り囲んだような配置となっている。広場的な土地利用は古墳時代になってしまっても踏襲されており興味深い。

このように舌状丘陵先端部での土地利用、歴史的な変遷を辿ることが可能になったのは集落構造解明上重要な例となろう。さらに遺構は伴わないものの桶井川流域では最古となる細石刃核、本市では南区大牟田古墳群に次ぐ2例目となる硃状耳飾、押型文土器や曾畠式土器などの縄文土器、そして石鏃など各種の石器類（黒曜石総重量約1.6kg）の出土は、この地一帯の土地利用開始期を知る資料として貴重である。これらの遺物は旧石器時代最終末から縄文時代の全期間を通して、さらに現代まで嘗々と生活の場として利用されていたことを裏付けることになり、本調査最大の成果と言えよう。

ところで発掘直後に遺跡パンフを作成したとは言え、長く調査成果を公開しなかった責は大きい。

31年を経て報告書発行に辿り着けたが、調査主任であった飛高氏は早く故人となられ、横山氏も退職された。発掘優先の当時、いろんな理由、事情があったとしても経過した年数を取り返す術ではなく、すべてが言い訳になってしまふだろう。私自身も定年を前にしてあらためて調査担当者としての責任を痛感している。(力武)

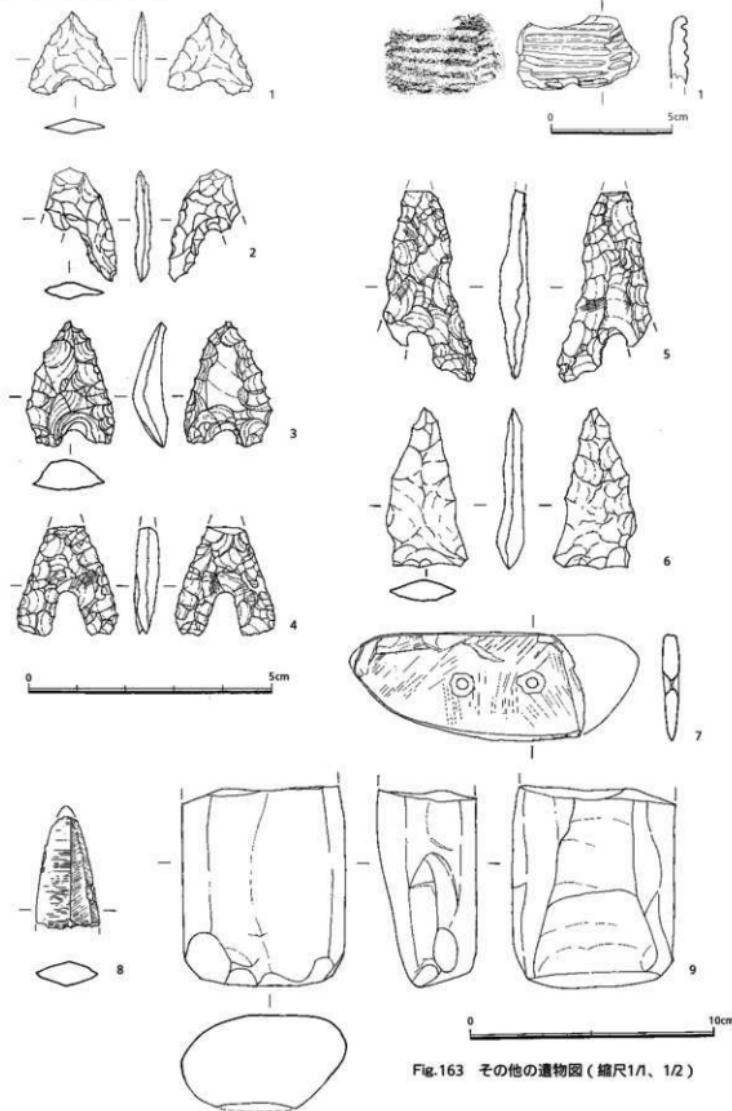


Fig.163 その他の遺物図 (縮尺1/1, 1/2)

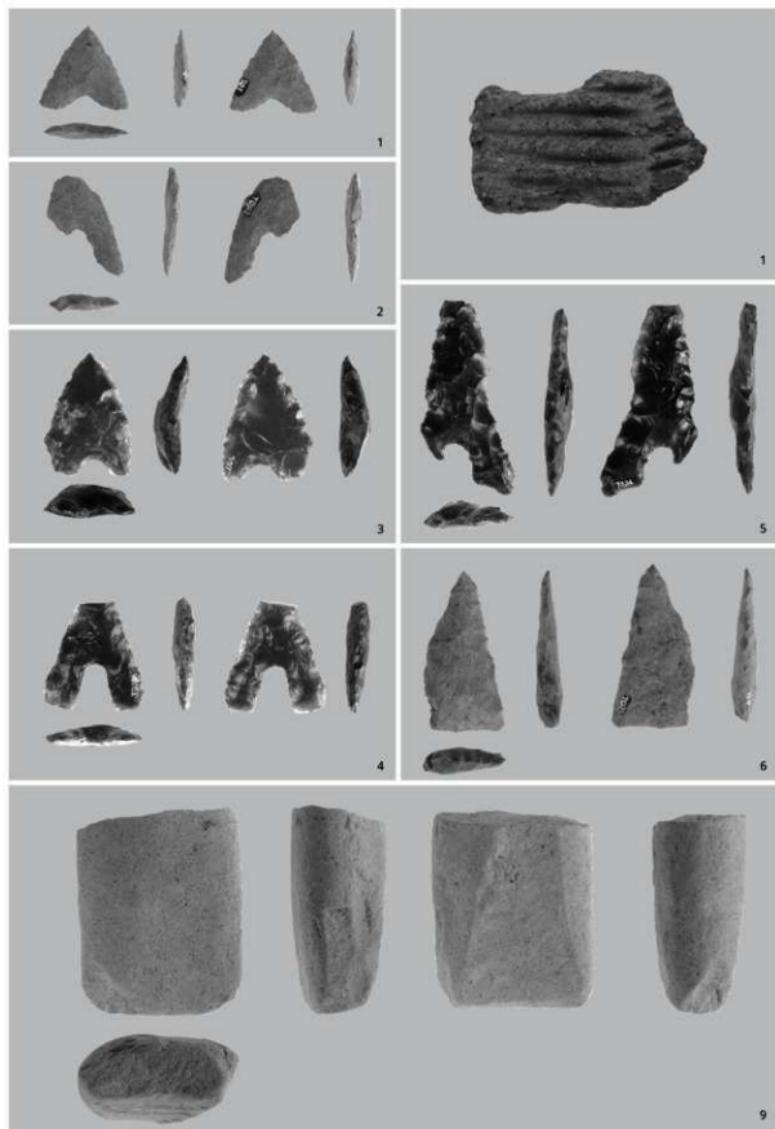


Fig.164 その他の遺物

植物觀察表(土器)

分類	番号	内面	外縁	縁	縁脚	底	地	施 工		施 工		外 壁	内 壁
								外縁	内縁	底	地		
1	SOD1	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	23.6 (6.2)	32.0 (3.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
2	底縫合	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	11.0 (1.6)	14.0 (1.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
1		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	15.3 (0.2)	15.3 (0.2)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
2		底縫合	底	底	底	底	底	19.6 (0.3)	19.6 (0.3)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
71	3 SOD1	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	6.0 (1.6)	11.0 (1.6)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
4		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	30.0 (13.4)	30.0 (13.4)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
5		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (1.0)	0.2 (1.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
79	2 施工	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	31.2 (4.6)	46.0 (18.6)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
1		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	35.0 (1.2)	35.0 (1.2)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
2		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	27.3 (1.1)	41.0 (1.1)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
3		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (1.7)	0.2 (1.7)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
4		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	25.6 (1.0)	30.0 (1.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
5		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.4 (0.4)	0.4 (0.4)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
6		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.5 (0.7)	0.5 (0.7)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
7		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (0.2)	0.2 (0.2)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
8		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (1.7)	0.2 (1.7)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
9		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (0.0)	0.2 (0.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
10		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.1 (0.1)	0.1 (0.1)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
11		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	29.0 (1.0)	35.0 (1.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
13	12 SOD2	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	29.0 (1.0)	35.0 (1.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
12		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	21.2 (3.6)	26.8 (2.7)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
13		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	26.8 (2.7)	26.8 (2.7)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
14		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	26.4 (3.0)	26.4 (3.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
15		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	25.0 (1.3)	25.0 (1.3)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
16		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (0.2)	0.2 (0.2)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
17		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	24.0 (0.0)	24.0 (0.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
18		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.3 (0.7)	0.3 (0.7)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
19		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.6 (0.0)	0.6 (0.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
20		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.4 (0.4)	0.4 (0.4)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
21		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.4 (0.8)	0.4 (0.8)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
22		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (0.2)	0.2 (0.2)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
23		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.4 (0.6)	0.4 (0.6)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
24		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.3 (0.9)	0.3 (0.9)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
1	SOD3	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	24.4 (0.0)	33.0 (0.4)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
90	2 施工	多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.2 (0.2)	0.2 (0.2)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
1		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.4 (0.0)	0.4 (0.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
2		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.1 (0.0)	0.1 (0.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ
1		多子中腹縫合目口	底	底	底	底	底	0.1 (0.0)	0.1 (0.0)	底	底	ヨコナメ	ヨコナメ

遺物観察表(石器、土製品)

頁	Fig	番号	出土遺構	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
19	19	1	SC01住居跡 弥生中期	石鏹	安山岩	2.00	1.75	0.40	0.95	
	25	1		石鏹	黒曜石	2.40	1.75	0.35	0.73	
		2		石鏹	黒曜石	2.00	1.22	0.35	0.71	
		3		石鏹	黒曜石	2.55	1.45	0.50	1.35	
		4		石鏹	黒曜石	1.50	1.23	0.33	0.46	
		5		石鏹未製品	黒曜石	1.93	1.80	0.50	1.45	
	33	6		石鏹	黒曜石	2.67	2.05	0.95	3.56	
		1	SC03住居跡 弥生中期	石鏹	黒曜石	1.93	1.40	0.33	0.42	
		2		石鏹	黒曜石	2.10	1.40	0.48	0.95	
		3		石鏹	安山岩	2.25	1.52	0.35	1.22	
		4		块状耳飾	蛇文岩?	5.30	2.03	0.43	8.19	
		5		石包丁	輝緑岩灰岩	2.45	3.75	0.70	7.79	
		6		柱状片刃石斧	不明	3.90	1.40	1.20	10.46	
		7		石鏹	滑石	3.20	1.55	1.35	9.68	
	34	8		投彈	土製	2.73	1.05	1.45	4.89	
		9	SC06住居跡 弥生中期	投彈	土製	4.85	2.80	2.60		
		10		砥石	砂岩	6.20	3.95	3.20	106.29	
		11		砥石	粘板岩	7.40	4.00	1.30	73.55	
		12		砥石	粘板岩	10.00	3.90	2.20	115.74	
		13		凹鬥	花崗岩	8.60	9.35	2.60	341.25	
	42	1	SC07住居跡 弥生中期	石鏹	黒曜石	2.50	1.40	0.40	0.68	
	49	2		石鏹	黒曜石	2.63	1.40	0.43	1.14	
	3	3		石鏹	黒曜石	2.45	1.85	0.40	1.33	
	4	4		石鏹	黒曜石	2.70	1.95	0.50	51.56	
	50	1	SC02住居跡 古墳前期	細核	黒曜石	3.4	2.1	1.3		
		2		石鏹未製品	安山岩	3.30	2.60	0.82	5.80	
		3		石鏹	黒曜石	1.48	1.40	0.23	0.31	
		4		石鏹	黒曜石	1.53	1.95	0.40	0.89	
		6		石鏹	姫島産黒曜石	1.60	1.75	0.60	1.33	
		7		石鏹	滑石	3.05	1.55	1.35		
		8		石鏹	滑石	2.20	1.40	1.27	5.04	
		9		石包丁	真岩	3.13	2.85	0.40	5.08	
		10		石包丁	砂岩	4.05	5.93	0.50	16.34	
	54	64	1	SC05住居跡 古墳前期	砥石	粘板岩	9.45	2.40	1.90	57.34
		1	石鏹	安山岩	2.70	1.60	0.40	1.30		
	60	1	SC09住居跡 古墳前期	不明	凝灰岩?	2.80	1.85	0.70	4.01	
		2		柱状石斧	真岩	5.85	3.50	2.90	90.58	
		3		未製品	砂岩	6.80	5.20	3.75	126.55	
	64	79	1	SU01貯蔵穴 弥生前期	石鏹	安山岩	2.60	1.70	0.43	1.46
	68	1	石鏹	安山岩	1.45	1.85	0.25	0.56		
		2	石鏹	黒曜石	1.85	1.45	0.32	0.52		
		3	石鏹	黒曜石	1.95	1.50	0.30	0.45		
		4	石鏹	安山岩	2.50	2.60	0.70	4.58		
	73	1	石鏹	粘板岩	3.30	1.35	0.6	1.91		
		2	SU02貯蔵穴 弥生前期	石鏹	黒曜石	1.80	1.30	0.33	0.44	
		3		石鏹	黒曜石	3.10	2.10	0.40	1.80	
		4		片刃石斧	真岩	3.60	2.25	1.10	5.01	
		5		石鏹	砂岩	1.15	1.90	1.40	8.01	
	79	1	SU05貯蔵穴 弥生前期	磨製石斧未製品	玄武岩?	6.30	6.65	2.25	131.90	
		2		石鏹	安山岩?	2.45	2.20	0.50	2.14	
		2		石包丁未製品	真岩	7.50	7.90	1.00	73.04	
		1		石鏹片	黒曜石	1.40	0.75	0.30	0.35	
		1		石鏹	黒曜石	3.87	2.08	0.70	3.50	
	82	116	2	SU13貯蔵穴 弥生前期	尖頭状石器	黒曜石	3.87			
	87	123	1		投彈	土製	3.35	1.80	1.70	7.32
	95	138	2		石鏹	粘晶片岩	4.00	3.10	1.15	21.44
	100	1	SU14貯蔵穴 弥生前期	石鏹	安山岩	3.55	1.40	0.40	1.36	
		2		石劍加工品	層灰岩?	5.20	3.15	0.70	11.95	
		3		石劍	玄武岩	6.65	8.00	2.10	141.48	
	100	152	1	SK07窓穴 古代	石鏹	黒曜石	2.80	2.10	0.53	3.50
	106	1	石鏹	安山岩	1.60	1.70	0.30	0.69		
		2	石鏹	安山岩	2.20	1.65	0.32	0.73		
		3	石鏹	黒曜石	2.50	1.75	0.55	2.27		
		4	石鏹	黒曜石	2.20	2.00	0.45	1.56		
		5	石鏹	黒曜石	3.85	1.75	0.55	2.60		
		6	東南縁部	石鏹	安山岩	3.23	1.60	0.50	2.51	
		7	P-33	石包丁	9.45	4.35	6.5			
		8	P-101	石劍	4.55	2.55	1.05			
		9	東南縁部	磨製石斧	玄武岩	8.20	6.70	3.95	402.78	

ふりがな	たじまびーいち						
書名	田島B 1						
副書名							
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1078						
編著者名	力武卓治						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667						
発行年月日	西暦2010年3月23日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		
たじまびーいせきだ いいじじょうさ 田島B遺跡 第1次調査	ふくあかしじょうなんくたじま よんちょうめよんひゃくさん 福岡市城南区田島4丁目 403	40132	0200	33° 33' 50"	130° 22" 23"	19781101 - 19790217	1400 共同住 宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
田島B遺跡 第1次調査	集落	弥生時代前期、弥生 時代中期、古墳時代 前期、古代、中世、 近世	弥生時代- 貯蔵穴14+ 穫 穴住居跡4 / 古墳時代- 竪穴住居跡4 / 古代- 穫 穴2 / 不明- 穫穴4	弥生時代- 弥生土 器 + 石器 + 鉄器 / 古代- 土師器 + 瓦 / 中世- 土師器 + 輸入陶磁器 / 近世 - 国産陶磁器	舌状丘陵の先端に營 まれた弥生 - 古墳時 代の集落 織文時代 の遺構は未確認だが 織文土器や石器、耳 飾が出土した		
要約	舌状丘陵の先端部に營まれた集落遺跡である。弥生時代前期に貯蔵穴14基が丘陵縁部に沿って配置されている。この時期の住居跡など他の遺構は見つかっていない。弥生時代中期には円形竪穴住居4軒の集落となり、このうち1軒は排水溝をもうけている。古墳時代前期には4軒の集落となる。これらの遺構は貯蔵穴と同じように丘陵周縁部にあり、これらの遺構に囲まれて中央に約250mの空間がある。恐らく広場的な機能があったのであろう。確実な遺構は伴わないが細石刃核、織文土器、耳飾など旧石器時代 - 織文時代の遺物も出土し、この地域の歴史的解明にはきわめて重要な遺跡である。						

田島B 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1078集
2010年(平成22)3月23日

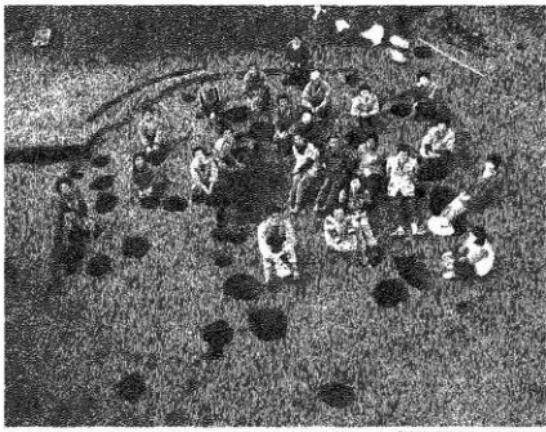
発行 福岡市教育委員会
〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話 092-711-4667

印刷(株)大里印刷センター
〒812-0065 福岡市東区二又通新町12番29号
電話 092-611-3118

The Report of The Research
of Burial Cultural Properties
Fukuoka City Vol.1078

Tajima B Site 1

Fukuoka City



発掘作業のみなさんと (SC01)

23 March, 2010

Fukuoka City Board of Education





田島B道路第1次調査遺構平面図（縮尺1/100）

「田島B 1」
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1078集